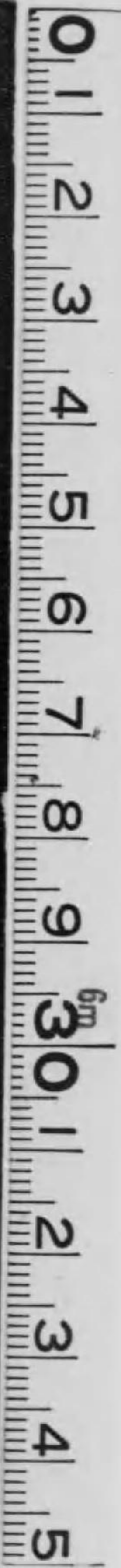


263
6
60



始



263₆-60



國民性の陶冶
を基調としたる

歴史教授日案

東京女子高等師範學校教授
前京都府女子師範學校主事

富士徳治郎
増澤 淑

合著
(二高)

東京 明治圖書株式會社

大正
9.10.11
内交

凡 例

一、本書は大正八年改正の小學校令によりて、高等小學第二學年用日本歴史教科書を教授するもの、爲に、編纂したる教授日案である。

一、本書は多數の教科を一身に擔當して、内には教養に盡粹し、兒童成績物の點檢、研究物の作製等學校諸事務に忙殺され、外に向つては社會教育、青年指導等に、日もこれ足らざる多繁なる初等教育者をして、僅少なる時間と勞力を以て、完備せる教材研究及教授立案をなし、効果多くして遺漏なき、教授をなさしむべき好伴侶たらしめんが爲に、編纂したものである。教法についても

時代思潮を適宜斟酌して居るから、教育實際家は之を座右の友として、教授法の参考書ともなし得るの便あらうと信ずる。

一、現行歴史教科書は、時間數配當が少なかつた舊制に據りて編纂せられたるものであるから、遺憾の點が少くない。即ち歴史教科に對する從來の叫びたる、

(1) 現行教科書は、國民性陶冶上必要なる教材を省略せるものが少くない。

(2) 餘りに學問的・概括的・抽象的で、無味乾燥、歴史的人物の潑刺たる活動を躍如たらしむるの生氣を缺き、爲に兒童をして感奮興起せしむるに適しない。

などの缺點があるから、本書に於ては茲に鑑み、其れ等の缺陷を補はんが爲めに、當時の思想感情の理解によつて、史實の真相を捕捉せしめんことに留意し、以て時代思潮の洞察、偉人・賢哲の人格に對する感應、及び特に國民思操の養成に努力した。

一、歴史科の目的を達するには、教授者自ら史實に精通し、真相を洞察し、自ら歴史中の人物となりて、教授することが肝要である。故に教授事項中に、當時の真相を知るべき必要なる教材を多く挿入した。

一、本書は文部省編纂の教科書・教師用書、及び他の正確なる参考書を取捨選擇して教材を精選し、著者等十數ヶ年間の經驗に基づい

て編纂したものであるから、教授者は他の参考書を一も繙かずして、教壇上に立ち得るのである。

一、本書は必ずしも史學上の定説には拘泥しない。取つて以て國體の概要を知らしめ、國民的志操を養成するに便あるものは、適宜これを採用して居る。

大正九年九月

著者識す

國民性の陶冶を
基調としたる
歴史教授日案 (高二)

目次

第一學期

第一	室町幕府の盛時	一
第二	關東管領	一四
第三	室町幕府の衰亡	二二
第四	室町時代の文物、京都の疲弊	三〇
第五	戰國時代	三六
第六	南蠻人の渡來	四八
第七	織田信長の功業	五三
第八	豊臣秀吉の海内平定	五九
第九	徳川家康の覇業	六九

第二學期

歴史教授日案 (高二)

六

第一〇 江戸幕府の組織と其の政策……………九五

第一一 海外諸國との交通……………一〇三

第一二 基督教の傳來と島原の亂……………一二二

第一三 學問の復興と元祿時代……………一三三

第一四 江戸幕府の中興、寛政の治と天保の改革……………一三五

第一五 尊王論と國學の勃興……………一五〇

第一六 外艦の渡來と開港の顛末……………一五九

第一七 江戸幕府の衰亡と大政奉還……………一八〇

第三學期

第一八 明治昭代の内治、王政復古、維新の戦亂……………一九一

第一九 明治昭代の外交……………二二三

第二〇 明治昭代の外交(つゞき)……………二三三

第二一 大正の大御代と歐洲大戰……………二四六

□附 録 世界大戰亂日誌……………二六一

—(目次終)—

國民性の陶冶を基調としたる 歴史教授日案 (高二)

富士徳治郎 共著
増澤 淑



第一學期
第一 室町幕府の盛時 (三時間)

□要旨 既に本書卷一最終の章に於て、南北朝合一の次第の大要を述べたけれども、兩朝の合一を圖りし足利義満に關しては特に記する所がなかつた。元來義満は足利幕府の紀綱を張りて南北朝の合一を圖り、多年相結ばれし兵亂を解き以て更に其の威信を加へた。後漸く驕奢に耽り終に大義名分を紊るに至つて、後世の讒を免れないけれども、兎も角足利將軍中特に注意すべき人である。されば本課に於ては義満を中心として、先づ兩朝合一の次第を回顧し、次に其の驕奢僭越の事蹟を授け、其の結果明と貿易を開いて府庫の缺乏を補ふに至つた次第を説き、以て義満は足利時代の將軍中

室町幕府の盛時

一

全盛を極めた人であると同時に、大義名分を素りし人であることの記憶を確實ならしめ、且つ室町幕府の組織及び當時に於ける倭寇、并にそれに對する將軍義滿・義持の態度を明かならしめんとするのである。

□教授上の注意

一 恩賞を重くして部下を誘致したる尊氏の政策は、却つて將士を傲慢ならしめ、三代を経たる義滿の時代に於てすら、尙叛亂を企つるもの絶えざりし原因を爲せしものなることを理解せしめねばならぬ。二 義滿の行爲としては之を精細に論じ詰むれば、一の美點だも認むる能はざるに至るものなれども、國民志操涵養に留意する上より見て、後龜山天皇に京都還幸を奏請し爲に還幸あり、父子の禮を以て神器を後小松天皇に傳へ給ふに至りしことを力説し、かゝる間にも皇室を尊崇すべき念は失せざりしことを留意せしめねばならぬ。三 義滿の建築・巡遊は、一面に於て幕府の威勢を天下に示し、以て將士を威服せしめんとすの政策たりしことを了知せしめる。四 義滿が上皇室に對し奎々の誠を致し、下萬民に臨みて緩撫の徳を施すべき位置にありながら、徒らに驕奢を極めて財政を紊亂し、加之僭上の行爲を敢てし國體の尊嚴を蔑視したる罪は、實に恕すべからざることなるを知らしめねばならぬ。五 義滿が明より屈辱を甘受したるは、貿易の利を收めて財政の窮乏を補はんとするものなれば、同情すべき如きも彼の驕奢の結果が、此の大汚辱を來せるものなれば決し

て許すべからざる非行である。故に小學校の教材として同情的の取扱は之を避けねばならぬ。六 當時義滿が驕奢僭越なりしにも拘らず、時人或は北山殿又は公方と尊稱したる事實より、如何に彼の威權の盛なりしかを察せしめねばならぬ。七 義持は父の失體に省みる所あり、明の使者に諫書を與へ斷じて交通を絶ちたる事によりて、其の人格が義滿以上なりし事を察せしめるがよい。

□教材の區分 第一時、室町幕府の成立と組織。第二時、義滿の驕奢。第三時、支那との交通。

第一時 室町幕府の成立と組織

□目的 室町幕府の成立せし順序と、その組織の大要を授けんとするのである。

□教具 日本地圖、京都附近圖、室町幕府の位置略圖、義滿の肖像。

□方法、豫備 一 次の事項の問答。

(1) 吉野朝廷時代の太勢官軍の有様、京都の有様。(2) 後龜山天皇京都還幸の次第を語れ。(3) 將軍義滿は如何なることをなしたるか。二 目的指示。

□教授 一 【室町幕府の成立】

後醍醐天皇の延元三年(北朝の光明院の曆應元年)八月、足利尊氏征夷大將軍に任ぜられ、光明院を擁立して擅に幕府を京都に開き、以て源賴朝以來の武家政治を再興して、其の素志を達したのである。然るに當時戰亂此處彼處に相次いで起り、天下寧日が無かつたので尊氏も亦専ら意を政治に注

ぐことが出来なかつた。爲に足利幕府の基礎は甚だ脆弱であり、幕政も亦完備するに至らなかつた。處が一方に於ては尊氏は南朝に對峙し、反抗する術數上、部下の恩賞を重くして頻りに將士を誘致し、以て己が爪牙とすることに力めてゐたので、その反動として部下の將士はたゞ其の功に誇り思に押れてしまひ、多少でも意に滿たない所があると、忽ち反旗を翻して將軍尊氏に抵抗するの風を生じた。かの高師直の如きは其の最も著しいものであつて、事件は單に師直・直義の不和に止まらず、延いては尊氏・直義の不和を醸すに至つた。遂に將軍兄弟刀戟を執つて互に角逐するに至り、爲に直義は兄尊氏の爲に鎌倉に攻められ、正平七年二月遂に毒殺されたのである。

かく兄弟死を以て争ふやうな有様であるから、尊氏の在職二十一年の久しきに互つたけれども、幕府の威令少しも下に行はれず、後村上天皇の正平十三年四月遂に五十四歳を以て卒去し、此の時十二月其の子義詮繼いで將軍となつたのである。義詮在職十年に及んだが、元來意志薄弱で膽力に乏しく果斷事を決するの勇なく、且つ部下の將士を統御するの能力に缺けてゐた。爲めに強大なる將士は互に勢權を争ひ、其の結果幕府に謀叛して吉野朝廷に降るものさへ少くなかつた。かゝる状態であるから二代將軍義詮在職中は、一に内憂外患の處置に忙殺されて幕政を改革し、整頓することは實に不可能なる難事であつたと言はねばならぬ。

後村上天皇の正平二十二年(北朝後光嚴院の貞治六年)十二月將軍義詮病あり、三十八歳を以て卒し、

其子義滿家を繼ぎ、次いで翌年即ち後龜山天皇の正平二十三年(後光嚴院の應安元年)十二月、年十一歳を以て征夷大將軍に任命された。義滿年齒尙幼少であるから、前に義詮の遺命を受けた管領細川頼之、これが輔佐の重任に當つてゐたのである。頼之温厚であつて知謀あり、廣く人材を求めて特に學識高く、武藝に秀でた者を選抜して之を義滿の師友となし、又質素儉約を獎勵して大に士風の頽廢せるを改め、以て善く義滿を善導補翼したので幕府の政治漸く整ひ、將軍の威令も亦重く下風を望むに至つた。

然るに義滿聰明であつて度量廣闊であつたから、今や其の長ずるに及んでは諸將皆畏敬し、敢へて服せざるものとして無かつた。此に於て義滿邸宅を京都の室町に造り、後龜山天皇の天授四年(後圓融院の永和四年)三月以後此に於て幕政を執つてゐた。世に足利幕府を室町幕府といふのは實にこの爲である。其の結構壯麗邸中植うるに多くの名花を以てし、花御所的美稱をさへ呼ばれた。かゝる壯大なる邸宅を構ふは素より驕奢に出でたりと雖も、一は當時の人心收攬の一策とも見らるべく、又義滿は威を天下に示すため多額の費用を投じて四方の巡遊を試みた。元中五年(後小松天皇の嘉慶二年)に於ける富士遊覽や、その翌年の嚴島參詣の如き實にその著しいものであつて、世人その行装の美麗なるに一驚したといひ傳へられて居る。かゝる間に吉野朝廷に於かせられては、多く柱石の將士を失ひ日に月に衰運に傾いて行く、義滿この機を利用して後龜山天皇の御還幸を請ひ、以

つて一つには専ら天下の政權を掌握し、又一つには天下の騷擾を鎮定しようと思ひ、元中九年(後小松天皇明德三年)大内義弘を吉野朝廷に遣して京都御遷幸を奏請せしめたのである。此の年間十月五日後龜山天皇京都へ遷幸し給ひ、遂に父子の禮を以て後小松天皇に神器を傳へられたので、義滿の權威更に一層の重きを加へた。

併し當時尙前代の餘弊あり、強大なる將士中には鋒を倒にして將軍に反するものが未だ跡を絶たなかつた。即ち山名氏清・大内義弘等はその主なるものである。山名氏清が反旗を翻して京都を攻め、却つて義滿の爲に討ち殺されたのは、後龜山天皇の京都遷幸の前年即ち元中八年であつて、北朝(後小松天皇)の明德二年十二月であるから、此の亂を世に明德の亂といふのである。大内義弘は明德の亂に軍功があつたばかりでなく、翌元中九年には吉野朝廷に使して後龜山天皇の京都御遷幸を請ふなど、足利氏にとつては重要な人物であつた。故に幕府の義弘を遇すること甚だ鄭重であつたばかりでなく、其の家富み其部下の兵も亦強かつたので、漸く幕府を輕視するの念を生じ、後龜山天皇の京都遷幸後七年を経過したる、應永六年十月遂に泉州堺に於て反旗を擧げるに至つた。當時義滿は既に軍職を其の子義持に讓つてあつたが、尙自ら政務を決して居た。此に於て義滿自ら陣頭に馬を進め、諸將を督して是を攻めさせた。此の年十二月義弘奮戦して討死したので、世人この亂を應永の亂と名づけて居る。このやうに三代將軍義滿は後龜山天皇京都遷幸を請ひ、且つ五十七年の

久しい間に互りし爭亂の局を結びて天下を平定し、強大なる諸將の反亂を鎮めなされたので、其の權威益々強く遂に室町幕府の盛時を見るに至つたのである。

二【幕府の組織】 室町幕府の職制は義滿に至つて完備し、大抵は鎌倉幕府の制に倣つたものであるけれども、其の職名其の職責に多少の相違あるを免れない。先づ幕府の庶政を統べるものを管領とした。初め尊氏將軍となるや高師直を執事として庶政を執らせて居つたが、後村上天皇の正平三年即ち義滿襲職の年に及んで執事を改めて管領と稱した。管領は實に鎌倉幕府の執權に相當し、將軍を輔翼して大政を議する所の重職である。故にこの職を以て一家の世襲とすれば、權威一門の手に歸し、其の弊害の及ぶ所遂に挽回し難いものがあるといふ考から、後小松天皇の應永五年義滿は細川・斯波・畠山の三氏をして交々管領たるべき制を定めたのである。世に此の三家を稱して三管領といつた。また幕府の政務は將軍管領及び評定衆が集會して議決した。即ち會議法を用ゐたのである。(評定衆は大政は參與し二十四人より成り一國以上の國持大名より之を任じたのである。)又侍所を設け將士の進退・禁裏・幕府の警固・警察事務、并に謀叛・盜賊・放火等の諸犯罪を檢舉し處斷するにつとめさせた。故に其の長官たる所司の職權甚だ重く、之を一家の世襲とすれば弊害の續出するを免れない。仍て應永五年に四職を定めて赤松・一色・山名・京極の四氏をして交々此の職に任じた。此の外鎌倉幕府の如く諸奉行あり、以て特殊の政務に當らしめた。一例をいへば寺社奉行は神社・佛

閣の事を掌り、唐船奉行は外國貿易の事務を管し、恩賞奉行は恩賞の事に當り、普請奉行は土木に關する事務を執つてゐたのである。其の數總べて四十あまりであつた。地方の制度を見るに各地に守護・地頭あること鎌倉時代と毫も變つてゐない。由來關東は武家政治の根源地で、其向背も亦重要な土地であるから、鎌倉に管領を設けて關東十ヶ國を總管させた。之を世に關東管領又は鎌倉管領といひ、世々足利基氏の子孫之に任じたのである。また九州には九州探題・奥羽・出羽にも亦探題を置いてそれ／＼各地方の政務を分掌させた。探題は遠隔の重要地に在りて一地方の事を奉行し、訴訟成敗を掌り、又は外寇の鎮定に任じた職である。

□整理 一 次の事項の問答。(1)室町幕府の成立につきて述べよ。(2)義滿幼にして家をつぎしも、幕政の振興したるは何によるか。(3)管領とは如何なる職制か。(4)所司・四職・評定衆の職制如何。(5)何故三管領・四職を設けたるか。(6)室町幕府と鎌倉幕府との成立を比較せよ。
二 教科書の讀解。三 質疑應答。

第二時 義滿の驕奢

□目的 義滿が幕政漸く整ひ、その勢力甚大となるにつれて、驕奢に耽りたる有様を知らしめんとするのである。

□教具 京都附近地圖、金閣の圖、永樂錢の圖或は實物。

□方法、豫備 一 次の事項の問答。

(1)目的指示。(2)足利幕府の組織の概要を述べよ。(3)何時の頃かく整ひしものか。(4)義滿の最も缺點とする所は何處にあるか。

□教授 一 【義滿驕奢を極む】

室町幕府の勢盛なるに従ひて、義滿漸く奢侈に耽り、其室町の邸宅の如きは結構壯大華麗、且邸中植うるに名花多く頗る美觀を呈し、時人呼ぶに花の御所といつた。これ實に義滿驕奢の一端を示して餘りあるではないか。爾來幕府の權勢盛なるに隨ひて其の奢侈いよく甚だしく、遂には僭越の行爲を敢へてし、且我が國の體面を辱しめるに至つたのである。後龜山天皇の京師遷幸後二年を経たる應永元年義滿職を其の子義持に譲りて、太政大臣に陞つてゐたが、翌年之を辭し薙髮し名を道義と稱した。時には年三十八歳、併し政務を視ること舊の如く、應永四年には更に別邸を京都の郊外なる北山に營んだ。邸は林泉の雅趣を盡し麋鹿を放つて鹿苑と稱し、庭内に三層の樓あり、押すに金箔を以てし、善美を盡した。因りて金閣の名がある。古代の畫圖・器物等天下の珍奇を此に集め、娛樂の用備はらざるはない。此の時將軍義持既に將軍職に就きて室町の第に在つたけれども、天下の政務は大小となく尙北山の第に於て決せられた。是より人呼んで北山殿といつた。義滿心大いに驕りて遂には己が出入の儀衛を上皇の御幸に擬し、關白以下の公卿を扈從せしめて憚らなかつ

た。是より世義滿を稱して公方といった。其の驕奢僭上、實に我が國史に前後比類がない。(平清盛と比較せしめる。)

□備考 公卿とは位は三位、官は參議以上に在る朝臣の稱である。公方とは元來朝廷を指して云ふ語であつたが、是に至り義滿に用ゐた。其の權盛の盛なのを以て見られる。

二【明と交通して大義名分を素る】義滿の驕奢如上の通りであるから、國庫大に窮乏を告げるに至つた。そこで彼は明と通商して其の利を收めようと思ひ、應永八年使を明に遣はして好を通じた。翌年明使來りて國書を致したが、其の中に「日本國王源道義」の句があつた。然るに義滿悦んで之を甘受し、爾來書を明主に致すや常に「日本國王源道義」と署し、且明の年號を録するなき、大に内外上下の名分を素したのである。爾後彼我的交通頻繁であつて、我が國よりは主に武器・家具等を輸送し、以て彼より多くの明錢を得たのである。かの永樂通寶は實に當時彼より我が國に輸送した所の明錢であつて、是より永く國內に流通するに至つたものである。

□整理 一 次の事項の問答。

(1)義滿の驕奢の有様を語れ。(2)義滿僭上の有様を語れ。(3)金閣・北山殿・花の御所なる語を説明せよ。(4)義滿の明と交通したるは何の目的なりしか、又外交に於ける失態はさうか。(5)義滿の人物を批評せよ。足利氏の人として……帝國臣民として……。

二 教科書の讀解。

第三時 支那との交通

□目的 宇多天皇の寛平六年遣唐使派遣廢止以來、支那との交通杜絶の状態、并にその後の支那との交通の状況を授けんとするのである。

□教具 東亞地圖、倭寇の圖、時代區分圖。

□方法、豫備 一 左の事項問答。

(1)將軍義滿の驕奢僭上の大要を語れ。(2)何故明國と交通するに至つたか。(3)この時以前に於て支那と我が國との關係如何。二 目的指示。

□教授 一【支那との交通の有様】

我が國と支那との國際的交通は、宇多天皇の寛平六年遣唐使派遣を停め給ひし以來全く絶えてゐたのであるが、僧侶・商人等の私に往來するものは、尙一二にして止らなかつた。即ち臨濟宗を我が國に傳へた僧榮西、曹洞宗を傳へた道元、及び道元に從つて入宋し、歸朝後支那の陶法を創めた加藤家正の如きは、其の最も著しい人々である。然るに弘安の役以後は私的交通すら大いに減じてあつたが、足利尊氏將軍となりて天龍寺を建立するや、使を元に遣はして再び通商の道を開き、毎年船二艘を出して之と貿易するに之を許し、歸帆の上は商況の如何、利益の如何を問はず、常に錢五千

貫を同寺に納めしめることとし、後村上天皇の興國三年以來、年々航海通商をさせたのである。世にこの當時の商船を天龍寺船といつた。

後龜山天皇の正平二十三年元亡びて明起り、當時我が中國・四國・九州等の邊民支那朝鮮の沿海に出没して侵掠を恣にするものが多かつた。明人大にこれを恐れ呼ぶに「倭寇」を以てした。倭寇は我が國に對する支那人の呼稱であるから、正しくは日本人の寇の義である。蓋し我が西南の地方は舟楫の便殊に多かつたので、海事思想大に發達し、人民海上の動作に馴れ、夙に輕舟を操つて海外に交通する者が少くなかつたのである。元寇以後戰亂相續きて寧日なく國內の秩序紊れ行くに従ひ、是等邊海の民は黨を結びて海外に渡航し、或は貿易を營みて商利を求め、或は武力を振ひて侵略を恣にし、殊に義滿の頃に及んでは其の風益々盛になり、屬々不逞の明人其氣脈を通じて劫略を極め、侵掠を敢へてするに至つたのである。

爲に明は特に力を用ひて沿海の防備を嚴重にしたけれども、何等の効が無かつたので度々使を我國に遣はして之が禁壓を求めて止まなかつた。然るに將軍義滿驕奢を極め、府庫甚だしく窮乏を告げたので、商利を求めて其の缺を補ふが爲に、公然明との交通を開いて貿易の利を占めた。併し明主の歡心を買はうとして國辱をも顧みず、擅にも日本國王の稱號を甘受し、又明主の請求に應じて屬倭寇禁止の令を下す等、甚だしき失體を敢へてしたのである。随つて義滿の時には幕府と明との交

通漸く繁く邊民の渡航劫略衰へた。應永十五年五月義滿年五十一歳で薨じ、其の子義持職を繼ぐに及びては深く父の失體に省みて、明との交通を擇ばず、彼の使者來るも接見せざるを常としてゐた。應永二十六年明使呂淵が來た。義持呂淵に諭書を以て、我が國は古來神國にして何事も外夷の願使を受くべき國にあらず、宜しく今後の態度を改むべきの書を發せしかば、遂に明人來らざるに至り幕府と明との交通は遂に一時中絶した。其の後再び好を修めたけれども、幕府の末に至りて復倭寇熾きなり、豊臣秀吉の頃にまで全く屏息するに至らなかつたのである。

□整理 一 左の事項の發問。

- (1) 宇多天皇以後の支那との交通を述べよ。
- (2) 倭寇とは何ぞ。
- (3) 義持は何故支那との交通を絶ちたるか。

二 教科書の讀解。

□挿畫の説明 倭寇上陸の圖は我が西邊の民が、朝鮮又は明の沿海地方に出没し、武力に訴へて侵掠を敢へてせんとする状態を描いた想像畫である。其の徒黨少きは數十人多きは數千人に上り、通常七八百石積の和船に乗じ、「八幡大菩薩」の標旗を用ひてゐたが、頗る勇猛であつたから、明人之を八幡船と號し鬼神の如く恐怖したといふ。

第二 關東管領 (三時間)

□要旨 尊氏關東管領を設置し、東西相應じて幕府の基礎を固めんさせしにも拘らず、後には却つて幕府に抵抗し遂に其の終を全うせざりし次第を明かならしむ。

□教授上の注意

- 一 足利尊氏が東國の土地豊饒にして人強く、由來武人勃興の地であるから、此に幕府を置きたかつたが、吉野朝廷の對立の爲めに止を得ず關東管領を置きて、東國の政務を統轄せしめし點に留意して教授せねばならぬ。
- 二 關東管領家の宗家足利將軍家と疎遠になつた譯を探究せしめねばならぬ。
- 三 關東管領家の慘憺たる末路は、一に成氏の猜疑よりその因をなせしを知らしめねばならぬ。
- 四 上杉憲實の行爲を探究して、當時傑出したる武士なりしを悟らしめねばならぬ。
- 五 兩公方と兩上杉氏の生じたる次第を的確に教授せねばならぬ。

□教材の區分 第一時、關東管領家。第二時、永享の亂。第三時、古河公方と堀越公方。

第二時 關東管領家

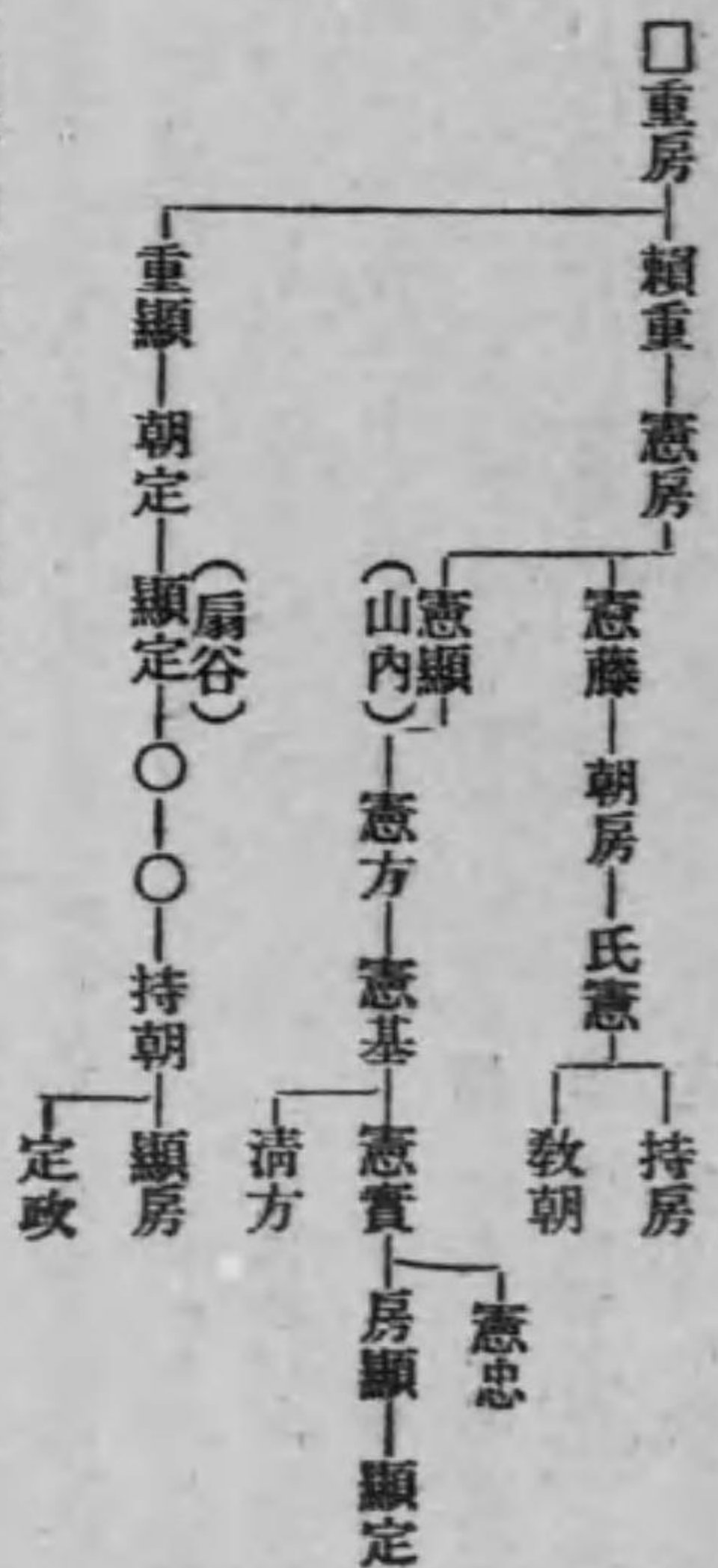
□目的 關東管領家の生ぜしこゝ、及び關東管領と宗家との關係を知らしめるのである。

□教具 (1) 足利氏の系圖。

(2) 關東管領家の系圖。



(3) 兩上杉氏の系圖。



(4) 關東地方圖。

(5) 日本全圖。

□方法、豫備 一 目的指示。

二 次の事項問答。 (1) 關東管領は何のために置いたのでせう。(2) 誰が初めて管領となつたの

ですか。(3)それをたすけたのは何氏ですか

□教授 【關東管領家】

關東管領は鎌倉に在つて東國の政務を統轄して居つたから、一に鎌倉管領ともいふ。抑々東國は由來土地豊饒であつて、人剛健、武人勃興の地として、久しく源氏の勢力を扶植した所であつた。



關東方面圖

故に源頼朝の武家政治を興すや、幕府を鎌倉開にき、其執權北條氏も世々此の地に據りて天下に號令し、下人民に臨んで居た。次いで建武の中興の際には、元弘三年十月足利直義、成良親王を奉じて、先づ此處に來りて東國を鎮し、引續き足利尊氏も亦鎌倉に於て反旗を翻し、東國の大勢を手中に歸した。かくて同年十二月尊氏西上に當り、其の子義詮を此の地に留め、東國を鎮めしめて後日の驥足を伸ばす上に些の後顧の憂なからしめ、天下平定の後幕府を擅に京都に開くに及んで、義詮の

弟基氏をして之に代らしめた。これを關東管領家の祖とす。而して上杉憲顯を執事として之を補佐せしめた。

元中九年後龜山天皇京都に還幸せられ、神器を後小松天皇に譲り給ひて多年の兵亂茲に鎮まりたりと雖も、將軍義滿は依然として京都にあり、基氏の子孫代々關東管領の職を襲ぎ、執事上杉氏亦之を輔けて居た。かくて代を重ねるに隨ひ、關東管領家と將軍家とは血脉漸く疎遠となつたばかりでなく、鎌倉の威望は益々重きを加へ、動もすれば幕府に反抗せんとする形勢のあるあり。遂には將軍に擬して公方と稱し、又其執事を管領と呼び、はては宗家に代りて將軍たらんことを企つるものが出づるに至つた。即ち二代の管領氏滿は後龜山天皇の天授五年(義滿室町の新邸にうつりし翌年)自ら義滿に代つて將軍たらんことを企て、將に兵を挙げようとしたが、執事上杉憲春書を致して大に之を諫め、遂に自殺したので未だ兵を挙げずに中止した。又其の子義兼は職を繼いで管領となるに及んで、驕傲尊大甚だしく、自ら將軍に擬して公方と稱し、執事上杉氏を管領と稱せしめた。應永の亂起るや滿兼は大内義弘に應じて兵を率る、武藏に出陣し東西相應じて亂を起さんとしたが、義弘の敗軍と聞いて止むなく鎌倉に歸つた。その子持氏に至りては遂に宗家に入りて將軍たらんとし、終に永享の大亂を惹起するに至つた。

□整理 一 左の事項を發問す。

關東管領

(1) 關東管領とは何の職分を持つたものか。(2) それをたすけたのは誰か。(3) 後には將軍家と如何なる關係になつたか。(4) 宗家と疎遠になつたわけはさうか。二 教科書の讀解。

第二時 永享の亂

□目的 永享の亂の顛末を知らしめんとするのである。

□教具 足利氏系圖、關東管領家系圖、兩上杉家系圖、關東地方圖。

□方法、豫備 一 左の事項を問答す。

(1) 前回には何を教へしか。(2) 關東管領とは何の役目か。(3) 將軍家との關係はどうであつたか。二 目的指示。

□教授 一 【永享の亂】

□原因 將軍義滿薨ぜし翌應永十六年七月、關東管領滿兼卒して、其の子持氏職を襲ぐや、威勢の盛なるを待みて遂に將軍たらんとの野望を抱くやうになつた。時に京都に於ては義持が將軍であつたが、稱光天皇の應永三十年三月に至り職を其の子義量に譲り、尙且政を視ること故の如くであつた。然るに僅か二年を経、應永三十二年二月將軍義量年十九歳で薨じたが繼嗣がない。よつて義持政を執ること舊の如く、時に幕議或は義持の弟にして僧となれる義圓をして嗣となさうとし、或は關東管領持氏を推して將軍たらしめようとする等、衆説區々として定まらなかつた。かねてより野

心満々たる持氏しきりに將軍たらんことを望んでゐたが、後花園天皇の正長元年義持の薨するに及び其の弟僧義圓を還俗して後を繼ぎ、翌永享元年將軍職を襲いだ。是れ即ち六代將軍義教である。そこで持氏大に憤慨し、「我豈還俗將軍に屈せんや」とて事毎に幕府に反抗するの態度に出で、且つ輕侮すること甚だしかつた。

□鎮定 執事上杉憲實之を憂へ、屢々持氏を諫めたけれども少しも聽かれず、却つて殺さんとしたから憲實は去つて上州臼井の城に據つた。然るに持氏兵を遣して之を討たせたので、憲實使を京都に馳らせて急を幕府に報じた。時に永享十年八月である。將軍義教乃ち持氏追討の勅旨を奏請し、憲實等をして之を討たせた。然るに持氏の軍敗れ形勢日に衰へたので、持氏職を其の子成氏に譲りて罪を謝すべきを請ひ、憲實も亦使を幕府に派して、切に持氏の罪を宥されんことを請うたけれども、將軍義教頑として聽かなかつた。憲實等止むなく鎌倉に入りて持氏を圍むに及び、持氏勢窮り力竭きて永安寺に自殺した。時に紀元二千九十九年、永享十一年二月であつたので、世に之を永享の亂といふ。基氏關東管領となつてから四代九十一年を経てゐる。亂平ぐに及び憲實主君をして遂に自殺せしめるに至つたのを悔い、職を弟清方に譲つて剃髪した。

□整理 一 左の事項を問答し、永享の亂の原因を問ふ。

(1) その結果如何になつたか。(2) 上杉憲實の行爲はさうであらうか。諸方面より判斷せしむ。

(3) 若しこの時上杉氏なかりせば、關東管領家は如何なり居るだらうか。二 教科書の讀解。三 今日時間もあるから御歴代帝號や、年號の暗誦をいたしませう。

第三時 古河公方・堀越公方

□目的 永享の亂後關東管領家衰へ、兩公方に兩上杉家を生じ、關東は全く争亂の巷となりしことを知らしめる。

□教具 關東地方歴史地圖、足利氏系圖、關東管領家系圖、兩上杉家系圖。

□方法、豫備 一 左の事項の問答。

(1) 前回に授けたる所は何か。(2) 永享の亂の顛末を語れ。(3) 最もためになつた人は誰なるか。二 目的指示。

□教授 一 【古河公方と堀越公方】

持氏亡びて後約十箇年間は鎌倉に主なく、東國の實權一時上杉氏の手に落ちてあつたが、後花園天皇の寶徳元年に至り上杉氏は東國の諸將と共に八代將軍義政に請ひ、永享の亂に死を宥されて、當時京都にありし持氏の遺子成氏を奉じて鎌倉管領となした。然るに成氏は上杉氏を以て父母の仇となし、近臣等も亦多く永享の亂に際し、上杉氏に討たれた人々の子孫であつたから、上杉氏に怨を抱いて其の下に屬することを快としなかつた。

かくて成氏襲職後五年を経たる永徳三年十二月、遂に兵を發して不意に憲忠の邸を襲ひて戦死せしめ且上杉顯房の父持朝の第を攻めて之を焼いた。是に於て憲忠の弟房顯等將軍義政の許を得て成氏を攻めた。成氏も亦使を幕府に致し其の憲忠を討つたのは、罪あるが爲で他意なきを告げたが聽かれなかつた。

成氏大に怒り自ら兵を督して、房顯・憲秋・定昌等の軍と諸所に轉戦して互に勝敗あつたけれども、翌康正元年六月駿河の守護今川範忠に命じ、海道の兵を督して鎌倉を討たしむるや、成氏戦敗れて逃れ下總の古河に據り城を築いて此に居た。これを古河公方と稱す。二年を経て長祿元年十二月、上杉氏幕府に請ひ、將軍義政の弟政知を迎へて東國の主となし、伊豆の堀越に居らしめて古河に對抗せしめること三十餘年、これを世に堀越公方と稱した。是より關東の將士多く心を古河に歸し堀越に附く者は少かつたけれども、兩黨の將士相分れて争亂止む時が無かつた。

二 【兩上杉氏】

成氏管領となるや、憲實の子憲忠を求めて父の職を襲がしめ、上杉顯房と共に之が執事たらしめたのである。時に憲忠は鎌倉の山内に居り、顯房は扇谷に居たので之を兩上杉といふ。後年互に相争ひて漸く衰微し、後に北條早雲伊豆に起るに及びて、堀越公方先づ滅され、兩上杉・古河公方も亦相尋で早雲の子孫に亡されたのである。

□整理 一 左の諸項の發問。

(1)兩公方とは誰をいふか。その兩公方の出來たる原因をいへ。(2)兩上杉とは如何。(3)關東の爭亂はその源何に起因するか。二 教科書の讀解。三 質疑應答。

第三 室町幕府の衰亡 (三時間)

□要旨 本課に於ては、六代將軍義教以後に於ける室町幕府の形勢を通覽し、幕府の威望漸く衰頽し來り、應仁の大亂を惹起して地方も亦紊亂し、其の實權は全く權臣の手に歸して、遂に戰國時代を出現したる顛末を授くるのである。

□教授上の注意

一 赤松滿祐が將軍義教を弑せしは、固より積怨の然らしむる處なるべきも、足利幕府の其の盛時に於てすら叛亂跡を絶たざりし所以より推究して、當時の諸強臣が毫も將軍を畏敬せざりし理由を明かならしめること。二 義政が一身を賭して國家の大事に當らざるべからざる時に於て、徒に驕奢遊樂に耽りたるは假令如何なる事情ありとも、苟職の責を免る能はざるを知らしめねばならぬ。三 義政が財政困憊の極に達したる應仁の亂後、尙且つ祖父義滿の盛時を追想して銀閣を營み、政治を放棄したるは又頗る人心を失ひ、遂に憐むべき末路を現出すべき時機を早めたることを知らし

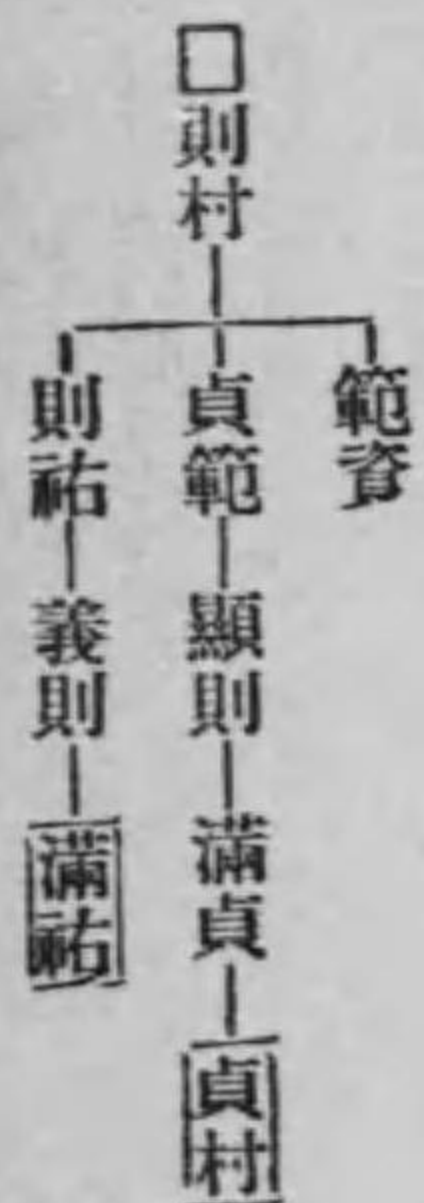
めねばならぬ。四 古來京都の戰場となりしこと少しとせず、然も諸將皆勤王の大義に明なりしを以て、兵燹に罹りしこと稀である。應仁の亂に至りては長くも輦轂の下まで殆ど焦土と化して、大半遂に回復せられざる悲惨の状態なりしを想見せしめねばならぬ。五 松永久秀等の行爲は實に無道なるを憤慨せしめて、かゝる思想はその動機の善惡に拘らず、絶対に我が國家道徳と相容れざることを極言せねばならぬ。而して傍ら當時將軍が如何に無勢力なりしかを知らしめるがよい。六 義昭恩人信長の威名を厭ひて除かんとし、却つて京都を逐はれたるは、己が實力を知らざるの甚だしきものなることを思はせるがよい。

□教材の區分 第一時、幕府の衰微、第二時、足利義政と應仁の亂。第三時、幕府の末路。

第一時 幕府の衰微

□目的 足利幕府が諸將統御に當を失し、其の結果漸く衰微となりし顛末を知らしめんとす。

□教具 足利氏の系圖。赤松氏の系圖。



室町幕府の衰亡

□方法、豫備 一 左の事項の問答。

(1)室町幕府の基礎固からざる理を述べよ。(2)將士の勢強大ならば随つて幕府の威勢は衰微すべし。其れを恢復せんとしたる人は誰か。二 目的指示。

□教授 一 【義教將軍となる】

室町幕府は義滿の時を最も隆盛時とし、義持の晩年より漸く衰運に傾けり。應永三十年義持、職を其の子義量に譲つて尙政を執つてゐた。然るに義量職に在ること僅かに三年にして薨じ、後を嗣ぐべき子が無かつたので、義持の弟僧義圓還俗して名を義教と改め六代將軍となつた。時に自ら宗家の後をついで將軍たらんことを熱望して居た鎌倉管領足利持氏は、事毎に反抗して幕府の命に従はなかつたので、義教乃ち之を滅し、以て將軍の威勢の恐るべきことを示した。

二 【幕府の衰因】 義教關東を滅して勢を張り、また強族の勢を殺がんとした。赤松滿祐は義教が其の寵代赤松貞村の爲に滿祐の所領を割かんとすると聞き、嘉吉元年六月義教を自己の邸に招待して、宴酣なる頃ほひ遂に之を弑し、播磨に歸りて叛した。義教の子義勝將軍となり山名持豊(後の宗全)等を遣して之を攻めて滅した。世に之を嘉吉の亂といふ。かゝる有様にて義教の諸臣跋扈の抑壓は遂に失敗に終つた。然るに嘉吉三年七月義勝病を病み、年十歳を以て薨じ嗣なきを以て、其の弟義政九才にして後を継ぎ、寶徳元年四月に至りて第八代の將軍に任せられた。時に年十四歳で

ある。

□整理 一 左の諸項の發問。

(1)足利持氏の將軍義教に滅されしは何によるか。(2)何の爲に滅したるものか。(3)義教が赤松滿祐に弑せられたる原因如何。(4)諸將士の威を抑制せんとせしは何に起因するか。(5)義教の殺されし以來幕府の威勢はどうなるか。(6)何故か幼將軍、權臣の跋扈。二 教科書の讀解。三 質疑應答。四 帝號及年號暗記。

第二時 足利義政と應仁の亂

□目的 足利義政の税政と應仁の亂の顛末を授けんとするのである。

□教具 足利氏の系圖、足利義政の肖像、應仁の亂の繪畫。

□方法、豫備 一 目的指示。

二 左の諸項の問答。

(1)義政は何歳にして將軍となりしか。(2)こんな幼將軍で政治がされるだらうか。(3)さらでだに幕命を奉ぜざる諸將は、かゝる幼將軍のよく統率し得る所であらうか。

□教授 一 【管領の強大】

義政は義教の第二子である。兄義勝幼にして卒したから義政其の後を承けて家督を相續した。時に

年九歳である。畠山持國・細川勝元交々管領となりて威權を擅にしたから、幕政はいたく衰へた。

二【管領家の家督争】 三管領の一たる畠山家に於ては持國嗣子がなかつたので、姪政長を養子に迎へて家督を定めた。然るに後實子義就生るるに及び、政長を廢して義就を家督とすめた。茲に於て後花園天皇の享徳三年、其の家臣兩派に分れて相争ふて止まなかつた。又斯波家にも後土御門天皇の文正元年に至り、二養子義敏・義廉の相續争があつた。

三【東國公方の對峙】 東國にては將士堀越公方・古河公方の二黨に分れて相對峙し、兵を交ふる事連二年、其の他各地の諸將中には漸く幕府の命に従はぬ者があるに至つた。



義政の晩年に於ける法體の像にて、後久しからざる時に成りたるものなりといふ

足利 京 都 慈 照 寺 義 安 政 置

四【義政の稅政】 かゝる間に將軍義政長じ、幼よりの榮華に馴れて意を政治に留めず、奢侈に耽り或は點茶を弄し、猿樂を演じ園藝を樂み、或は土工を起し、或は八幡・奈良・伊勢等の參詣にかこつけて遊樂を事とし、重稅を民に課して其の費用に充てゝ居た。寛正

二年風雨頻りに至りて海内飢饉に苦しみ、疫病諸所に流行して餓孚・病者路に横はり、死屍路傍に滿つるの慘狀を呈したけれども、義政竟に稅政を改めないで、獨り驕奢を恣にしてゐた。後花園天皇深く之を憤慨し給ひ「殘民爭採首陽薇。處々閉爐鎖竹扉。詩興吟酸春二月。滿城紅綠爲誰肥」といふ詩を賦して義政に賜ひ、以て時事を諷し給ふに至つた。一時は大いに謹慎の意が表はれたが、間もなく舊態に復して徒らに月日を送つて居たのである。

五【應仁の亂】

原因 將軍の施政その宜しきを得ざるのみならず、將軍家の家督争まで生ずるに至つたのである。初め義政子なく弟義視を強ひて嗣と定め、細川勝元を後見せしに、夫人富子やがて義尙を生みしかば、富子を家督に立てんと欲し、山名宗全を結托して將軍たらしめよう企てた。是實に應仁の亂の原因である。宗全は豫てより勝元の威望盛なるを嫉んで居たのであるから、義尙を擁立して思ふがまゝに勢力を張らうとし、其の味方として斯波義廉・畠山義就等を引き、勝元も亦斯波義敏・畠山政長等を引いて之に對抗した。これ亦應仁の亂の一原因である。

戰況 かく應仁元年勝元・宗全の檄に應じて、與黨諸國より馳上るもの甚だ多く、勝元の軍は十六萬を以て東に陣し、宗全は兵十一萬を以て西に陣し、相戦ふたこと連年、勝敗未だ決せざるに先ち、文明五年三月に至り宗全病没し、同年五月勝元亦病没した。兩軍の對立は舊の如くであつたが、文

明九年義親美濃に走るや、諸將士も亦漸く長年月の戦に倦怠し、各戦を収めて領地に歸り、争亂自ら鎮定した。應仁元年より文明九年まで相攻戦すること十一年の久しきに涉り、京都市街は概ね兵燹に罹り、桓武天皇奠都以來七百年に近き帝都も、殆んど荒野と化してしまつた。これを應仁の亂といふのである。この結果朝廷も衰へさせられ、公卿は漸く地方に下り、幕府の威權は地に墜ち、諸大名は各地に割據して亂世の姿となつた。

□整理 一 左の諸項の發問。

(1)應仁の亂の原因を遠因と近因に分ちて話せ。(2)戦況を語れ。(3)この結果はさうなるだらうか。(4)義政の許すべからざる點は何か。(5)京都の兵燹に罹りて大半焼失したる慘狀を如何に思ふか。二 教科書の讀解。

第三時 幕府の末路

□目的 應仁の亂後義政稅政を顧みず、尙銀閣を營みて榮華を極めて政治に怠りしたため、幕府の威望全く地におちてその末路を早めし顛末を授く。

□教具 足利氏の系圖、銀閣の繪、時代區分圖。

□方法、豫備 一 左の諸項問答。

(1)應仁の亂の顛末を語れ。(2)此結果さうなつたか。(3)諸將の狀況はどうであつたか。二 目

的指示。

□教授

□【幕府の末路】 應仁の大亂の中頃文明五年十二月、義政職を子義尙に譲つた。時に年漸く九才、文明十四年義政新邸を東山に營み林泉の巧を盡し、翌年其竣工を俟ちて此に移り、戦後疲弊したる世人の困難をも顧みず、茶道・園藝等に耽りて風流・遊宴を事し、毫も驕奢を改めなかつた。新邸は即ち今の銀閣である。中に二層の樓閣がある。蓋し義政の意、彼の金閣に倣ひて銀閣とするつもりであつたらうが、未だ銀箔を貼らずして延徳二年五十六歳で薨じた。是より幕府の財政大に窮乏し、綱紀全く弛廢し、威信遂に地に墜ちたのである。義尙父に先だちて早世し、義親の子義植入りて將軍職を繼ぐ、此の時に當り斯波・畠山・山名等の諸氏皆漸く振はず、細川勝元の子政元獨り權を擅にし、義植を排して堀越公方政知の子義澄を將軍とした。是より將軍は權臣に擁立せられて、其の虛名を保つに過ぎざるに至つた。既にして細川氏も亦漸く衰へ、其の家臣三好氏専ら權威を振つたが、義澄の子將軍義晴を経て、義晴の子義輝將軍たるに及び、三好長慶出で、遂に幕府の全權を掌握した。かくの如く將軍より管領に、管領より其家臣に權威は順次に下に移つたが、長慶の卒後は更に下に移つて三好氏の家臣松永久秀勢を得、三好の徒と共に義輝を害するに至つた。是に於て義輝の弟義昭は難を地方に避け、義輝の従弟義榮次いで阿波より迎へられて將軍となつたが、間

もなく義榮卒し、義昭織田信長の力によつて職を襲ふた。然るに其後義昭は信長の威名を忌み嫌つて之を除かんとし、却つて信長に逐はれたから、室町幕府は遂に名實共に亡びた。時に紀元二千二百三十三年(天正元年)であつて、尊氏の擅に幕府を開いてから十五代、二百三十七年である。

□整理 一 左の事項の發問。

(1) 義教以後の將軍を順次に數へよ。(2) 三好氏につきて述べよ。(3) 松永氏につきて語れ。(4) 將軍義昭につきて述べよ。(5) 織田信長は何故入京したるか。二 教科書の讀解。三 質疑應答。

第四 室町時代の文物、京都の疲弊 (二時間)

□要旨 本課に於ては室町時代に於て、戰亂頻りに起りて天下寧日なきに、尙よく美術・工藝の著しく發達したる理由、及び其の一般を知らしめ、且當代の美術に大影響を有する禪宗の僧侶が、僅かに文學の命脈を保ちしところをも附説し、進みては當時の皇室の如何に式微せられしかを知らしめ、織田信長の勤王の事績を授けんとするのである。

□教授上の注意

一 室町時代に於ける禪宗の隆盛は點茶の流行となり、支那畫風の流行となり、而して點茶の流行は茶器・庭園・室内裝飾品をして發達せしめたる事を知らしめねばならぬ。二 應仁の亂後地方の將

士爭奪を事とし、利を貪りて飽くことを知らざるのに反し、大内義隆・毛利元就等が進みて即位式の費用を献せしことによりて、戰國亂離の際にありても、常に我が皇室の尊嚴を保ち得たる點は特に留意して力説せねばならぬ。

□教材の區分 第一時、美術工藝。佛教及文學。第二時、京都の疲弊。

第一時 美術工藝、佛教及文學

□目的 室町時代の美術・工藝の發達の狀況、佛教及び文學の發達せる狀況を授くるにあり。

□教具 東山時代の美術工藝遺品の寫眞、繪葉書類、明兆及び雲舟の肖像。

□方法、豫備 一 左の諸項の問答。

(1) 足利幕府の亡びた理由は何によるか。(2) 將軍家に實權のなくなりし原因は何によるか。(3) 銀閣を營みし人は誰か。如何にして暮せしか。(4) 金閣を營みし人は誰か。如何にせしか。(5) 一の時代に最も進歩したる點は何か。二 目的指示。

□教授 一 【美術工藝】

後龜山天皇の京都還幸前、南北兩朝相對峙すること實に五十年の久しきに及び、此の間吉野朝廷は常に力を帝都の恢復に盡し、北朝は之を防止して戰亂絶えなかつたので、美術・工藝の如きは概して衰微して見るべきものがなかつた。然るに其の後足利義滿將軍となり、後龜山天皇の京都還幸を奉

請し政權再び武門に歸して、社會の秩序稍々恢復し、幕府の威勢漸く重きを加ふるや、義滿驕奢を極め且つ幕威を天下に示して、意のままに諸將士を制御しやうこの政略上から、或は四方を遊覽し或は盛に土木を興し、榮華を極めたので文物漸く復興した。かの花の御所、金閣の如きは結構壯麗、裝飾善美を盡した建築物であつて、在京の諸將も亦之に模倣して邸宅を造營し、以て華美奢侈を爭ふやうになつた。是に於て鎌倉時代の武士の特に重んじた質素の美風忽ちにして地を拂ひ、建築・園藝及び其他の美術・工藝之が爲に勃興するの素地を開くに至つたのである。八代將軍義政職を襲ぐや、祖父義滿の豪華に倣うて驕奢を極むるこゝ更に甚だしく、遊宴歌舞に耽り頻りに土木を興し、能樂を演じ、又深く點茶を好み盛に書畫・骨董の類を愛玩した。義政應仁の亂後天下甚だしく疲弊せるにも拘らず、洛外東山に閑居し先づ銀閣を造り其の傍なる東求堂には茶室を設け、古書畫・古器物を集め、茶の湯に耽りて茶人を近付けてゐた。此の風一般に武人の間に移りて點茶の流行となり、茶亭の建築・庭園の造營・書畫・器物等の嗜好を促し、爲に諸種の美術・工藝進歩し、漆器・陶器・繪畫等は大いに發達したのである。世に此の時代を東山時代といふ。

又繪畫は早く鎌倉時代に禪僧によつて宋・元の畫法を傳へられ、爲に從來の纖巧濃艶なる畫風衰へ、淡彩省筆一に雄健なる筆力を尙ぶに至つたが、室町時代に入つては此の畫風著しく發達した。即ち當代の畫題は主に山水・花鳥等であつて、將軍義持の頃には京都東福寺に僧明兆といへる有名な畫工



五 百 阿 羅 漢 畫 像
明 兆 筆 (京 都 東 福 寺 藏)

がゐた。又僧雪舟は將軍義政の頃明に遊びて歸朝し、大いに其の畫才を顯した。次いで狩野元信出で、和・漢兩畫の長所を折衷して新に一家の畫風を開き、狩野家三百年の業を創始し、世に狩野古法眼と稱せられて居る。其の子孫畫家となつて多くの名人を出した。

二【佛教及び文學】 室町時代の佛教は鎌倉時代の後を承けて禪宗最も盛に行はれ、朝廷に於ては時に此の宗の高僧を禁中に引見し給ひ、或は禪院に臨幸して聽法歸依し給ひ、足利家も亦篤く禪宗を信仰して禪僧の優遇をはかり、更に新に禪刹を建立したのである。故に禪寺の勢最も盛にして、京都五山(東福寺・萬壽寺・建仁寺・天龍寺・相國寺)、鎌倉五山(淨妙寺・淨智寺・壽福寺・圓覺寺・建長

寺) なごみ稱する名高い寺院があつて、世の尊敬特に深かつた。そして當時是等の禪刹中よりは碩學高僧多く輩出し、中には支那に赴いて文學を修める者も少くなかつた。戰國亂離の際に當りて尙よく文學の命脈を維持し得たのは、全く是等の禪門僧侶の力であると言はねばならぬ。

□挿畫 茶の湯Ⅱ室町時代の點茶の様の想像畫である。

□整理 一 左の諸項發問。

- (1) 足利時代に文物の復興したる有様について語れ。(2) 東山時代とは如何なる時代をいふか。
- (3) 義政の風流なりしにより世に影響せし點如何。(4) 繪畫をよくする人にはどんな人があつたか。
- (5) 佛敎文學の状態につき語れ。(6) 戰國亂離の際によく文學を傳へしは誰の力によるか。二 敎科書の講讀。

第二時 京都の疲弊

□目的 室町幕府衰へて京都の疲弊甚だしく、殊に我が皇室の御衰微せられし模様を語り、なほ各地の群雄は常に心を皇室に傾けたる美點を力説し、織田信長の誠忠を稱讚せしむべし。

□教具 信長の皇居修繕の圖、皇統御系圖。

□方法、豫備 一 左の諸項發問。

- (1) 戰國爭亂の際に於ける京都の模様はさうであつたか。(2) 皇室の御衰微を修理申し上げた武士

は誰か。(3) その模様につきて語れ。二 目的指示。

□敎授

□【京都の疲弊】 應仁の亂後室町幕府の威令全く地方に及ばず、たゞ僅かに山城一圓に過ぎざるに至るや、諸大名各地方に割據して領土の爭奪を事とし、幕府の所領、公卿の私邑等何れも之が爲に横領せられ、朝廷の御領地も亦此の禍を免れたるこゝがなかつた。だから諸國の貢賦殆ど絶え、朝廷に於ては畏くも日常の供御にすら事缺き給ふことあり。幕府も亦僅かに山城一國から納める租税により、或は富商に借りた金で辛くも其の命脈を保つてゐるやうな有様となつた。然るに公卿の困窮は更に之より甚だしく、其の大多數は京都を去り縁を求めて諸國を流寓し、或は寺院・大名等に寄食したのである。

之に加ふるに京都は久しく兵馬惚惚の巷となつて居たのであるから、其の荒廢實に甚だしく、宮垣は破れゆくのにかかせて修理せられず、賢所の御燈の光は遠く三條橋上より望むを得たといふことである。明應九年九月二十七日後土御門天皇崩御し給ひしも奉葬すべき費用なく、四十餘日を経十一月十一日漸く葬り奉るを得たりといふ。かゝる有様であるから恒例の御儀式も多くは廢絶し、即位の大禮の如き臨時の御儀式は容易に行はれない。明應九年十月後柏原天皇踐祚し給はれたが、國用乏しいので之より歳を経るこゝ二十餘年大永元年三月に至り、本願寺の僧光兼黄金一萬兩を獻す

るに及び、漸く即位の大禮を挙げ遊ばしたのである。

後柏原天皇在位二十七年大永六年に崩じ給ひ、後奈良天皇踐祚し給ふ、又もや國費乏しく即位の大禮を行ひ給ふを得ず、然るに御即位後十年天文五年二月に至り、漸く大内義隆の獻金によりて大禮を舉行し給ふた。後奈良天皇在位三十二年にして弘治三年崩御、正親町天皇御踐祚せられ、三年にして永祿三年正月毛利元就の獻金により即位の大禮を行はせられたのである。開闢以來朝廷の御衰微蓋し此の時代より甚だしきは無いけれども、天壤無窮の皇運は固より動搖する筈がない。各地に割據して領地の爭奪を事として居た群雄も、常に心を皇室に傾け、先づ織田信長入京して御所を修理し、御料を獻するに及び、京都稍々舊觀に復したのである。信長のよくこの間に處して皇室を尊崇したるは、實に推奨すべきの事柄である。

□整理 一 左の事項を發問して思想を整理す。

(1)幕府及び公卿の衰微せる有様を語れ。(2)皇室の御疲弊の有様を語れ。(3)當時の國民はこれを見て如何に感ぜしか。自らの疲弊に如何にもする能はざりしなり。(4)御幫助申上げたるは誰々なるか。(5)當時の人心は皇室を如何に思ひしか。二 教科書講讀。三 帝號の暗誦。

第五 戰國時代 (四時間)

□要旨 應仁の亂後幕威全く地に墜ち、群雄四方に割據し、互に吞噬を逞うし、天下紛亂歸する所なかりし戰國時代を現出するに至りたる次第を知らしめんとするるのである。

□教授上の注意

一 群雄割據の略地圖を作成して、各地方の形勢關係を圖上にて明らかにするがよい。二 兒童は一般に後に記載せられたる事項は、時の關係を誤るものである。時代區分圖・年代表を示し、或は人物を年齢比較表として一見その關係を明らかならしめねばならぬ。三 戰國時代史は兒童の歡迎する資材に富む。されど兒童の嗜好に投ぜんとして濫りに細密を説くの弊に陥つてはならぬ。要領の把握、國民精神の推移、時代思潮の通觀を忽にしてはならぬ。四 武田・上杉・北條の三氏が何れも其の宿志を達するを得ざりし所以を推究せしめねばならぬ。五 道義心の頽廢其の極に達し下剋上の風天下に瀰漫せる時代に於て、尙諸英雄が朝廷を尊崇し、將軍を推戴せんとして大義名分を尊重したるは、實に我が國體の尊嚴なるによるこゝを明に知らしめねばならぬ。六 戰國時代の諸英雄の大理想は、京都に入りて皇室を中心として、天下に號令せんとしたるに在ることを知らしめるがよい。

□教材の區分 第一時、關東地方の形勢。第二時、奥羽本州中部の形勢(今川・武田)。第三時、中部の形勢(上杉・朝倉氏等)、近畿地方の形勢。第四時、中國四國九州地方の形勢。

第一時 關東地方の形勢

□目的 足利幕府の末、關東地方の全く争亂の蒼と化せし所以につき知らしめ、兼て和衷協力を缺くものは自滅の止むを得ざることを悟らしめんことを目的とするのである。

□教具 北條早雲の肖像、群雄割據の圖。

□方法、豫備 一 右の諸項の發問。

(1) 前回には何のお話をせしか。(2) 京都の將軍家の衰へたる有様は如何?(3) 地方は如何になりしか。二 目的指示。

□教授

一 【諸將各地に割據す】 後土御門天皇の文明九年十一月、應仁の亂の戈收まつてから諸大名各其の領國に歸り、兵を隣境に交へて互に領地の掠奪を事とし、遂に群雄割據の勢をなした。然るに室町幕府には諸大名を制馭するだけの實力がなかつたので、其の命令少しも行はれず、後土御門天皇、後柏原天皇、御奈良天皇、正親町天皇の御四代百四年の久しきに涉つて、天下争亂相繼ぎ殆んど寧日無きの有様であつた。故にこの時代を戰國時代といふ。要するに應仁の亂中、京都の一小區域で行はれた争亂が、此の亂後に於て其の範圍自らひろまり海内各地に蔓延して、いはゆる戰國時代を現出したのである。此の時代には道義心全く地を拂ひ、諸將士の眼中たゞ領土の擴張あるに過ぎなかつたので、部將の主家を倒して新に家を興すもの多く、鎌倉・室町以來の舊家は概して此時代に衰へるに至つた。

二 【關東地方の形勢】 後花園天皇の長祿元年十二月、將軍義政の弟政知堀越公方となり、古河公方成氏と相對抗せし以來、關東地方の諸將士も亦二つに分れ、争亂三十餘年の長年月に涉つて居つた。政知職に在るこゝ三十五年、後土御門天皇の延徳三年四月病んで薨じ、其の子茶々丸後を繼いだれども性暗愚、讒を信じて賢臣を殺したので大いに人望を失ひ、其の家亂れ國中動搖しはじめたのである。時に伊勢の人、北條早雲弓箭修業のため關東に下らうとして駿河に至り、其の領主今川氏(義忠・氏親父子)に事へて遂に武將とまでなつて居た。早雲、茶々丸が人心を失へるをきき、且つ其内訌に乘じ堀越を襲つた。茶々丸防戦利あらず遂に自盡した。早雲乃ち伊豆の諸城を徇へて韭山に據り、或は租税を減じ或は雜課を除く等仁政を以て國に臨んだから衆皆悦服した。當時古河公方成氏尙存命であつたが、其勢已に衰へ、山内・扇谷の兩上杉氏亦相戦ひて關東大いに亂れた。依つて早雲は先づ要害堅固なる小田原城(扇谷の部將大森氏の居城なる)を取らうと思ひ、頻りに城中の動靜を搜り、遂に明應四年二月(伊豆略取より四年の後)鹿狩に托して箱根山の嶮を越え、急に小田原城を攻めて城を略取し、こゝに移つて關東經營の根據地をなした。之より後早雲兩上杉氏を滅さんせしめ志を遂げず、後柏原天皇の永正十六年八月病みて没した。時に八十八歳であつた。子氏

綱 亦兵に長じ、大永四年正月大舉して江戸城を取つたのを始めとし、頻りに關東に於ける諸城を畧取して其の威遠近に振つたが、後奈良天皇天文十年に至つて卒した。子氏康も亦善く兵を用ひ兵力いよく盛である。即ち天文十三年には扇谷の上杉氏を滅し、更に同二十年に至り山内の上杉憲政を越後に走らしめ、弘治二年には古河公方を滅し以て關東地方の大半を征服した。世人早雲系統の北條氏を後北條氏と云ふて居る。

□整理 一 左の諸項質問。

(1) 戦國時代とは何であるか。(2) 北條早雲の起つた順序を話せ。(3) 早雲の子孫はみんなであつたか。(4) 何故關東地方は何れも北條氏の畧取に任ずるに至つたのだらうか。二 教科書の講讀。

第二時 奥羽、本州中部の形勢(今川・武田)

□目的 戦國時代に於ける奥羽地方の形勢、本州中部の形勢より武田氏を説き、傍ら年代の觀念を整理す。

□教具 群雄割據圖、今川氏系圖、武田氏系圖、今川義元、武田信玄の肖像。

□方法、豫備 一 左の諸項の發問。

(1) 戦國時代とは如何なる時代であつたか。(2) 關東地方に覇を稱へしは誰なるか。(3) 北條早雲は如何にして立身せしか。(4) 北條氏の全盛を極めたのは何時か。二 目的指示。

□教授

一 【奥羽地方の形勢】 奥羽地方には南部・秋田・伊達等の諸氏割據して伊達氏最も勢強く、次第に其の領地を廣め奥羽第一の雄藩であつたが、其の地東北に偏せるが爲め、自ら中央の大勢には影響する所が少かつた。

二 【本州中部の形勢】 本州中部地方に割據した諸將も少くなかつたが、特に著しいのは駿河の今川氏、甲斐の武田氏、越後の上杉氏である。

(1) 今川氏 は足利氏の一族である。足利氏の祖義康の玄孫國氏、三河國幡豆郡今川庄に住せしを以て、其の子孫は今川氏と稱した。駿遠二國を領して其の勢が盛であつた。殊に義元が出るに及んで、三河をも從へて其の威望海道を壓した。正親町天皇の永祿三年(紀元二千二百二十年)義元大兵を發して尾張を攻め桶狭間に陣した。然るに義元風雨烈しき一夜、織田信長に襲はれて敗死し、其子氏真家を嗣いで居つたが、暗愚であつて佞人を近づけ國政大いに亂れた。爲に其の國人氏真を忌んで去る者多く、徳川家康の如きも今川氏に屬してゐたが、義元の死後信長と相和して三河遠江を併呑し、武田信玄亦駿河を奪ふて今川氏は遂に滅亡した。

(2) 武田氏 は源義家の弟義光の後である。代々甲斐を領してゐた。戦國時代に至つて信玄が出た。沈勇であつて戦術に長じ、後奈良天皇の天文年中屢々兵を信濃に出して之を略し、其の結果越後

の上杉謙信と川中島に戦ふことゝなつた。是れ有名なる川中島の合戦で、會戦兩度(第一回は後奈良天皇の弘治元年七月、第二回は正親町天皇の永祿四年十月)に及んだが勝敗決せず、兩雄の武名は之によつて天下に轟き其後久しく甲越相對立した。信玄夙に京都に上つて諸將に號令せんとの大志を懷いて居つたから、其機漸く熟すと見るや先づ銳鋒を南方に轉じ、永祿十二年駿河を略し、更に元龜三年自ら兵四萬五千を率ゐて遠江に入り、十二月三方ヶ原に於て織田・徳川の聯合軍を破り、翌天正元年進んで三河に入り、野田城を圍み一夜銃丸に中りて俄かに病に罹り、甲斐に歸らんとして途に信濃の駒場で卒去した。次いで其の子勝頼後を繼ぐや、嬖臣を近づけ相謀りて天正三年五月三河に攻入り、復び織田・徳川の聯合軍と長篠に戦つたけれども、其の軍敗れて宿將老臣多く之に死し、武田氏の勢是より大いに衰へたのである。

□整理 一 左の諸項の發問。

- (1) 戰國時代に於ける奥羽地方の形勢は如何。(2) 今川氏に就きて語れ。(3) 武田氏に就きて述べよ。(4) 川中島の戦ミ桶狭間の戦ミの年代を比較せよ。(5) 北條早雲の小田原城をこりたると、信玄の三方原に織田・徳川の聯合軍を破つたのミの年數の差は、凡そ何年か同上。二 年號の暗誦。
- 三 教科書の講讀。

第三時 近畿地方の形勢、本州中部の形勢(上杉・朝倉氏、一向一揆)

□目的 戰國時代に於ける本州中部地方の英雄、上杉氏・朝倉氏及び一向一揆等の状態ミ、近畿地方の形勢を説くのである。

□教具 戰國時代群雄分據圖、上杉氏の系圖、朝倉氏系圖。

□有間皇子—家高—(朝倉)……敏景—教景—貞景—孝景—義景

□方法、豫備 一 目的指示。二 左の諸項の發問。

- (1) 戰國時代に於ける英雄を挙げよ。(2) 中部地方に於ける重なる英雄は如何。(3) 武田信玄の相手として世に知られたるは誰か。(4) 川中島の戦況について語れ。

□教授 一 【本州中部の形勢】

(1) 上杉氏 武田信玄ミ川中島に戦つて勇名を天下に轟かした上杉謙信は、長尾爲景の子である。長尾氏は平高望の子良文の後裔であつて、代々關東管領上杉氏に仕へて居つたが、後主家の衰微に乗じて自立したのである。謙信出づるに及び其の勢殊に強く、悉く越後を従へ、更に兵を加へ、越の諸國に出して北陸を威壓した。天文二十年山内の上杉憲政、北條氏康に破られて越後に來り、以て謙信に投ずるに及び、遂に父子の約を結んだ。憲政乃ち其の管領職ミ系圖とを謙信に譲つたので、謙信遂に上杉氏を相續し、關東を恢復しようとして、屢々北條氏ミ兵を交へ、又村上

義清の請を容れて信玄・川中島に戦ひ、以て北陸に雄視した。謙信も亦夙に京都によりて將軍を擁して天下に號令しようとの大志を抱いて居た。時に信長に逐はれた足利義昭及び信長と不和なる。石山本願寺の内應を得たので、紀元二千二百三十八年(天正六年)三月將に大兵を進めて京畿に向ひ、以て信長と雌雄を決さうとし其準備整つてあつたけれども、出發豫定の日に先つこと二日偶々病に冒されて卒したのである。かくて其の養子景勝家を繼いであつたが、上杉氏は是より進取の勢を失つてしまつたのである。

(2) 朝倉氏及一向一揆 以上三氏の外越前に朝倉氏がゐた。朝倉氏はもと斯波氏の家臣であつて、主家の領地越前を監してゐたのであるが、應仁の亂後、斯波氏の衰へたのに乘じ自立して家を興したのである。義景出づるに及び其の勢甚だ振つて來た。又當時北國には一向宗の一揆あり、其の勢猖獗を極めた。一向宗とは彼の親鸞上人の開いた眞宗の別名である。後土御門天皇の文明年中親鸞七世の孫蓮如、越前に赴いて道場を創め以て布教に従事してゐたが、蓮如文學に長じ、辯才ありて説教に巧であつたから加・越の老若男女翕然として之に歸依した。蓮如亂世に處するには兵力の必要なるを思ひ、兵食を蓄へ時に威力を以て布教に従事したので、無賴の徒の來り投するもの少くなかつた。此の頃一向宗の内にも數派あり、加賀に於ては本願寺派・高田派互に勢力を振つてゐた。然るに加賀の守護富樫政親、本願寺派を疎んじたので、其の宗徒蜂起して富樫氏を攻

め遂に之を滅した。是より本願寺派の宗徒は常に高田派と戦ひ、之を國外に放逐し一時は加賀一國を占領し、更に能登越中を侵略するに至つた。併し朝倉義景の勢熾であるから、獨り越前のみは一向一揆の禍を免れてあつたけれども、加賀・能登・越中の三國は之が爲に國內常に騷擾を極めたのである。要するに一向一揆は互に異宗派の排斥に基づく戰亂であるが、鎧衣圓顚の徒刀戟を執つて争鬪殺伐を事とし、守護を亡すに至つたのは實に言語道斷である。

二 【近畿地方の形勢】

近畿地方には細川・畠山兩管領家多くの所領を有して、一時頗る勢力があつた。然るに應仁の亂後時勢の推移すると共に畠山氏先づ衰微し、其の所領南畿(紀伊・河内・和泉・大和)は分裂して諸將の領有に歸した。次いで細川氏衰ふるや、其の勢權は家臣三好氏に移り、三好氏の臣松永氏後更に三好氏に代つて勢を得た。近江には京極氏ありて一時勢を振つてあつたが、其の衰ふるや家臣淺井氏家を興し、伊勢には南朝の遺臣北畠氏があつて僅かに昔日の勢力を維持して居た。

□整理 一 次の諸問を發して説話の大意を纏む。

- (1) 上杉氏の興りし有様を語れ。(2) 川中島の戦の原因を問ふ。その戦況はどうであつたか。(3) 一向一揆について述べよ。(4) 近畿地方の形勢は如何。二 教科書の講讀。三 年號の暗誦。

第四時 中國・四國・九州地方の形勢

□目的

戦国時代に於ける中国・四國・九州地方に割據せる諸英雄の形勢を説く。

□教具

戦国時代群雄割據圖、尼子・大内・毛利・宇喜多・長曾我部・島津諸氏の系圖、毛利元就の肖像。

□方法、豫備

一 目的指示。二 前回には何のこゝを授けしか。

(1) 本州中部に於て覇を稱へた英雄は誰々なりしか。(2) 近畿地方に於ける状態はさうであつたか。

(3) 中国・四國地方の英雄は誰々なるか。

□教授 一 【中国地方の形勢】

(1) 尼子氏 中国地方の東部は赤松・山名等の諸氏一時勢力があつたが、何れも次第に衰微し、尼子經久出雲に起りて因・伯二州等山陰道の大半を従へ、東は赤松・山名の二氏に抗し、西は大内氏に抗して勢力甚だ盛であつた。尼子氏は京極氏の一族であつて、初め近江犬上郡尼子に住してゐたので尼子氏を稱したのである。

(2) 大内氏 大内氏は世々防長を領して山口に居つたが、義弘の時には更に筑・豊・石の諸州を略して、其の所領九州の北部までも及んで居つた。義興に至つては更に勢を東方に廣めて藝州を略し、遂に筑・豊・防・長・石・藝の六州を併有して大いに中国に雄飛したのである。將軍義植、細川政元に排斥せらるゝや、走りて身を義興に寄せ、應仁の亂後京都疲弊の際には來りて義興に寄食する公卿も亦多かつたのは一に之が爲である。然るに義興の子義隆嗣ぐに及びて、驕奢を恣にし文弱に

流れた。老臣陶晴賢大に之を憂ひて切りに之を諫めたけれども聽かれず、却つて疎んぜられてしまつた。晴賢之を怨み後奈良天皇の天文二十年(紀元二千二百十一年)九月兵を率ゐて、不意に義隆を山口に襲ふて自殺せしめ、義隆の姪義長を立て、其の嗣とし、以て自ら勢權を擅にした。然るに大内氏の部下毛利元就、晴賢を嚴島に討ちて之を滅し、遂に大内氏に代つたのである。

(3) 毛利氏 毛利氏は大江廣元の後裔である。代々安藝に於て大内氏に屬して居た。天文二十年陶晴賢、義隆を殺すや、毛利元就主君の讐敵を報ぜんものと思ひ、弘治元年兵を起し、嚴島に據りて故らに晴賢を誘致し、一夜風雨に乗じて進撃し、一舉晴賢を斬り更に山口に攻寄せた。大内義長爲に敗北し、大内氏の所領遂に毛利元就の掌中に歸したのである。正親町天皇の永祿九年十一月出雲の尼子義久を討ちて之を滅し、其の所領を收めたのである。而して十餘ヶ國の地を領するに至つた。

(4) 宇喜多氏 毛利氏勢を中国に振ふに至つた頃、備前に宇喜多氏起りて漸く勢を得、遂に山陽道の東部に雄飛するに至つたのである。

二 【四國地方の形勢】 四國の東部なる阿波・讃岐は管領細川家一族の所領であつたが、三好氏主家に代つて實權を握るに及んで其の領地となつた其の頃伊豫には河野氏あり、土佐には長曾我部氏外六氏割據して居たが、長曾我部元親出るに及んで次第に勢を増し、遂に四國の大部分を併呑した。

三【九州地方の形勢】此の頃九州にも諸將割據してゐたが、中でも著名なのは筑前の少貳氏、豊後の大友氏、薩摩の島津氏等であつた、然るに少貳氏次第に衰へて其の家臣龍造寺氏肥前に起りて自立し、大友氏も亦漸く衰へて勢振はなくなつた。かくて島津氏の勢力最も強く、遂に九州一國を威歴するに至つたのである。

□整理 一 左の諸項の發問。

(1) 中國地方に於ける戰國時代の英雄を挙げよ。(2) 尼子氏及び大内氏に就きて語れ。(3) 陶晴賢の事蹟如何。(4) 毛利元就について述べよ。(5) 宇喜多氏について語れ。(6) 四國の形勢はどうであつたか。(7) 九州に割據した英雄は誰々か。二 教科書の講讀。

第六 南蠻人の渡來 (一時間)

□要旨 西洋に於ける航海術の進歩は、西洋人をして東洋の富源に着目せしめ、葡萄牙・西班牙兩國をして東漸の先驅たらしめたことを明にし、彼の渡來が我國當時の軍事上・商業上に影響せることの大なるを知らせるのである。

□教授上の注意

一 歐人東漸の次第を説き、當時歐洲の國情につき概要を授ける。二 當時西・葡兩國の世界に於け

る大勢を明にし、且つ歐人の目に映じた東洋諸國の状態を領得させる。三 西班牙人の亞米利加より太平洋を航して東洋に来れるは、世界一週の最初であつたことを知らせる。四 西・葡兩國の世界政策は、其の後殖民政策等の不良なりし爲頓挫し、次第に其領土を失ひ、英國が之に代つたことを知らせる。

第二時 南蠻人の渡來

□教具

世界地圖、亞細亞地圖、九州地方地圖、葡萄牙人種子島に鐵砲を傳來せる繪畫。

□方法、豫備 一 次の事項の問答。

(1) 室町幕府の末は何うなつたか。(2) 戰國爭亂の世武士が最も要求する物は何か。戰國以前の武器には何があるか。(3) コロンブスは何國の人か。何うした人か。(尋五修身尋六讀方復習)。(4) コロンブスがアメリカを發見した由來は何か。(5) 北アメリカに西印度諸島といふ名のついた島のあるのは何故か。二 目的指示。

□教授 一 【西洋人の東洋渡來】

室町幕府の威令衰へて群雄各地に割據し、互に攻伐を事としてゐる間に、西洋では航海術大に開けて次第に航路を延長し、遂に東洋に渡來する様になつた。

(1) コロンブス 是より先西洋人の中には東洋諸國の物産に富めるを聞き、之と交通して利益を收

繪風屏地港開の間年正天
(すらかなか詳か邊戸平か浦堺)



•今。りな畫古の風屏るせ藏秘に家爵伯浦松 •は岡本
師法るな形異・中圖。る取りよ繪口の集七第纂類古好
西るせ徊徘。りな師教宣の教トスリキ •はるせなを姿
しべす意注に等品來舶るせ列陳に頭店人洋

めんミする者少からず。紀元二一五二年(明應元年)コロンブスはアメリカ大陸を發見したが、其の動機はマルコボロの見聞録を讀んで、所謂金銀珠玉に充滿せる日本國を發見せんとの好奇心に基くものといはれてゐる。マルコボロは最初の我國の紹介者である。蒙古が我國に來寇した頃元主忽必烈に仕へてゐたが伊太利のベニスに歸國後見聞録を公にした。之は蒙古軍中本國へ逃れ歸つた兵卒から聞いたまゝを記述したもので、我國の金銀珠玉に富めるといふ誇張的の記事があるのである。

(2) 印度航路を開くコロンブス

米利加發見後、數年にして葡萄牙人は始めて亞弗利加の南端を回航し、印度洋を経て海路直ちに印度に達した。

二 【葡萄牙人の來航と小銃の傳來】

(1) 東西の交通はより歐人の東洋に來航するもの漸く多く、葡萄牙人は植民貿易に従ひ、且つ崇信する基督教の弘布をはかり、印度の西岸にあるゴアを取りて之を根據地とし、禮拜堂を建て宣教師を駐屯せしめた。之より次第に經略の範圍を擴めて支那の地に貿易もし布教もしたのである。

(2) 小銃の傳來 天文十二年(二二〇三)葡萄牙の商船一隻支那に赴く途中、颶風に遇ひて我大隅種子島に漂着した。是實に西洋人の我國に渡來した始めである。此の時葡人は鐵砲を持つてゐた。島主種子島時堯之を見て巨財を投じて二挺を購入し、家臣をして製藥の法及鑄造の法を學ばせた。時に根來寺の僧杉房之を聞き、遙かに來り求めたので、時堯は一挺を贈り更に治工に命じて鐵砲を造らせたが、臺尻を塞ぐこゝが出来なかつた。翌年葡萄牙船が來たので又家臣をして學ばしめ、新に數十挺を得た。後和泉堺の商人種子島に來り、製銃發火の術を習ひ之を近畿の人に傳へたので、火器關西に傳播した。又伊豆國の人も之を學んで關東に傳へた。當時鐵砲のこゝを種子島と呼び、群雄武事を講ずる際であつたから、大に歡迎せられ、是から舊來の戰術一變し、弓矢の必要を減じ、築城法の如きも城壁に銃口を擬する孔を穿つ等頗る面目を改め、攻守の術共に進み戦

争は愈々猛烈となつた。

(3) 葡萄牙人が支那の澳門を占領するに及んで、其の商船の我國に来るものが次第に多くなつた。

三 【西班牙人の來航】 西班牙人も亦世界各地に雄飛せんとし、コロンブスの亞米利加を發見してから盛に新大陸の經營に従事した。南米各國には西班牙人の子孫が多く、今猶西班牙語が行はれてゐるのは之が爲である。後亞米利加より太平洋を横りて東洋に来て、世界を最初一週した者は實に西班牙人である。西班牙人はフィリッピン群島を取り、紀元二千二百三十一年(元龜二年)マニラに政廳を開いて之を東洋に於ける根據地とし、後葡萄牙人と同じく我國に來航した。(フィリッピン群島が現今米領となれるは後米西戦争の結果、西班牙より割讓したのである。當時西班牙はフィリッピン群島より更に臺灣をも占領するに至つたのである。) 我國では當時西葡の人々が南方から來るので、之を總稱して南蠻人、其船を南蠻船と呼び、又其の傳へた鐵を南蠻鐵といつてゐた。當時斯くの如く西葡の二國は世界に雄飛し、多くの殖民地を有してゐたが、後に其政策が悪かつた爲之等の地を失ひ、英國が之に代つたのである。現今英國が世界到る處に領土を持つてゐるのを見ても領解が出来るのである。

□挿畫の説明 古畫を模寫したもので、先頭の子供の率ゐるは唐犬で、次の大人は宣教師である。身に纏へる上衣は鷹合羽に類似の外套である。傘は日傘、他の五人は宣教師の供のものである。

□整理 一 教科書の讀解。二 次の事項の問答。

(1) コロンブスが亞米利加を發見した動機は何か。(2) 西洋人中始めて東洋に回航したのは何處の人か。何うして何處に來たか。(3) 何うして我國へ小銃が傳つたか。之れが爲に戰術は何う變つたか。(4) 葡萄牙人は何處を根據地としたか。(5) 西班牙人は何れの方面から來航したか。何處を根據地としたか。(6) 南蠻人が渡來した結果我國にどんな影響を與へたか。又之からどんな影響を與へるであらうか。三 質疑應答。

第七 織田信長の功業 (三時間)

□要旨 戰國時代群雄雲の如く起れる中に、信長は雄畧壯圖四隣を壓し謀臣勇將下に多く、或は遠攻近攻の策を用ひて美濃を略し、或は敢勇果斷一舉にして今川義元を斬り、威名天下に馳するや正親町天皇勅命の降下となり、遂に率先して天下平定の端を開きたる事情を覺らしめ、特に其の朝廷興復の命を奉じて王事に勤めたるを稱讚し、戰國紛亂の間に在りて、よく勤王の精神を發揮した事を説明し、其の人物事業を欽仰せしむるのである。

□教授上の注意

一 信長の父信秀と併せて、父子の勤王事蹟は詳述力説する。

二 信長群雄に比して比較的容易に覇業を収め得んとしたのは、もこより信長の非凡なる力量の致す所なれども、特に其の地の利を得たることを説き、謙信・信玄・元就等が遂に其の志を得ざりし理由を覺らせる。

三 謙信・信玄等が今少し長命したと假定して、信長の事業を想像せしめ、且つ天下統一後に於ける、之等諸雄の人物の適否を推究せしむるも一興である。

四 信長對足利義昭・徳川家康・豊臣秀吉の關係の概要を説く。

□教材の區分 第一時、織田氏、信長京都に入る。第二時、信長の經略。第三時、本能寺の變。

第一時 織田氏、信長京都に入る。

□目的 織田氏の家系及信長の幼時を知らしめ、其義元を斬り美濃を略して後京都に入りたる次第を授け、且つ信長大義に明に名分に通じ、皇室を尊び勤王の誠を致す、北條・足利二氏の不臣と對照し、忠君の志操を涵養するのである。

□教具 戰國時代群雄割據地圖、信長肖像、桶狹間戰圖、信長皇居を修理する圖。

□方法、豫備 一 次の事項の問答。

(1) 戰國時代は何年間續いたか。何んな有様であつたか。(2) 關東地方の形勢は何うであつたか。本州中部にはどんな英雄が居つたか。其の他奥羽・中國・四國・九州の諸地方は何うであつたか。

(3) 近畿地方の形勢は何うであつたか。(4) 麻の如く亂れた天下を統一する者は誰か。(5) 織田信長は何故天下を統一することが出来たであらうか。(地の利を占めたること)。二 目的指示。

□教授 一 【織田氏】

(1) 家系 織田氏は平重盛の後裔であると傳へられてあるが、之は織田氏の系圖にあるのみで、他に確證がないから明瞭でない。代々斯波氏に仕へて其の領國尾張の守護代であつた。應仁の亂後主家の衰ふるや、織田氏・國政を専らにし信長の父信秀の時其の國を押領して屢、隣國に兵を出した。信秀は勤王の志篤く、天文十年伊勢外宮假殿造營の資錢七百貫文を獻じ、更に十二年には四千貫を朝廷に獻じて、御所の築垣を修理し奉つた。

(2) 信長の幼時 信長は十六歳で家を嗣いたが、豪放粗暴であつた。家臣平手政秀といふ者に名馬があつたのを信長が懇望したが、之を獻じなかつた爲、政秀を惡み其の言を用ひぬ。政秀之を愛へて屢、諫めたが一も用ゐられず、遂に死を以て諫めた。信長大に驚き且つ悼み爲めに寺院を建てて政秀寺といひ、忌日には必ず參拜して誓つて曰く、「かくなりては悔ゆとも及ばじ唯過を改め行を謹み大功を天下に立て前非を償はん」を、以來別人の如く檢束節度を守り國務を取つた。

(3) 桶狹間の戰 今川氏はもと足利氏の一族で義元に至つて勢強大となり、府中(靜岡)を居城とし、三河・駿河・遠江を領有し、更に尾張を併せ濃・江を従へ、京都に入りて將軍を擁し天下に號令

せんとの大望を懐き、東北條・武田と和し、水祿三年途上尾張に入つた。駿・遠・三の三國の兵四萬、頻りに諸城を陥れ桶狭間の北方田樂挾間に陣し、杯を擧げ氣驕り大に警備を怠つた。信長は尾張の清洲の城に居たが更に驚かず、……(同書尋六用参照)……遂に攻めて義元を斬つた。信長時に年二十七、此の結果從來今川氏に従屬の姿となつてゐた徳川家康は、信長に與して東方の敵に當ることゝなつたので、信長も西上の志を遂ぐる事が出来たのである。

(4) 岐阜に移る。桶狭間戦後四年、信長は美濃の齊藤氏を滅して岐阜を取り之を居城とした。

二 【信長京都に入る】

(1) 信長密勅を拜す。正親町天皇(第百五代)は信長の武名を聞召し、紀元二千二百二十七年(水祿十年)遠く勅使立入宗繼を派し、御料所恢復の事を勅し、天下無双の名將にお褒めになつた。(教科書挿畫の公卿は勅使立入宗繼) 信長大に感激し、天下を平定して叡慮を安んじ奉るべきを以て己が任じた。

(2) 將軍義昭を奉じて京都に入る。將軍義輝害に遭ひ其の弟義昭を越前に避けたが、信長の勅を拜した翌年來りて信長に投じた。信長は之を機とし義昭を奉じて京都に入り、三好・松永の徒を降し忽ち都下を定めた。是より後信長は御所を修理し、供御の料を献じ久しく廢れてゐた朝儀を再興し、公卿の領地をも復舊したので、京都を去つてゐた公卿も漸く都下に歸つたのである。信長

は又號令を嚴にして兵士の狼藉を戒めたから、上下其の堵に安じ久しく疲弊荒廢の極に陥つてゐた京都も、稍、舊觀に復し近畿漸く安きこを得た。

□整理 一 教科書の讀解。二 次の事項問答。

- (1) 織田氏はも誰に仕へてゐるか。信長の父信秀は何んな人か。(2) 信長の武名の上つたのは何によるか。如何にして今川義元を滅したか。(3) もし信長が清洲城で、義元の來るのを待つてゐたら何うであつたらう。(4) 信長は正親町天皇から何んな密勅を受けたか。信長は何う決心したか。(5) 信長は何を機として京都に入つたか。(6) 入京して後は何うしたか。三 質疑應答。

第二時 信長の經略

□目的 信長の經略を授け、信長が正親町天皇より密勅を拜した當時と、中國征伐の當時との勢力を比較し、天下統一の事業の如何に困難なりしかを推究せしめ、信長の偉人なりしことを思考させる。

□教具 近畿地方、中部地方及中國地方圖。

□方法、豫備 一 次の問答をなす。

- (1) 信長の武勇に就いて語れ。(2) 信長の勤王に就いて語れ。(3) 信長は何を機として京都に入つたか。(4) 近畿地方には未だ何んな群雄が居るか。二 目的指示。

□教授 一 【信長の經略】

織田信長の功業

(1) 延暦寺を焼く。信長は南の方北畠氏を従へて伊勢を併せ、北に向ひて越前の朝倉義景を伐つた。然るに義景は近江の浅井長政と謀を通じ、又延暦寺の僧兵を誘ひて信長に抗したので、信長は家康の援軍を得て、朝倉・浅井の兩軍を近江の姉川に破り、次いで叡山を攻めて之を焼き拂ひ、悉く其の僧徒を殺した。時に紀元二千二百三十一年(元龜二年)にして、恰も毛利元就・北條氏康の卒した年である。平安時代よりさしも横暴を極めた山法師も、此に至りて永く其の勢を失ひ、信長の威名は益々揚つた。

(2) 足利氏の滅亡。將軍義昭は最初信長を徳と見て、之を管領たらしめんとしたが信長は辭した。義昭は信長の功多くして賞薄きを憂へ、躬ら書を贈りて信長の大勳を稱し、之を管領の上に次し且つ重書桐章を授けた。又攝津・和泉・近江等に封を與へんとしたが又辭した。此の如く信長を重んじてゐるが、信長の勢盛なるに従ひ、己の地位の危からんことを恐れ、私に書を諸國の英雄(上杉・武田・毛利)に送りて信長を除かんとした。信長は義昭の失行を切諫して一旦和解したが、義昭再舉の志あり密に諸雄と通じてゐたので、信長大に怒り遂に之を逐ひ足利氏茲に亡んだ。時に紀元二千二百三十三年(天正元年)、尊氏が擅に幕府を開いてから二百三十五年である。此の年信長は更に浅井・朝倉を滅し、近江・越前の地方を平定した。武田信玄が上洛を企て途中病を獲て卒せしも此の年である。

(3) 安土城と本願寺の一揆。戰國時代には大阪の本願寺兼壽(親鸞上人子孫)世の信仰を得、其の門徒は兵を擧げて地方の豪族と戦ひ、殊に勢力を近畿・北陸に振つてゐた。此の頃本願寺光佐は大阪に石山城を築いて信長に抗し、其の徒伊勢の長島にありて勢頗る熾んであつた。信長は浅井・朝倉を亡ぼした翌年長島の一揆を伐ちて多く其の徒を殺し、次で城を近江の安土に築きて之に移り、石山城を攻めたので茲に近畿は平定した。

(4) 中國征伐。中國では毛利元就己に卒して孫輝元嗣ぎ、其の叔父吉川元春・小早川隆景の二人之を助け、十餘國を領して勢甚だ盛んである。遙かに上杉・武田二氏と相應じ、共に義昭を助けて信長を挾撃せんとし、又糧を大阪に送りて本願寺を助くる等、百方信長の事業を妨げた。信長乃ち先づ其の將羽柴筑前守秀吉をして中國を伐たしめ、漸を以て他に及ぼさんとした。

□整理 一 教科書の讀解。二 次の問答。

(1) 近畿地方で信長の強敵は誰々か。之等を平定するに何んな策を用ゐたか。(遠交近攻)。(2) 信長は叡山を何故攻めたか。紀元何年か。(3) 足利氏は何故滅んだか。紀元何年か。(4) 信長、浅井・朝倉を亡ぼした翌年は誰と戦つたか。(5) 信長は何處に城を築いて移つたか。(6) 信長が中國征伐を企てたのは何故か。(7) 信長が武田・上杉・毛利等の群雄に先じて、霸業の途についたのは何故か。

(8) 信長に就いて感じたことはないか。三 質疑應答。
第三時 本能寺の變

□目的 信長武田氏を滅し、更に中國にある秀吉を助けんとして京都に入つたが、俄に本能寺の變に遇ひ、遂に天下を統一するこゝ能はざりしと雖も、實に其の基礎をなしたるこゝを説き、以て信長の功業の大なりしを推察させるのである。

□教具 中國地方圖、京都全圖、建勳神社及本能寺寫眞。

□方法、豫備 一次の事項の問題。

(1) 信長は何を以て己が任じたか。(2) 信長は已に何處を平定したか。何んな順に諸雄を従へたか。(3) 猶信長に従はぬ者は誰か。中國には誰をやつて居たか。二 目的指示。

□教授 一 【本能寺の變】

(1) 天下の形勢 間もなく本願寺の一揆は衰へ、謙信卒して上杉氏も亦信長の敵に非ず、餘す所は東國の武田勝頼、中國の毛利輝元、四國の長曾我部元親、關東の北條氏政、九州の島津義久・大友宗麟、奥羽の伊達政宗等遠隔の地方に割據せる諸豪族あるのみとなつた。

(2) 武田氏を滅す 勝頼は徳川軍三河の長篠に戦つたが、大敗して多くの宿將勇卒を失ひ、以來勢甚だ振はず。遂に信長・家康の連合軍の爲めに天目山に滅された。時に天正十年(紀元二千二百

四十二年)であつた。信長は武田氏の領地、駿河・甲斐・信濃等の諸國を家康以下有功の將士に分つた。

(3) 信長本能寺に館す 信長は武田氏を滅したる後、子信孝をして更に諸將と共に四國の長曾我部氏を討たんとし、其の準備をさせた。此の時中國の羽柴秀吉は中國の東部の諸城を陥れて備中に入り、高松城を圍んで水攻めにしてゐた。城將清水宗治容易に屈せず、吉川元春・小早川隆景の兩將輝元を擁して來り援けんとしたので、急を信長に報じた。信長は安土を發し自ら中國に向はんとし、其の將明智光秀に出兵を命じ、長子信忠と共に京都に入りて本能寺に館したのである。

(4) 明智光秀の叛 元來信長は頗る短氣なる人で、秀吉さへも時々折檻の辱を免れなかつた。光秀も亦屢、信長の鞭撻を受け、嘗て衆人稠座の間にありて罵詈毆打せられたので、心密に之を怨んでゐた。天正十年五月徳川家康の安土に來るや、光秀命によりて饗膳に力めてゐたが、秀吉援兵を乞ふに至り信長光秀に先鋒を命じ、國に就きて兵を出させた。時に饗禮未だ終らずして忽ち此の命に接したので、光秀大に憤慨し饗具を湖中に投じて去り、遂に叛を謀つたのである。六月一日光秀兵を整へて中國に向ふと聲言し、俄に京都に向ひ二日未明急に本能寺を圍んだ。時に信長は近侍僅かに數十人、近臣森蘭丸の報に依り、出でて自ら射て防いだ。矢盡きて槍を執つて戦つた。蘭丸等も亦よく力戦したが遂に皆戦死し、信長は奥殿に入り、火を放ちて自殺した。時に年四十

九、信忠は妙覺寺に在つたが之を聞き直に馳せて難に赴かんとし、途に火の起るを見去りて二條城に據つた。光秀之を圍むに及び信忠も亦火を放ちて自殺した。時に年二十八、之れ即天正十年六月のことで、信長が京都を定めてから十五年目である。

(4) 建勳神社 信長東征西伐力を吾國に盡したが、其の業將に成らんとして忽ち叛臣の兇手に斃れたのは實に惜しいことである。朝廷信長の偉功を思召し、太政大臣從一位を贈られた。明治二年信長の後裔羽前天童の藩主、織田信敏に勅して信長の祠に社號を賜ひ、翌年改めて建勳神社と稱せられた。八月四日別格官幣社に列せらる。

〔整理〕 一次の事項問答。

(1) 信長は近畿を平定して後先づ何處を征伐したか。(2) 本能寺の變は何うして起つたか。(3) 信長が遂に大業を全うするこの出来なかつたのは何故か。(4) 信長はどんな人か人物を推究して御覽。長所は何か短所は如何。(5) もし今少し信長が長命してたら何うであつたらう。(6) 信長の遺業を大成する者は誰か。二 質疑應答。三 教科書の讀解、最後に全文を一回朗讀させる。

〔備考〕 【安土城】 近江國蒲生郡安土村安土山上にある。我國天主閣の初めと稱せらる。其の築造の様は城閣七層より成り、其の初重城臺の高さ十二間之を土藏に充つ。第二重目は廣さ南北二十間東西十七間で、高さ十六間。三重目は合計百二十餘疊を布く事が出来る。四重目は四方各十餘間

あり、五重目はまた之に準じて居る。六重目は八間四方、七重目は三間四方である。

第八 豊臣秀吉の海内平定 (四時間)

〔要旨〕 豊臣秀吉身を織田信長の僕より起り、信長の遺業を繼承して海内を平定し、更に朝鮮を伐ち明兵を破りて國威を海外に發揚したる武勳を説き、特に其の勤王の志篤く、天下をして天皇の尊きを知らしめたることを明にするのである。

〔教材の區分〕 第一時、信長の遺業秀吉に歸す。第二時、秀吉・信長の遺業を完成す。第三時、聚樂第行幸、秀吉の施政、朝鮮征伐の起因。第四時、朝鮮征伐。

第一時 信長の遺業秀吉に歸す

〔目的〕 秀吉微賤より起り信長の爲次第に登用せられ、中國平定の大任をも受くるに至つたが、本能寺の變あるに及び率先光秀を伐ち、主君の仇を復して其の遺業を繼承する様になつた由來を知らしめ、且つ秀吉の機を見ること明に、勢を制すること敏なりしことを考察させる。

〔教具〕 中國近畿中部の三地方圖、豊臣秀吉畫像、北政所畫像、加藤清正の畫像、大阪城の寫眞。

〔方法、豫備〕 一次の事項の問答。

(1) 織田信長に就いて最も敬服したことは何か。(2) 信長は未だ何處を平定せねばならなかつたか。

(3) 信長中途にして斃れたのは何故か。(4) 信長の仇を報じ其の業を繼ぐ者は誰か。二 目的指示。

□教授 【信長の遺業秀吉に歸す】

(1) 秀吉の立身 天文五年(二千百九十六年)尾張國中村の農家に生る。幼名は日吉丸、父は木下彌右衛門といひ、信長の足輕であつたが、病の故で故郷に歸り同國の女を娶りて、秀吉ミ瑞龍院(秀次の母)ミを生んだ。彌右衛門の死後其の妻は同村の筑阿彌といふ者に再縁し、秀長等を生んだといふことである。日吉丸は後自分で木下藤吉郎秀吉ミ稱へ、十六歳の頃濱松に行き今川義元の家臣松下之綱の奴ミなつたが、才を伸すここの出来ぬのを知り、去つて清洲に至り信長の草履取りとなつた。時に年二十歳前後で桶狭間の戦以前である。後信長の部將丹羽長秀・柴田勝家の勇名を慕ひて姓を羽柴ミ改めた。信長が美濃の齋藤氏を討つた時、秀吉は天性の智勇を發揮して功を立てたので、漸次信長に認められ遂に部將の列に加へられた。之より出陣する毎に功を重ね千瓢を以て其馬標ミした。かくて近江淺井氏の舊領を食み、一躍して二十二萬石の城主ミなり、居城を長濱に定めた。此の間に於ける秀吉の苦心は實に大なるものがある。後年黒田如水が秀吉に對し、「殿下の今日あるは如何」ミ問ひしに、秀吉は「自分は何も先々の事を考へず、只職に忠實に勤めたるのみ。」ミ答へたので、如水大に感じ遺言狀には此一ヶ條を入れたといふことである。

(2) 高松城を攻む 天正五年(二三三七)秀吉命を受けて兵を進め(上月)佐用の二城を降し、略播磨を平けたが三木城主別所元治信長に背くに及び、秀吉之を攻め二年にして陥れた。秀吉は姫路城を本據とし鳥取城を圍んだ。城將吉川經家死守したが亦之を陥れ、大軍を率ゐて伯耆に入り元春と對抗し、秀吉は一旦軍を還した。天正十年秀吉備中に入りて遂に清水宗治を高松城に圍み、長堤を築き河水を導きて浸させた。時は五月淫雨の爲城中大に苦しんだ。毛利輝元其の急を聞き吉川元春・小早川隆景等を遣りて救はしめ、次で自ら赴き此に兩軍對峙して動かさず、秀吉は毛利氏の虛を擣きて雌雄を決せんし、信長の來援を乞ふた。宗治は保ち難きを知つて自裁して士卒の命に代らんことを請ひ、輝元亦和を講ぜんことを求めた。偶、本能寺の變報があつたが、秀吉之を秘し六月四日宗治等を舟中に自殺せしめ、輝元と和約を結び翌日急に軍を還した。輝元等間もなく本能寺の變報を知つたが、敢へて約を違へなかつた。

(3) 山崎の合戦 明智日向守光秀は信長を弑し、進みて安土城を奪ひ傲然將軍を以て自ら居た。柴田・羽柴・瀧川等の諸將各遠く出でて敵に當り、織田信孝・丹羽長秀は四國に赴かんとして住吉にあり、家康の來りて近畿に遊べるも皆雄を争ふこと能はざらん。ミ謂つてゐたが、秀吉は天正十年六月十一日には既に攝津の尼ヶ崎に至り、信孝・長秀・池田信輝・中川清秀等ミ富田に會して十三日大に光秀を山崎に破つた。光秀は小栗柄を過ぐる時、土寇に要撃せられて死んだ。本能寺の變後

僅かに十一日である。此の時信長部下の諸將柴田勝家を始として、多くは機に後れ秀吉をして獨り舊主の仇を報ずるの名をなさしめたのである。

(4) 賤ヶ岳の戦い。是より先柴田勝家は越前に封ぜられて北莊きたのしやにあつたが、仇を報ぜんとして秀吉に先んぜられたので清洲にいつた。秀吉も清洲に至り勝家・長秀・信輝等の諸將と議し、信忠の子三法師丸(後の秀信)を以て信長の嗣とし、信忠の弟信雄・信孝を之が輔佐とした。間もなく信雄・信孝と權を争ふた勝家は、信孝と謀り一益と共に信雄・秀吉を除かんとしたが、北地雪深くして兵を動かし難かつたので明春を待たんとした。秀吉之を知り先づ勝家の長濱城を取り信孝を岐阜に圍みて之と和し、翌天正十一年伊勢に出でて一益を撃ち諸城を陥れた。勝家の將佐久間盛政は近江に來り、賤ヶ岳に秀吉の部將中川清秀を討死させた。時に秀吉は信孝が再叛したので岐阜に向つたが、之を聞き直に賤ヶ岳に引返し盛政を破つた。加藤清正・福島正則等七本槍の功名は此の時である。勝家兵を出したが其の敗れたのを聞き北壯に退き、遂に秀吉に追はれて自殺し柴田氏は亡んだ。信孝は信雄に攻められ尾張に奔つて自殺し一益も降つた。時に天文十一年五月本能寺の變後僅かに一年である。信長の遺業は自ら秀吉の繼承する所になつた。

(5) 關白太政大臣となる。秀吉は乃ち諸將に課し、もも本願寺一揆の根據であつた大阪城(石山城)を修築して此に移り、十三年(二二四五)には從一位に進み關白となり、翌年遂に太政大臣に任せ

られ、豊臣の姓を賜つた。

□整理 一次の事項問答。

(1) 秀吉が高松城を圍んでゐた時、本能寺の變報に接して何うしたか。(2) 秀吉が信長の遺業を繼承する様になつた最も大切な戦は何か。(3) 賤ヶ岳の戦の原因及結果は如何。(4) 秀吉は何處に城を築いたか。秀吉の榮進は如何。(5) 秀吉に就いて何を感じたか。(外交の功妙、機敏)。(6) 柴田勝家等が信長の遺業繼承者になれなかつたのは何故か。二 教科書の讀解。三 質疑應答。

第二時 秀吉・信長の遺業を完成す。

□目的 秀吉四國・九州・關東・奥羽の諸地方を平定して、遂に能く信長の遺業を完成したことを知らせるのである。

□教具 日本地圖、四國・九州・關東の諸地方圖、伊達政宗の畫像。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1) 信長の遺業は誰に歸したか。(2) 秀吉は舊主の仇を報じ、又其の遺業を繼承する爲誰と戦つたか。(3) 秀吉に従はぬ地方は何處か。二 目的指示。

□教授 【秀吉信長の遺業を完成す】

(1) 四國平定。さきに信長は信孝・長秀等をして、四國の長曾我部氏を討たしめんよしたが、本能寺

の變により中止せられた。秀吉は其の遺志を継ぎ、天正十三年(二二四五)異父弟秀長養子秀次等をして阿波より向はしめ、別に毛利輝元の軍を伊豫に宇喜多秀家を讃岐に遣はし、三方より進みて伐たせた。元親遂に降つたので秀吉は元親に土佐一國を與へ、有功の將士に其の地を分ち與へた。

(2)北陸平定 秀吉は次で佐々成政を降して越中を定めたが、越後に至りて上杉景勝も亦來り服し、北陸地方概ね平定した。

(3)九州平定 九州地方にては大友氏・島津氏相争ふてゐたが、大友義鎮(天正十四年)自ら京都に至りて救を秀吉に請ふた。初め織田信長は九州に着目し、秀吉を筑前守に任じ、光秀をして惟任氏を長秀をして惟任氏を稱せしめてゐた。惟任・惟任共に九州の古名である。秀吉亦其の遺志を繼ぎ、義鎮の來るに及んで書を義久に與へて朝覲を促した。然るに義久は秀吉を輕じて應じなかつたので、天正十五年秀吉自ら畿内及び東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海六道三十七箇國の大兵を率ゐ、水陸より大舉して九州に入り、薩摩を侵した。義久は遂に薙髮して降つた。秀吉乃ち舊領薩隅二國及日向の南部を與へて其の侵地を收め、大友氏には豊後を、佐々成政に肥後を、黒田孝高に豊前を、小早川隆景に筑前を、立花宗茂等に筑後を賞賜した。龍造寺・大村等は何れも其の本領に安堵することを得た。

(4)關東・奥羽平定 北條氏直は祖早雲より五世、伊豆・相模・武藏・上野等の地を有し、餘威下野・上

總・下總に及ぶ。此の時本州の大半四國・九州已に秀吉に服し、諸侯皆京都に會同をして天皇を尊び、關白の命に従はざるはなかつた。然るに北條氏は天險と勇將を恃みて秀吉の招きに應ぜなかつたので、天正十七年(二二四九)秀吉は奏請して北條氏討伐の命を發し、翌年三月京都を出づ、總勢十七萬餘、秀吉石垣山に營して城を瞰下し、以て攻圍の全軍を督した。城は堅いので長圍を策し、屢、宴を張りて將士を懈つてゐた。此の時陸奥の伊達政宗來り調した。秀吉乃ち政宗の封を削り米澤三十萬石を領せしめ、又之を石垣山に召して自ら攻圍の狀を指し、兵威を示して歸國させた。七月六日氏直遂に出で降り、小田城は陥つた。秀吉は氏直の父氏政に自殺を命じ氏直を高野に放つた。かくして關東・奥羽は全く服し全國悉く平定した。即天正十八年八月である。秀吉がさきに長曾我部・島津氏を征した時には、單に其の侵略地を收めて有功の諸將に分ちしのみで、尙其の家を保たせたが、今や東國の平定するや、悉く北條氏の領地を收めて之を滅し毫も假借する所が無かつた。かくて没收した北條氏の舊領に上總・下總を加へて家康に與へ、家康の舊領參・遠・駿・甲・信の諸國を諸將に分與した。即三河を池田輝政等に、遠江を山内一豊等に、駿河を中村一氏に、甲斐を加藤光泰・羽柴秀勝に、信濃を仙石・石川・毛利等の諸將に與へた。是に於て天下亦秀吉に敵する者はなくなつた。(挿畫の説明備考にあり)。

〔整理〕 一 教科書の讀解。二 次の事項の問答。

豊臣秀吉の海内平定

(1) 秀吉は何處を平定して、信長の遺業を完成したか。(2) 四國の長曾我部氏、九州の島津氏を討つた後、之等の領地は何うなつたか。又其の侵略した土地は何うしたか。(3) 秀吉の島津氏・長曾我部氏に對する處置に就いて感じたことはないか。(寛大)、(4) 關東及奥羽地方は何うしたか。天下全く平定したのは何時か。(5) 北條を滅した後、其の領地は如何に分與し又變更したか。(6) 家康を關東にやつたのは何故だらうか。(7) 家康の爲には其の利害は何うであらう。二質疑應答。

第三時 聚樂第行幸、秀吉の施政、朝鮮征伐の起因

□目的 秀吉天下を平定して天皇の宸襟を安じ奉り、後陽成天皇に聚樂第に行幸を仰ぎ、諸大名をして皇室を尊崇し奉り、關白の命に背かざることを誓はせ、以て天下をして尊王の大義を知らしめたことを授け、且つ其の施政を説き、秀吉は單なる武士に非ざりしことを覺らせるのである。更に秀吉が朝鮮を征伐するに至りし事情を説き、其の大志に感奮させるのである。

□教具 アジャ地圖、(本書尋六用教具の欄参照。)

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1) 秀吉は光秀・勝家等を滅して後、何うして信長の遺業を完成したか。(2) 海内平定後は何うしたであらう。(3) 秀吉は何に任ぜられたか位は如何。(4) 信長の勤王に就いて語れ。二 目的指示。

□教授 一 〔聚樂第行幸〕

(1) 秀吉の豪華 秀吉は氣宇宏大で豪壯を好んでゐた。前述の大阪城の如きは外廓の周圍凡そ三里と稱せられ、天正十一年諸侯に賦課し六萬人の人工を役して、晝夜兼行修築せしめたものである。秀吉は更に京都に邸宅がないので、天正十三年の春内野の地を相してこれに營んだ。内野は大内裡の舊址で東は大宮、西は淨福寺、北は一條、南は下長者町の北を限り、東西四町、南北七町、繞らずに深地あり。築くに高堞あり。巨樓鐵門莊嚴を極め、内には二重の廓ありて樓廓・殿舎其の間に充ち、金銀を鑿めて善美を盡した。三年の星霜を経て十五年落成した。其の他奈良の大佛に倣ひ方廣寺を東山に建て、高サ十六丈の木質に金を塗りたる大佛を作り、堂宇は二十丈もあつた。又文祿三年伏見城を築いた。此の地は京南の要地で秀吉諸侯に令して其の工を助けさせ、夫を役すること二十五萬人、郭を築くこと三重、樓閣・殿宇・宏壯華麗であつたが、豊臣氏亡びて後城は毀たれ、開いて桃樹を植ゑたので此の地を桃山といつてゐる。

(2) 後陽成天皇の行幸 天正十六年(二二四八)正月秀吉後陽成天皇(第百六代)の聚樂第に行幸あらんことを奏請し、四月十四日其の行幸を仰ぎ奉つた。此の時秀吉、左大臣近衛信輔・右大臣今出川晴季・内大臣織田信雄・權大納言徳川家康以下文武百官を率ゐて扈從し奉つた。貴賤老少遠近より來り集り、其の盛儀を拜觀した。父老の中には流涕して曰く「圖らざりき今日復太平の象を觀んとは」云、翌日秀吉京中の税金五千五百三十兩餘を禁裏御料として上り、税米三百石を院(正親

町上皇)の御所に献じ、八千石を諸公卿諸門跡の料とした。更に信雄・家康以下の諸侯二十餘人を
して、天皇を尊崇し關白の命に背かざることを誓はせた。かくて和歌の會・舞樂御覽等の事あり、
盛儀前古に超絶駐輦五日に及び、龍顏麗はしく御還りになつた。

二 【秀吉の施政】

(1)五奉行及五大老 秀吉は上皇室を尊び、下諸將を統べ國內の秩序を正したが、又頗る意を民政
に用ゐ、淺野長政・石田三成・増田長盛をして法令・土木・訟獄を分掌させ、長束正家をして錢穀を
掌らせ、前田玄以を京都所司代とし、市政及僧・祝のこゝを掌らせた。之を五奉行といひ、更に徳
川家康・上杉景勝・毛利輝元・宇喜多秀家・前田利家の五人をして大事を決せしめた。世に之を五大
老といふのである。

(2)民政 秀吉は京都の市街を修め、諸國の土地を検して田制の亂れてゐたのを整へ、租税の率を
定め又新に貨幣の制を立てた。

三 【朝鮮征伐の起因】

(1)秀吉、フィリッピン、臺灣の入貢を促す 秀吉夙に國威を海外に耀さんとの大志あり。中國征伐の際
既に朝鮮及明を經略するの意を信長に洩したといふこゝである。かくて小田原を征討するに及び
て書をフィリッピン太守に贈つた。フィリッピン群島は、我戰國の頃西班牙人太平洋を航して此に至

り、元龜二年マニラに政廳を建て、太守を置きて之を統べてゐたが、防備堅からざる上土人の反
抗止まず、原田孫七郎といふもの此地に往來して彼の事情を知つてゐたので、秀吉に勸むる所が
あつた。天正十九年九月秀吉孫七郎をして書を送らせ、其の入貢を促したのである。もし従はず
んば大兵を送るこゝいふので、太守は驚き使を遣はして秀吉に肥前の名古屋に見えて、其の眞意を
探らせた。秀吉は當時征韓中であつたので、力を専らにせられなかつた。而して秀吉薨後遂に止
んだのである。秀吉は更に孫七郎をして、書を臺灣に送り又入貢を促した。然るに臺灣は土蕃の
巢窟で統一する所なく、此の書に對して答へる者がなかつた。秀吉の薨後其の志を繼ぐ者のない
爲遂に止んだ。かくして印度にも及ぼさんとしてゐたのである。

(2)秀吉、明國に修好を促す 秀吉は先づ朝鮮の舊好を修めんとして、對馬の宗義智等を遣はした。
天正十七年朝鮮の使者秀吉に方物を献じた。是より先秀吉は琉球をして明に修好を促がさせたが、
返報がなかつたので今朝鮮の使者の歸るに當り、其の王に「明もし好を我に修めずんば、大兵を
發して之を攻めん。王其の先驅たるべし。」と言はせた。然るに朝鮮王李^イは之に従はなかつたの
で、先づ朝鮮を征して明に及ぼさんとし、遂に外征の令を發したのである。

□整理 一 次の事項問答。

(1)秀吉の氣宇の豪壯であつたのは何で分るか。(2)聚樂第行幸の有様は何うであつたか。(3)秀

吉は何んな役人を置いて、百般の政務を掌らせたか。(4)秀吉の民政上の功績を語れ。(5)秀吉は國威を海外に耀さんとして、何處に其の服従を促したか。(6)朝鮮を征伐する様になつたのは何故か。二 質疑應答。

第四時 朝鮮征伐

□目的 秀吉遂に朝鮮を征す。此の舉は實に神功皇后以來の快舉で、足利氏が受けし國辱を雪ぎ、國威を海外に耀した功績は、頗る偉大であるこゝを知らせるのである。

□教具 朝鮮・支那地圖、加藤清正・小早川隆景等の畫像。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1)秀吉の志に就いて語れ。(2)朝鮮征伐の原因は何か。二 目的指示。

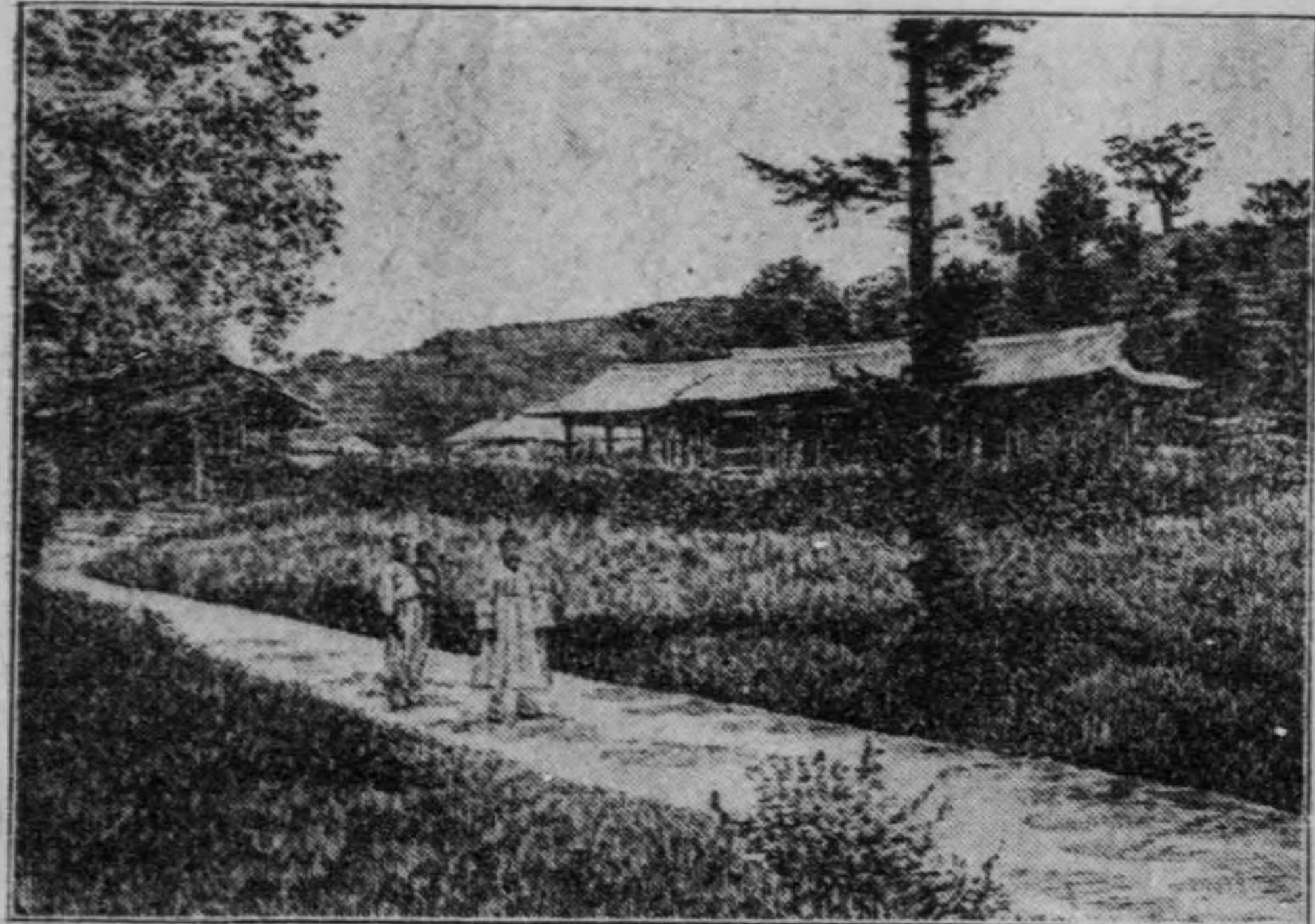
□教授 【朝鮮征伐】

(1)第一役 文祿元年(一六一二)秀吉諸軍を肥前の名古屋に集め、兵食を具へ大艦千艘を造り諸將を部署し、宇喜多秀家を元帥とし、加藤清正・小西行長を先鋒とし、西南四道の兵を八部隊に分つた。兵數總て十三萬餘、小早川隆景・島津義弘・黒田長政・立花宗茂等の諸將も出征したのである。四月十二日行長等釜山に上陸し以後道を分ちて京城に向つたが、沿道の諸城は皆潰え諸將は共に國都京城に入つた。之より行長は北進し平壤を抜き、清正は咸鏡道に向ひ會寧府を陥れ、七月二



小早川隆景 (安藝國豊田郡米山寺藏)

十三日には二王子を擒とし、八道盡く我軍に蹂躪せられた。明國大に驚き大兵を以て來援したが、七月十六日行長は之を平壤に破つた。時に明將李如松兵五萬を率ゐて來り、翌二年正月行長を平壤に襲ひて破り、勢に乗じて京城に入らんとした。我諸將相議して京城に會せんことを、隆景獨り曰く「初め命を承けてより生還を思はず、明軍新に來らば相逢ふて劍戟火花を散らし、矢石を避けず以て我武を示すべし。我今や齡已に傾く、死すも惜むに足らず。屍を原野に横へて異域をして、日東に隆景あるを知らしむるも亦愉快ならずや。卿等皆去れ我獨り之に當らん。」と、即ち宗茂等と碧蹄館に陣した。如松十萬・我一萬、雷奔電撃、屍は積んで山をなし、血は湛へて淵となつた。明軍大敗し如松馬より落ち、我將槍を以て之を刺したが、身に達せず辛じて免かれた。我軍逃ぐるを追ふて首を斬ること萬餘、如松痛哭するこゝに終夜に及んだといふこ



碧蹄館址
(京城西大門外四里にあ)

ミである。

(2) 和議の行違ハ之より明軍また戦意なく、我將士も懸軍二年早くも倦怠の氣が生じ、行長最も和議を主張し、屢、明の沈惟敬ミ會見し、其の言を信じ秀吉に報じて和を勧めた。秀吉之を許し諸將に命じて京城の圍を解かせ、五月行長は明使及惟敬等ミ名古屋に來り和議を締結した。即次の七ヶ條である。一、明帝の女を日本朝廷の後宮に充つること。二、勘合船を舊に復すること。三、兩國大臣誓書を交換すること。四、朝鮮四道を朝鮮に還すること。五、朝鮮は王子及大臣を一人質ミすること。六、二王子を還へすこと。七、朝鮮樞要の大臣をして永世日本に叛かざる誓書を呈せしむること。

其

明使歸りて三年餘り報告がないので、秀吉は其詐謀なるを知り大に怒り、國政を徳川家康に委ね、躬ら軍を督して明を伐たんこした。淺野長政等諫止し、殊に朝廷より畏くも宸翰があつたので遂に思ひ止つた。慶長元年八月明使及惟敬共に來り、九月一日大阪城に秀吉に見えて金印冕服を獻じた。翌日秀吉之を衣て明使に接したが、和議の條件もと惟敬の欺瞞に出で、秀吉の意に反すること多し、明使の來る實に秀吉を日本國王に封ぜんことしたのであつた。秀吉其の國書を見るに及び、大に憤りて再び征討の令を下した。此の如くして其の征伐は前後五年に亘り、最初の二年丈けは赫々たる戦功を收めたにも拘はらず、外交上の失敗の爲意義なきこととなつたのは遺憾である。

(3) 第二役 慶長二年正月行長・清正又先鋒となりて釜山に入り、小早川秀秋元帥となり、黒田孝高參謀となり、總軍十三萬亦海を越へたが、此の度は朝鮮の地荒廢して糧食を得るに困り、加ふるに水軍不振の爲、水陸並進することが出來ず、諸軍は南韓に轉戦して深入りはせなかつたが、蔚山の籠城、泗川の大捷の如きは、大に我武威を耀した。二年十二月淺野幸長蔚山にあつて敵に圍まれた。清正は幸長の父長政より幸長のこゝを頼まれてゐたので、直に往いて援けた。城兵飢渴ミ大寒とに苦しんだが、清正は毫も屈せず屢、攻勢を取り、日々明兵數百人を斃した。已にして我諸將之を聞き來り援けたので、翌年正月内外より夾み撃つて大に破つた。慶長三年十月一日、敵軍雲霞の如く泗川に寄來り、島津義弘は僅かに一城の兵を以て之を破つた。首を得ること三萬八

豊臣秀吉の海内平定

其

千七百餘、此の一戦明韓の兵は大に恐れ、後再び我兵を追はず。之を以て容易に兵を退くことが出来たのである。

(4) 秀吉薨去。慶長三年六月秀吉病を得、七月五大老には大事を、奉行には小事を決せしめた。後事を家康と利家とに託して、八月十八日遂に伏見城で薨じた。年六十三、其の病篤きに及び遺命して軍を引上げさせ、外征のことは遂に止んだ。豊國神社は京都市にあり、秀吉を祀る。秀吉の薨するや朝廷詔して一位を贈られ、遺志により阿彌陀峯の頂上に葬り、又廟を西麓に建て、豊國大明神の神號を賜はつた。豊臣氏滅亡後徳川氏の爲廟堂は毀たれ見る影もなきに至つた。明治元年朝廷其の遺烈を思ひ、祠宇を再建せられた。六年別格官幣社に列し、社殿はもとの大佛殿址になつた。

□整理 一 教科書の讀解。二 次の事項の問答。

(1) 出征した諸將は誰々か。(2) 第一役の戦況を語れ。(3) 秀吉が再び朝鮮征伐の師を起したのは何故か。(4) 第二役の戦況は何うであつたか。(5) 朝鮮征伐の結果は何うであつたか。(6) 朝鮮征伐失敗の原因は何か。

□備考、挿書 秀吉石垣山より小田原城包圍の狀を望む。山上三人の内最前の者は秀吉、次は近侍の士、坐せるは小姓で秀吉の太刀を持つてゐる。秀吉の上に着せるは陣羽織、下半身に着せるは袴

である。今秀吉小田原城を瞰下して、彼我の兵備を指點しつゝ語つてゐる所である。

世に優柔決せざる評議を小田原評議といふことがある。秀吉が小田原城を攻めた時、氏直群臣を集めて防禦の方法を評議したが、意見百出するも氏直暗愚の爲其取捨撰擇をなすこゝ能はず、空しく時を経るのみで遂に得る所なく、爲に配兵・防禦の法を誤り廢滅に歸した。即ち之によつて此の語があるのである。

第九 徳川家康の覇業 (四時間)

□要旨 徳川家康三河より身を起して信長と結び、其の没後は遺孤を助けて一時秀吉に抗したが、秀吉と結ぶの大志を遂ぐる所以なるを思ひ、隱忍時機の到來を窺ひ、徐ろに宿志を果して、徳川三百年の天下を保つる基を開くに至りしこゝを知らしむるのである。

□教授上の注意

一 家康の諸侯駕御の巧妙なりしを説き、三百年の天下を維持したる所以の偶然ならざるこゝを知らしめる。二 長久手の戦は家康が豊臣氏に代る基をなせるもので、歴史上注意すべき戦なれば家康の器につきて十分説明する。三 北條氏滅亡後秀吉は、家康の根據地を失はしめんとして關東に移す。是返つて家康に多大の便宜を與へたことを推究させる。四 家康時機を見て豊臣氏に代らん

ます。豊臣氏の臣等深く之を察すと雖も、威勢徳川氏に及ばず。徒らに秀頼・成長の後を期す。而も三成等形勢の如何を顧みず、家康の術中に陥りて事を構へ、豊臣氏の舊臣を擧げて敵黨に屬せしめ、以て豊臣氏の運命を短縮せしめたことを知らせる。五、若し關ヶ原戦が起らざりしとせば、徳川氏の運命は家康一代にて決するこゝは出来なかつたであらう。眞に天下分目の戦なることを覺らせるのである。

□教材の區分 第一時、家康江戸に移る。第二時、關ヶ原の戦。第三時、江戸幕府の創立。第四時、大阪の役。

第一時 家康江戸に移る

□目的 徳川家康天資英邁、三河より起りて次第に土地を併せ、秀吉と長久手に戦ひて其武名を顯し、北條氏の滅後關東に封ぜられ、江戸を其の居城としたが、是即ち他日覇業を容易ならしめたる所以を知らせるのである。

□教具 江戸城圖、長久手戦圖、中部及關東地方圖、家康畫像。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1) 信長は何地方を平定したか。(2) 秀吉は海内を平定する爲に誰々を征伐したか。(3) 秀吉が北條氏を滅した時、其の領地は誰に與へたか。(4) 家康の舊領を收めて、關東にやつたのは何故であ

つたであらうか。二 目的指示。

□教授 【家康江戸に移る】

(1) 徳川氏 徳川氏は新田氏より出づ、新田義重の四子義季が、上野國新田の庄徳川村に住したから、徳川と稱し八代此に居た。義季より九代目に至り三河に移り、家康の父廣忠に至るまで八代間は三河八代と稱し、三河武士は此の間に養成され、彼の譜代大名の多くは此の中から出てる。三河八代の祖は三河土豪松平重信の女を娶つたので、松平氏と稱し廣忠まで續き家康に至りて復姓した。家康は三河の岡崎に生れ幼名を竹千代と呼んだ。六歳の時今川義元の所に人質となり、行く途中織田信秀に奪はれ居るこゝ三年、八歳の時父廣忠に死別れた。後岡崎に歸つたが東の間で、亦義元の所に質となり駿河に居るこゝ八年、具さに辛苦を嘗めたが十五歳の時始めて三河に返つた。十九歳の時義元の斃るゝや信長と和し、近隣の平定に従事した。此處に於て信長は後顧の憂なく、西上を企て家康も亦、西方の憂なく東方に志すこゝが出来た。かくて家康は信玄と約して今川氏眞に逼り、遠州を取り濱松城に移つた。後信玄は西上を企てたので、之を三方ヶ原に戦ふて大敗したが、翌年信玄が死んだので參・遠一州は全く其有に歸した。更に信長と連合して勝頼を長篠に破り、之を天目山に滅するや駿河を併合した。本能寺の變の時甲斐の地が亂れたので、此の機に乗じ信濃を定め、其の所領は駿・遠・三・甲・信の五國に及び勢益盛になつた。

(2) 長久手の戦。織田信雄は秀吉の勢の盛なるを見快からず、天正十二年遂に之と隙を生じたので、家康は信雄を助けて、兵一萬五千を率ゐる尾張の小牧山に陣した。小牧山は濃尾平野の中央に孤立せる丘陵であつて、重要な位置を占めてゐる。秀吉は樂田に營し専ら之に備へた。其の部將池田信輝等秀吉に請ひ、羽柴秀次等と三河の虛をつき、徳川氏の後を擾さんとしたが、返へつて長久手で家康の襲ふ所となつて信輝等戦死し、全軍潰走した。秀吉は直に長久手に進んだが家康已に小幡の砦にあり、翌朝秀吉更に小幡を圍まんとすれば、家康亦小牧に去つた後、秀吉も家康の用兵の機敏にして端倪すべからざるを嘆稱した。兩軍は之より動かなかつたが、秀吉久しく戦ふの不利を慮り、遂に信雄と和し更に家康と和して其の庶長子秀康を養子とした。而も家康未だ秀吉と會見することを肯ぜなかつたので、秀吉は更に妹を嫁し母を送りて質に繋した。此に於て始めて家康大阪に至りて會見した。時に天正十四年十月である。世に長久手・嚴島・山崎の合戦を三大義戦と言つてゐる。是より秀吉の重んずる所となり、官位も進み慶長元年には正二位内大臣となつた。

(3) 江戸城。秀吉が北條氏を滅すや、家康は功に依つて伊豆・相模・武蔵・上野・上總・下總の六國に封ぜられ、家康の舊領は没收して他の諸將に分與した。是は秀吉が家康の威勢の強大なるを恐れた敬遠策で、駿・遠・三の諸領よりも、關東地方の方が遙かに徳川氏には不利益なることを豫想した。

のである。然るに徳川氏の爲には他日志を得る上に於て、非常に便利であつたのである。家康は武蔵の江戸城を修築して此に移つた。江戸城は紀元二千百年代の初頃(長祿年間)扇谷上杉氏の將太田道灌の築いた所で、規模頗る狹隘であつたが、家康此に移つてから大に擴張し、市街を設けたので城下は大に繁昌したのである。

□整理 一 教科書の讀解。二 次の諸項の問答。

(1) 徳川氏の家系について語れ。(2) 家康と信長との關係について話せ。(3) 家康と秀吉の關係について語れ。特に家康が秀吉より重んぜられたのは何故か。(4) 家康が江戸に移る様になつたのは何故か。其の得失は如何。三 質疑應答。

第二時 關ヶ原戰

□目的 秀吉薨後天下の實權家康に歸し、專斷の行多く三成等其の豊臣氏に不利なるを思ひ、之を除かんし、遂に關ヶ原に會戦するに至りし次第を授け、且つ關ヶ原の戰は豊・徳二氏の天下分目の戰であつたことを覺らせるのである。

□教具 關ヶ原戰圖、中部近畿及關東地方地圖、日本地圖。

□方法、豫備 一次の諸項問答。

(1) 家康が秀吉より重んぜられてゐたのは何故か。(2) 家康が江戸に移された理由、及其の得失は如

何。(3)秀吉の薨後は天下の大勢は何うなるだらう。二 目的指示。

□教授 【關ヶ原の戦】

(1)天下の實權家康に歸す。秀吉は五大老即徳川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多秀家・小早川隆景(隆景の薨後上杉景勝を之に補す)を置いて、天下の大事を決せしめてゐたが、中にも家康は領土廣く、且つ關東の大平野であるから、土地肥へ而も京都より遠ければ實力を養ふに都合よく、官位は内大臣正二位に陞つてゐた。故に威勢は甚だ盛であつた。前田利家は年最も長じて官位亦家康に次ぎ、徳望殊に高かつた。されば秀吉の薨後其の遺命により家康は伏見にありて政務を掌り、利家は大阪にあつて秀頼を輔佐してゐた。然るに秀吉の薨じた翌年利家病みて薨じたので、大勢は天下の實權家康に歸したのである。従つて家康の爲す所、秀吉の臨終に際して誓つた事にも背き、恣に諸大名と婚を通するなき、さかく已に都合の好きここのみやつた。之を見て豊臣氏の爲不利ならんことを恐れて、之を除かんとしたのは即ち石田三成である。

(2)石田三成と諸武將。三成は頗る才幹あり、又吏務に長ぜるによりて秀吉に信任されてゐた。秀吉が嘗つて鷹野に行つた時、一僧寺で茶を求め、一童の先づ巨椀をすゝめ、次に小椀を以てしたが、其の才に感じて携へ歸つたのが即三成である。秀頼出生してから機敏な三成は淀君に迎合して益、秀吉の信任を得たので、其の所領は僅かに十九萬石餘であるが頗る勢力があつた。されば加

藤清正・福島正則・淺野幸長等の攻城野戦の武斷派は、三成が文吏で而も權を弄するを憎み黨争益甚しかつた。遂に武斷派は家康に依つて三成を殺さんとしたが、家康は三成を領地に蟄居させて殺させなかつた。之家康の深志に出たこゝで、三成を生かして置けば早晚必ず事を起すであらう、其の時已に反對の諸大名を一撃の下に倒さんこの考があつたからである。故に關ヶ原戦は其の實家康の仕組んだものである。

(3)三成等の舉兵。三成は密に輝元・秀家・景勝等と謀りて之を除かんとした。慶長五年(二二六〇)景勝先づ其の領地會津に據りて家康に抗したので、家康は自ら之を伐たんとし兵を率ゐて東國に向つた。幸長・正則・黒田長政・細川忠興等亦前後して軍に従つた。三成は其の虛に乗じ増田長盛・長束正家等と共に、家康の罪を鳴らして秀頼の名を以て大に兵を募つた。檄に應じて來る者毛利輝元・島津義弘・宇喜多秀家・小早川秀秋・小西行長・長曾我部盛親・吉川廣家等、有力なる諸將頗る多く、輝元がこの盟主となつた。

(4)戦況。三成は慶長五年八月一日伏見城を抜き、家康の將鳥居元忠を斬り、兵を分ちて諸國を定めた。廣家・正家等伊勢より、本軍は直ちに美濃に進みて大垣に據つた。家康は之を聞き子秀康を留めて景勝に當らせ、子秀忠をして中山道より西上せしめ、自ら諸將を率ゐて東海道より進んだ。先鋒幸長・正則等の兵清洲に會し、二十三日岐阜城を陥れ織田秀信を走らせ、進んで赤阪に屯した。

三成其の直に京都を衝かんことを憂へ、使を大阪に遣はして輝元の出軍を請ひ、又大谷吉継を越前より招いた。然るに輝元未だ動かざるに家康已に赤阪に至りしを以て、三成等家康を迎へ撃たんとし、義弘・秀家等も關ヶ原に退いて陣した。西軍八萬、東軍凡そ七萬五千、激戦數時西軍猛烈にして東軍屢退却し、勝敗の數は未だ知るべからざる有様、然るに西軍の將小早川秀秋は、急に叛いて西軍の背後を襲ふた。最初家康と内約があつたのである。是に於て東軍俄に勢を得、西軍潰亂して勝敗忽ち決した。時に九月十五日である。當時天下の諸侯概ね東西に分属したので、戰爭諸方に起り形勢一時穩でなかつた。即細川忠興の父細川幽齋は、三成の諸將と丹後に戦ひ、黒田孝高は豊後・豊前に西軍の與黨を伐ち、加藤清正は熊本より行長の領邑を侵し、又孝高と共に立花宗茂を降した。故に關ヶ原は、實に江戸・大阪の雌雄決戦の場である。世に之を天下分目の戦いといつて居る。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 秀吉の薨後は天下の形勢は何うなつたか。(2) 關ヶ原の戦は何うして起つたか。(3) 豊臣氏の舊臣中、攻城・野戦の諸將が東軍に應じたのは何故か。(4) 戦況は何うであつたか。西軍は何うして大敗したか。(5) 何故天下分け目の戦であつたか。(6) 三成等西軍が敗れた原因は何か。何うすればよかつたか。三 質疑應答。

第三時 江戸幕府の創立、大阪役の原因

□目的

關ヶ原戦後家康大に賞罰を行ひ、而して諸大名の轉封を行ふに當りて、親藩・譜代・外様の大名を適當に配置し、而して幕府を江戸に開きたる次第を授け、且家康が諸大名の制禦策を得たことを洞察させ、尙大阪の役の原因を知らせるのである。

□教具

本州・四國・九州地圖、家康の諸侯配置圖、大阪役の圖。

□方法、豫備

一 次の諸項問答。

(1) 關ヶ原戦の原因は何か。(2) 戦況は如何。西軍の諸將は誰々か。東軍の諸將は如何。(3) 足利氏の幕府の亡びたのは何時頃か。二 目的指示。

□教授 一 【江戸幕府の創立】

(1) 諸將の賞罰 西軍の盟主輝元は秀頼を擁して大阪城にあつたが、一族吉川廣家の輝元の爲に圖るを聞き、復戦意ないので家康は正則をして大阪城を收めしめ、二十七日自ら之に入つた。是に於て家康大に賞罰を行ひ、三成・行長等を斬り秀家等の所領を沒收し、或は之を削減して有功の將士に増加した。中にも輝元は安藝・備中・備後・因幡・伯耆・出雲・隱岐・石見の八國を削られて、僅かに周防・長門の二國を保ち、景勝は會津仙道の地を削られて米澤に移つた。たゞ島津氏のみは其領地西方に偏在するので、本領を安堵することを得た。清正是行長の舊領を併せて肥後の大部を領

し、正則は安藝を得て清洲より広島に轉じ、幸長は紀伊を得て甲府より和歌山に移り、其の他移動する者が頗る多かつた。斯の如く家康は大に諸大名の轉封を行ひ、近畿・東海道・關東等重要なる地方には、親藩又は譜代の大名を配置し、外様の大名は功によりて加増したるものも、多くは之を僻遠の地方に移した。親藩は徳川氏の一族、譜代は徳川氏舊來の家臣をいひ、外様とはもろ家康と共に豊臣氏の部下にありし者が、彼徳川氏に服従したものである。

(2) 家康征夷大將軍なるに斯くの如く諸侯の配置を巧みにしたので、有力なる大名も徳川氏に反抗すること難く、天下の實權は一に徳川氏に歸した。かくて關ヶ原戰後三年、即慶長八年(二二六三)に至り、家康は右大臣に進み、鎌倉・室町幕府の前例に因りて征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開き以て天下の政治を總攬することとなつた。曩に足利義昭が信長に逐はれて室町幕府の亡びしより此に三十年、再び幕府は茲に創立せられ、以て明治維新に及んだのである。

二【大阪の役の原因】

(1) 戦後の豊臣氏 江戸幕府已に開けたに雖も、大阪城には尙豊臣秀頼がある。今や一の大名にして僅かに攝・河・泉六十五萬石の地を領するに過ぎないが、官位次第に進んで正二位右大臣に陞り、諸大名の中には秀吉の舊恩を思ふて心を寄する者も少からず、又大阪城は要害堅固で金穀の貯蓄亦甚だ豊である。されば家康は之を憚り常に後患を斷たんを策を廻らしてゐたのである。



片桐且元
(藏院林玉中寺德大國城山)

樂子孫殷昌」をあるを慙む次の如く曲解した。「右は僕源の朝臣家康公を射る。關東を以て月に比して陰にする。安の字によりて家康の身首を異にすべく兩斷す。豊臣を君として子孫殷昌を樂しむむ。」かくて家康、呪咀するものにして大に怒り式を中止せしめた。秀頼は止むなく片桐且元を

(2) 鐘名事件 先に秀吉が京都に建てた方廣寺は慶長元年の大地震のために佛像摧けたので、家康は秀頼にすゝめて再興し以て秀吉の遺志を全うせしめんとした。其の意は大阪城中の財を費消させん爲である。秀頼は喜んで大工事に着手中、一度火事を起したので、更に工を起し慶長十七年漸く成つた。像の高さ六丈三尺、佛殿十五丈、東西十六丈、南北二十七丈、廻廊大門の規模舊に勝れた。十九年重さ一萬七千貫の巨鐘を鑄、開眼の供養を行はんとした。然るに南禪寺の僧清韓上人の起稿した鐘銘中に「右僕射源朝臣家康公東迎素月西送斜陽國家安康、君臣豊

駿府(此の時家康は職を秀忠に譲り駿府に居た)に赴き、辯解させたが家康の意容易に解けなかつたので、遂に三策を案じた。(一)秀頼の生母淺井氏(淀君)將軍秀忠の夫人(淀君の妹)は姉妹なるを以て、往いて江戸に居る第一策なり。(二)秀頼、秀忠の婚たるの故を以て暫く夫人と共に東下する第二策なり。(三)秀頼大阪城を去り封を他に求むる第三策なり。三者其の一を選ぶに非ずんば家康の心到底釋くるに由なからん。三、然るに淺井氏は且元を以て家康の意を承けて主を賣るものとし、大野治長等謀つて之を誅せんとした。且元之を知り其領邑に歸つた。かくして家康は巧みに且元淺井氏を離間し、遂に大阪の陣を惹起したのである。

□整理 一 設問。

- (1)關ヶ原戦後家康は諸大名を如何に處分したか。(2)又諸大名を何んなにして配置したか。(3)家康が江戸に幕府を開いたのは何時か。室町幕府が亡んでから何年立つてゐるか。(4)關ヶ原戦後豊臣氏は何うなつたか。尙家康が之を憚つたのは何故か。(5)家康が豊臣氏を亡ぼさんとして何んな事をしたか。方廣寺の鐘名事件とは何か。二 質疑應答。三 教科書「江戸幕府創立」の讀解。
- 第四時 大阪の役
- 目的 家康大阪城を攻め遂に豊臣氏を亡ぼして後患を絶ち、以て徳川氏三百年安泰の基礎を作りたる次第を授けるのである。

□教具 大阪城平面圖。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1)關ヶ原戦後徳川氏と豊臣氏との關係は何うなつたか。(2)家康は何故秀頼を恐れたか。(3)二氏が愈々鋒を交ゆるに至つた動機は何か。二 目的指示。

□教授 【大阪の役】

(1)大阪冬の役 慶長十九年(二二七四)十月、秀頼遂に意を決して兵を募つた。集るもの長曾部盛親・眞田幸村・後藤基次・毛利勝永・明石守重等總勢約九萬、而も諸大名中一人も之に應ずる者なく、且大野治長專横にして諸將和せず、屢、戦機を失ふた。されど天下の名城に死を期して籠れる勇將、幸村・基次及木村重成等大に奮戦したので、家康・秀忠と共に自ら軍を督し、十五萬の大兵を以て包圍すれど、なか／＼撈取らぬ。家康遂に和議を勧めたのである。城中の將士は皆之を不可としたが、淀君は砲彈に恐れて戦意なく、遂に和議成り誓書を交換した。此の役は十一月に始り十二月に終つたから、之を冬の陣といふのである。

(2)夏の役 誓約の明文としては、一、今度籠城の諸浪人以下異議あるべからざること。一、秀頼御知行前々の如く相違ある可からざること。一、母儀(淀君)在江戸の儀之有るべからざること。一、大阪開城之あらば何國と雖も望み次第替へ進すべしこと。一、秀頼御身上に對し表裏有るべ

- (1)家康は大阪城の容易に抜けざるを見て何うしたか。(2)家康は何故一旦和を乞ふたか。(3)大阪方は何故に家康の術中に陥つたか。(4)大阪の役の結果は何うなつたか。(5)元和偃武は何か。(6)家康と秀吉とを比較せよ。人物の違ふ所を語れ。(7)家康は豪い人である……が世間で兎角批難せられるのは何故か。……(策略に無理が多かつたからである)。
- 三 質疑応答。

□復習……………二時間。

第二學期

第一〇 江戸幕府の組織と其の政策 (二時間)

□要旨 家光・家康の計畫を継ぎ、諸侯の操縦、朝廷に對し奉る政策、及幕府の組織を擴張整理したるを以て徳川氏の政は燦然として著はれるに至りしことを明にし、幕府がよく中央集權の實をあけて二百五十年間の無事を保ちしは、其の制度の功大なることを知らしむるのである。

□教授上の注意

- 一 幕府政治は我國體と相容れざるものであることを説き、幕府が朝廷に對し奉りて、苦慮せしことについて知らしむる。二 家康は單に不世出の名將に止まらずして、又絶倫の政治家であつたことを知らせる。又其の事績性格は最もよく源頼朝に似てゐる所があるので、之と比較して考究せしめる。三 參觀交代は幕府が二百六十年間諸侯に對する制肘策で、諸制度中最も注意して見るべきものであるから、詳説して其の政略の周密であつたことを知らせる。

□教材の區分 第一時、家康守成の功を完うす、幕府の組織。第二時、朝廷に對し奉る政策、諸大名に對する政策。

第一時 家康守成の功を完うす、幕府の組織

□目的 家康は信長・秀吉の後を承けて守成の功を完うし、家光に至り擴張整理したこゝ、及幕府の組織に就いて授け、源氏等の幕府組織と比較考究させるのである。

□教具 本州・四國・九州地圖、家光畫像。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

- (1) 信長・秀吉・家康の事績を簡單に比較せよ。(2) 關ヶ原戰後家康は如何に諸侯を配置したか。
(3) 家康は何故豊臣氏を滅したか。(4) 秀吉は施政上何んな役人を置いたか。源頼朝・足利尊氏は如何。二 目的指示。

□教授 一 【家康守成の功を完うす】

- (1) 三雄の關係 信長・秀吉・家康は何れも尾張・三河附近の人で、年齢も大差なく最年長者は信長で天文三年に生れ、秀吉は信長より二歳若く天文五年に生れ、家康は最も若く秀吉より六歳下で天文十一年に生れた。卒去の年齢は信長四十九、秀吉六十三、家康七十五、子孫の繁榮に就いて言へば、織・豊二氏の子孫で、今日榮えて居る者なきに反し、徳川氏は藤原氏の如く榮達してゐる。三雄を時鳥にたとへて評した有名な俳句がある。

鳴かぬなら殺してしまへ時鳥 (信長)

鳴かぬなら鳴かして見せう時鳥 (秀吉)

鳴かぬなら鳴くまで待たう時鳥 (家康)

之はよく三人の性格を穿つたものである、初め信長天下平定の業を創め、秀吉之に繼ぎて其の功を遂けたが、更に其の後を承けて守成の功を完うしたものは家康其の人である。

(2) 家康・家光の施政 家康は武家諸法度を制して、大名の遵守すべき所を示し、又公家法度を立て、皇族・公卿等に關する事柄をも定めた。かくて江戸幕府は次第に發達して、秀忠を経て三代家光に至り、紀綱大に張り組織も亦大に整ふた。秀忠は勤勉篤實の人で守成の器である。家光は幼名を竹千代といつて二十歳の時職についた。其の幼時は名高き春日局の教養により、又其の成人の後は松平信綱・阿部忠秋・土井利勝・酒井忠世等の輔導により、益々其の英資を玉成せしめ、在職二十九年四十八歳で薨じたが、此の間に徳川氏の礎を更に固うしたのである。尙家光に就て特筆することは、外様大名の威壓である。家光の就職當時諸侯を集めて宣言して曰く、「我祖考は卿等と同僚たりしを以て、待遇の禮を厚うせり。予は坐ながら大政に當り、自ら祖考と異り、今後卿等を待つこゝ譜代大名と同じうせん。卿等もし天下兵馬の權を望まば、宜しく國に就きて兵食を調ふべし。」と、此の時伊達政宗は「普天の下誰か當家の恩を蒙らざるものあらん。もし之を忘れ非謀を企つる者あらば、政宗一人馳参じて踏み潰さん云々。」と、申したので、他の諸侯も皆「政

宗の言の如し。」とて、心服したのである。

二【幕府の組織】

(1)幕府の職制(中央政府) 幕府の重職には、三役・三奉行がある。三役とは、大老・老中・若年寄で、譜代大名に限る。

大老は幕府諸役の首位にあり、一人なれど必ずしも置かない。重要な政務即公家諸大名のこと等は、老中の掌る所で其の首席のものが之を統轄するのが常である。老中は五人月々一人宛交番して政務を執る。若年寄は老中を助け、旗本即將軍直隸の諸士を統べるので、五人又は六人ある。三奉行は、寺社奉行・町奉行及勘定奉行で、寺社奉行は全国の寺・社領・神官・僧侶に關す事務を取扱ひ、私邸を以て官衙とし、此處で訴訟を聽く、江戸町奉行は江戸町内の市政と訴訟を聽く。勘定奉行は幕府の財政を司る外、關八州の訴訟及公領(幕府の天領)の訴訟を聽くのである。

(2)地方の職 地方には諸大名を封じてあるが、重要な地は多く幕府の直轄とし、郡代又は代官を置いて支配させてゐる。郡代は支配の地十萬石以上、代官は其れ以下で大概世襲であつた。特に京都には京都所司代を置いて、皇室・京畿の政治及西國諸大名の監督をせしめた。又大阪及駿府には城代を、又京都大阪等に町奉行を、佐渡・伏見・長崎・日光・山田等にも奉行を置いた。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)家康は如何にして守成の功を完うしたか。(2)家康の計畫を繼いで、之を擴め又整理したのは誰か。(3)幕府の職には何々があるか。各如何なる役目に當つてゐたか。(4)頼朝の時の職と較べて御覽。尊氏及秀吉の時とは如何。(5)他の職には何々があつたか。各如何なる役目があつたか。

三 質疑應答。

第二時 朝廷及諸大名に對する政策

□目的 幕府政治は我國體と相容れざるが故に、幕府は朝廷に對し奉り最も苦慮したもので、陽に之を尊び陰に之を制し奉り、又藤氏に倣ひて外戚となつたこと、及諸大名に對する政策を説いて、江戸幕府が二百六十年間、中央集權の實を擧げて、其の無事を保つことを得た所以を領解させるのである。

□教具 本州地圖、後水尾天皇御畫像、大名行列圖。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1)幕府の職制に就いて語れ。(2)地方の職制は如何。二 目的指示。

□教授 一【朝廷に對し奉る政策】

(1)公家諸法度 我國は幕府政治の其の國體と相容るべきものに非ず。故に幕府は大に苦慮したのである。陽には皇居を修理し、廢れた儀式を興し、又供御の料を豊にし奉る等頗る之を尊崇した。

江戸幕府の組織と其の政策

されども政治上の實權に至つては自ら之を掌握し、且公家法度等によりて朝廷の御事に干渉し奉ることもあつた。公家諸法度の中には、「天子は寛平遺誠に因り古道及和歌を學び、見任三公は親王の上に班し、武家の官位は員外みんぐわいとし、朝臣の繼嗣は異姓を取らず、服章は其等を踰ゆることを得ず。」等十七條である。

(2)皇室の外威となる。徳川氏は又藤原氏の例に倣つて、遂に秀忠の女を納れて後水尾天皇(百七代)の中宮なかつとなし奉つた。中宮の生み奉れる皇女は、後に位に即かれた。之を明正みやま天皇(百八代)と申し、稱徳天皇より後凡そ九百年にして、女帝が位に立たれたのである。

二 諸大名に對する政策

(1)幕府の要職。關ヶ原戰後、家康大に轉封を行つて外様大名を抑へたが、幕府を開くに及んでも、其の要職には譜代大名のみを任用し、外様大名には政治上の實權を與へなかつた。

(2)三家三卿。家康又一族を要地に分封して、幕府の藩屏はんぺいとし、以て他の諸大臣を牽制せしむる方針を執り、後の將軍も亦之に倣つた。中にも家康の三子義直よしの・頼宣・頼房を祖よせしむる、尾張・紀伊・水戸の三親藩は、殊に敬重せられてゐた、世に之を三家さんかといふ。後八代將軍吉宗は分封の例を罷めて、新に田安・一橋の二家にっかを起した。吉宗の二子宗武・宗尹は其の祖である。九代家重、亦其の子重好をして清水家を起させた。世に之を三卿さんけいと稱してゐる。

(3)武家諸法度。家康は武家新令を定め、大名の參觀交代は毎年四月とし、新に城郭を築くを得ず、

武家諸法度

一文武馬道事可相濟幸
 尤文武吉法也不可兼備矣馬是武
 家之要也事共為凶器不得已而用之治不
 忘亂何不願伏誅乎
 一可別群飲使遊幸
 今條取裁嚴別殊重既好色崇博矣是之國
 之基也

諸侯の妻子を江戸に置きたるに始まつたので、寛永十一年に

諸國變亂あるも命を待たずして兵を動し、或は徒黨を結び、或は諸藩私闘し若くは私に婚姻を結ぶなき、固く禁じた。是を武家諸法度ぶけあそりほうどといふので、之を厲行し諸侯中所領を沒收された者は頗る多い。加藤・福島等豊臣氏以來の大諸侯で、之が爲斷絶したものは少くないのである。

(4)參觀交代。家光は、諸侯をして邸宅・妻子を江戸に置かせ、參勤交代の制を確定した。諸侯の妻子を江戸に置いたのは關ヶ原戰後、前田利家の子利長が二心なきを示す爲、其の母を江戸に置きたるに始まつたので、寛永十一年に至り幕府は譜代大名の妻子を、悉く江戸に移させた。其の翌年武家諸法度を定め、諸大名をして隔年參勤せしむることとした。之は諸大名に多大の財を費消させること、意志の疏通を圖る爲めである。斯の如くして幕府は其の制馭には頗る意を用ゐたので、幕府が能く中央集權の實を擧げ、

久しく其の無事を保つ事を得たのは、此の制度の功が實に與りて力あるのである。

□挿畫の説明 本圖は想像して描いたものである。先頭の挾箱の定紋より見るに、九曜星であるから、三河櫻井で五萬石を領してゐた、松平氏であらう。行列の先頭の一人は先拂で、頭に菅笠を頂く、其次に二人並びて箱を荷負つてゐるが、此の箱は挾箱といひ、衣類を藏むる用に供したもので、紋は九曜星である。其の次に二人並びて持てるは鎗で鞘をはめてゐる。其の後方に二人並の徒士五組あり。其の次に持てるは薙刀で鞘を覆ふてゐる。次に二人並びの士六組ありて乗物あり。其兩側に側衆四人居る。次に徒士ありて其の後に高く三人のものあるは鎗で、白肉の毛の鞘をはめてゐる。次にあるは日傘及雨傘で覆を被らせたものである。次に挾箱ありて二頭の乗馬がある。此は大名の乗用の正馬及副馬である。次に馬上にあるは身分高き人で大名に次ぐ人である。其の後に擔へるは籠で諸調度を納めたものである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 幕府は朝廷に對し奉りては如何なる政策を用ゐたか。(2) 朝廷に對し奉りて何故に苦慮したか。(3) 幕府は諸大名に對して如何なる政策を用ゐたか。(4) 徳川幕府が中央集權の實を擧げ、久しく無事を保つことを得たのは何故か。(5) 足利氏の室町幕府と比較せよ。(6) 家康は不世出の武將で、且つ大政治家であることは誰によく似てゐるか。(7) 頼朝と家康とを比較せよ。三 質疑應答。

第一一 海外諸國との交通 (二時間)

□要旨 國內の秩序回復するに至り、家康開國主義を確立して海外諸國との交通を開きしより、通商貿易盛に、國運の發展大なりし次第を知らしむるのである。

□教授上の注意

一 常に開國主義を取り、海外と貿易せし家康の見識の非凡であつたこと、及當時海外交通は古來未曾有の隆盛に達し、國人の海外思想また大に發達したことを説明して、大に海事思想の涵養に務めねばならぬ。二 先に南蠻人即ち西・葡兩國人の渡來後、英・蘭二國人も我國に渡來するに至りし西洋の形勢の主要を授ける。三 墨西哥に就いては、現今我國との關係をも説き、同國には我國人の子孫もあるこの説である。是即我國人が此の時代に彼の地に渡りし事に根據を置くものである。今後彼我國民は互に親密にすべきことをも覺らせる。四 山田長政等に就いては特に詳述して、大に發奮せしめねばならぬ。

□教材の區分 第一時、朝鮮及支那との交通、西洋諸國との交通。第二時、國民の海外渡航、海外の日本人。

第一時 朝鮮及支那の交通、西洋諸國との交通

海外諸國との交通

□目的 家康、朝鮮及明等と修好を計り、更に西洋の諸國と交通せんし、外人を召して海外の事情を問ひ、遂に和蘭人ニ貿易し、且つ墨西哥にも交通せんとして人を遣はしたことを授け、以て當時の方針の進取的であつたことを覺らせるのである。

□教具 世界地圖、亞細亞地圖。

□方法、豫備 一 次の事項の問答。

- (1) コロンブスがアメリカを發見したのは何が動機か。(2) 我國に最初西洋人が來るは何時頃か。
- (3) 南蠻人とは何國人か、何を傳へたか。(4) 西・葡の二國はアジアでは何處を根據としてゐたか。
- (5) 秀吉の外國政策に就いて語れ。二 目的指示。

□教授 一 【朝鮮及支那との交通】

(1) 朝鮮との修好 曩に秀吉が朝鮮を伐ち又明軍と戦を交ふるや、彼我の交通は之が爲に殆ど中絶した。然るに家康に至りては更に隣交を復せんし、對馬の宗氏をして朝鮮交通のこころを圖らせし。是より朝鮮は我が將軍の襲職毎に、慶賀の使節を我國に遣はすこころなつた。幕府は大に之を優待してゐたのである。

(2) 支那との交通 明の修好は遂に成らなかつたが、其の商人は長崎に來て貿易を營んだ。明亡び清が興るに及んでも、尙先例に従つて常に來て貿易に従事した。清は滿州に起り南下して明を

亡ぼし、最初奉天を其の都としてゐたが、後北京を其の首都としたのである。

二 【西洋諸國との交通】

(1) 秀吉・家康の對外方針 南蠻人との貿易は戰國時代に於て既に開け、沿海の大名商人等盛に之に従事してゐた。秀吉は海内を平定するに當りて、海外交通の方針を執り、書を臺灣・フィリピンまでも送つたのである。家康は其の後を承けて益々意を外國貿易に注ぎ、葡萄牙・西班牙以外の諸國とも、交通を開くの志があつたのである。

(2) 家康の顧問 慶長五年、和蘭人

南蠻人來渡圖(屏風繪)の内の日本史料よりの寫す



この家は康同寺に中宮に
風屏の同寺に上
は同寺に上
も賜に上
静川に上
岡家川に上
來る家川に上
院のな達に上
英長より贈りた
寺のふをしり
所のふをしり
藏のふをしり
に二十更り

「ヤン、ヨーステン」英吉利人「ウィリアム、アダムス」が、和蘭の商船に乗りて我國に漂着した時、家康は之を江戸に召し居宅を與へて優遇し、海外の事情を問ふた。

(3) 和蘭との貿易 葡萄牙が九州で貿易を開いてから六十年、一時は西班牙の勢ひ獨り盛であつたが、西班牙に内亂を生じ、又歐洲では耶蘇新教起り、乍戈相踵ぎ葡國も遂に衰へ、和蘭は自立し盛に航海の業に従事して、世界に發展し西葡に代つたのである。英吉利も漸く勢を得る様になり、盛に世界政策に汲々としてゐた。和蘭は東洋方面に於ては葡・西二國人、即我が所謂南蠻人ニ類りに貿易の利を争ひ、遂に我國に来て通商を許された。其の後英國人も亦来て通商を許されたが、後和蘭人は幕府の歡心を得て、南蠻人との競争に打勝ち、又英吉利人をも壓倒して専ら我國との貿易の利を占むる様になつた。

(4) 墨西哥との交通を圖る 家康は當時西班牙の領地であつた墨西哥と交通を開かんことを圖り、遠く人を其の地に遣はした。是實に國民の太平洋を横斷した始めである。墨西哥は只今は獨立國で我條約國である。現今墨西哥人の姓等によりて、或は我國人の子孫も混入してゐるはせねかといふ人達もある。北は米合衆國に接し、今米國との葛藤は常に絶えぬのである。家康は斯の如く開國主義を取り、海外と貿易したこゝは其の見識が非凡であつたからで、實に其の方針は頗る進取的であつた。

□整理 一 教科書の讀解。 二 設問。

(1) 家康は海外諸國に對し何んな方針であつたか。(2) 先づ支那・朝鮮との關係は何うであつたか。(3) 家康は誰を顧問としたか。(4) 當時西洋諸國の有様は何うであつたか。(5) 我國では何國が最も優勢であつたか。(6) 家康は葡・西・葡以外に何處と交通しやうとしたか。 三 質疑應答。

第二時 國民の海外渡航、海外の日本人

□目的 外人の渡來盛なるに及び、我海國男子は進んで海外諸國に貿易に従事し、遂に海外に移住する者あり。且つ大に武威を發揮して我國威を耀したる者あるに至れるこゝを説き、海外思想及進取敢爲の氣象を涵養せんとするのである。

□教具 世界地圖、アジア地圖、朱印船の圖、支倉常長及山田長政の畫像。

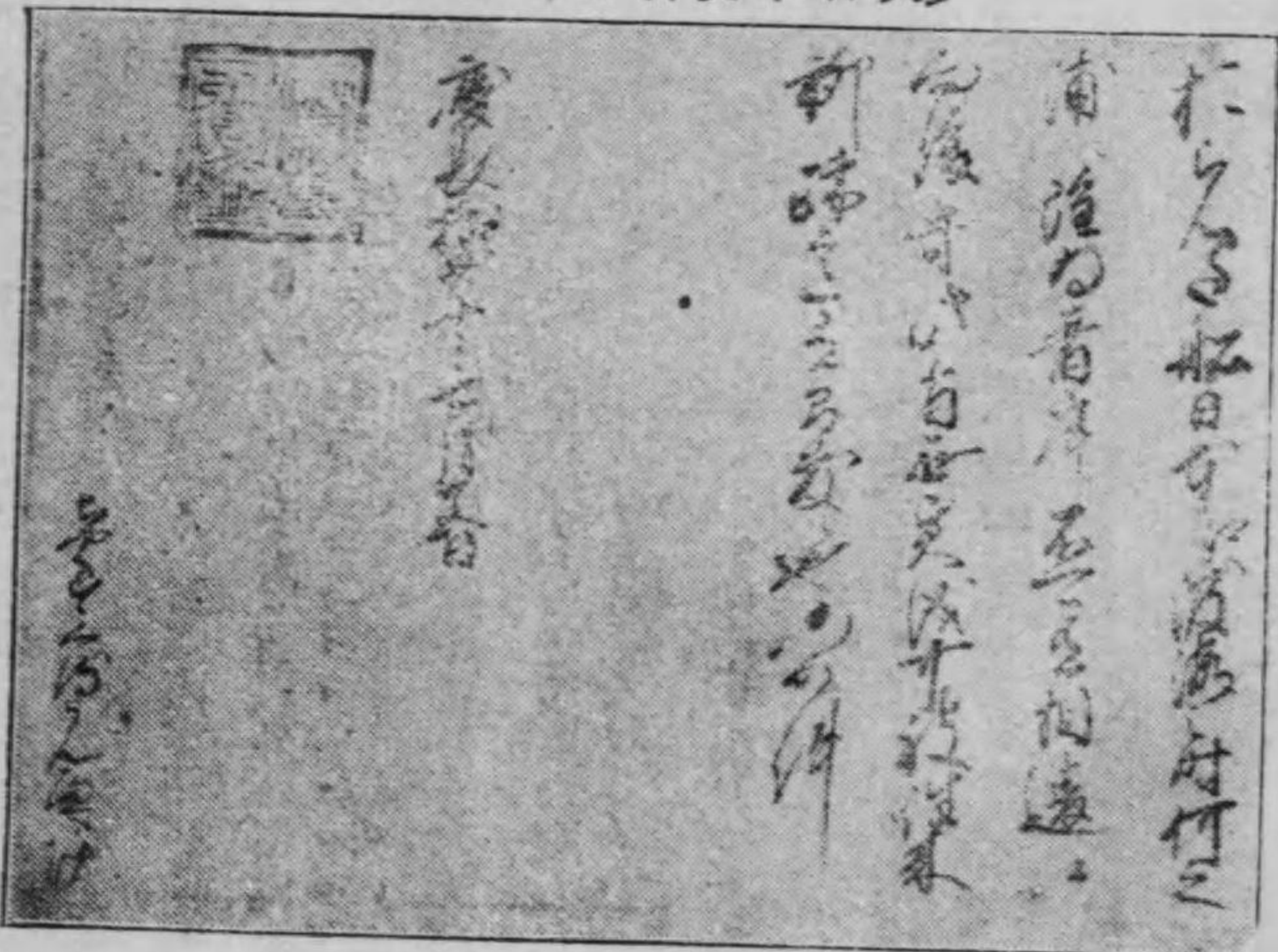
□方法、豫備 一 次の諸項問答。

(1) 家康の對外方針は如何。(2) 西洋諸國との交通の有様について語れ。 二 目的指示。

□教授 一 【國民の海外渡航者】

(1) 朱印船 外人の渡來漸く盛なるに及んで、敢爲進取の氣象に富める我海國男子は、徒らに坐して遠來の客を待つに満足するものに非ず。秀吉の頃早く既に朱印の免許狀を得て、澳門・フィリピン・印度・支那等に交通し、貿易に従事したものがあつた。世に其の船を朱印船と稱してゐる。朱印

印朱航渡船ダンラオ
(藏館書文ゲーハ國ダンラオ)
〔す寫りよ料史本日大〕



おらんだ船。日本え渡海之時。何之浦々。雖爲著岸。不可有相違候。向後。守此旨。無異儀。可被往來。聊疎意有間敷候也。仍如件。

慶長拾四年七月廿五日

御朱印

ちやくすくるうんべいけ

ちやくすハ、ヤコブ (Jacob) くる

うんべいけハ、フルーネウエーヘン

(Groenewegen) なり。

船は其の製頗る堅牢で、人を載する數百人、操舟の術に練熟し、遠く墨西哥までも行かれたのである。其の求むる外貨は、繭糸・絹布・絨緞・砂糖・藥物等で、賣與する國産は、銅・銅器・屏風・硫黄等である。江戸幕府の初に至りては朱印船の數益多く、我商人角倉末次等の外、島津・鍋島・加藤・細川・松浦・有馬等の諸大名、並びに寺院及外國人にして海外渡航の免許の朱印狀を得たものは少くなかつた。

(2) 支倉常長は伊達政宗の臣である。政宗も亦外國に交通を開くの志あり。幕府に請て即常長を西洋にやつたのである。常長西班牙人ツテロに就て彼の國情を聞き、慶長十八年九月十五日陸奥國月の浦より發し、太平洋を横斷して翌年一月メキシコに着き、尋で太平洋を経て西班牙國マドリット府に入り、國王に謁して書を呈し、更に伊太利に入り法王ポール十五世に見えて信書・音物を呈し、彼の書品を持つて八年を経て歸つて來た。元和八年七月一日歿した。年五十二。

二 【海外の日本人】

(1) 國民の對外發展は我國民の渡航盛なるに隨ひて、海外に移任するもの亦多く、暹羅・呂宋其他所々に日本町の存在を見るに至つた。是等の渡航者の中には國威を海外に耀かしたものがあつた。
(2) 山田長政は通稱仁左衛門といひ、駿河の人である。幼より磊落で大志あり。農商を事とせず兵法を談じて喜んでゐたが、當時天下太平で國內では己の志を伸ぶる能はず、海外に雄

飛せんとしてゐた。時に瀧・太田の二商人、舟を懸して臺灣に航せんとしてゐたので、長政は便乗を乞ふて許されず。止むを得ず船艙中に隠れて待つてゐた。二人は之を知らずに出帆した。長政の船艙より出で再び乞ふたので遂に許した。時に年二十七、一度臺灣に降り又暹羅國に渡つた。時に國內騷亂し六昆最も強大である。暹羅兵を出して之を防いだ。長政其の行軍を見るに軍規整はず、人に語りて「暹軍必ず破れん。」と、果して其の通りであつた。國王其の言を聞き長政を引見して方策を聞いた。長政策を進めたので王大に喜び、之に托して六昆を討させた。依て日本人の暹羅に在留するものを集めて軍隊を組織し、六昆國と戦ひ大に破り、長驅して國都に入り國王を擒にして歸つた。暹王大に賞し妻はすに其の女を以てし、六昆及逸比留の地に封じた。國王老いて政に倦み、國政を長政及甲花木に委ねた。甲花木は長政の聲望遙に其の上にあるを妬み、國王の歿後其の寡婦と通じて幼王を毒殺したので、長政大に怒り兵を以て攻めんとし返つて亦毒殺された。長政、瀧・太田の二商人の臺灣に行つた時、使を出して呼び厚遇して其の恩を謝し、歸るに及んで淺間神社に戦艦の繪を献じた。

(3) 濱田彌兵衛 慶長十九年和蘭人臺灣に據り、我商船を劫し財物を掠奪した。寛永の初、長崎代官末次氏の船も亦劫掠せられたので、浪人濱田彌兵衛百餘人を率ゐて臺灣に航し、酋長に通り貨物を賠償させ、酋長の子を質として率ゐて歸つた。

□ 挿畫の説明

- (1) 朱印船 本圖は朱印船の一なる末吉船を寫したものである。末吉船とは船の經營者末吉氏なるが故に斯く呼んでゐる。幕府の允許を得、朱印の捺した書き物を貰つてゐたから朱印船といふのである。船の構造は下底を深くし、外面は悉く油・石炭で塗り、舵は大なる鐵の肘を數ヶ所に打つてある。船の大きさは二十間位で、八千石(四斗俵の米二萬俵)を積み得るさいふこである。帆は皆布帆で船の中央にある大なるものは本帆、其れを大桅といふ。本帆の上に頭樓かぶたまち、さいふ樓さいふぼがある。船尾に見ゆる尾形は尾樓おしやうと稱し、二階造りになつてゐる。尾樓の所に建つてゐる旗は、順風旗じゆんぷうと稱する。紋は持主の末吉、又船名の末吉を表はせるものである。本帆の帆桁上に在る三人は水夫で、操帆せる所、甲板に居る人の中に武士がある。坐せる人の中には三味線をひき居るもの二人、琵琶を持てるもの一人、扇子を持つて歌へるもの一人、尾樓の中に居る人は身分貴き人で、今此等の人々は遊樂せる所である。
- (2) 支倉常長 服装は裸着とせるは洋式のもので、現今のシャツの如きもの、其の上に着てゐるは日本式の衣服、膝に垂れてゐるのは耶穌教の一派の佩ぶる十字架である。
- (3) 山田長政 屋代太郎弘賢所藏の古畫を模寫したもので、長政の着せるものは下に鎧、上に暹羅の上衣を重ねてゐる。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)朱印船とは何か。(2)朱印船を持つて居たものは誰々か。(3)支倉常長に就いて語れ。(4)山田長政に就いて語れ。(5)我國人が斯くの如く外國で發展する様になつたのは何故か。三 質疑應答。

第二二 基督教の傳來と島原の亂 (三時間)

□要旨 基督教傳來するや、忽ち各地に弘布したが、遂に政治上の大問題を生じ、開國主義を變じて鎖國主義となし、一時興隆してゐた、外國通商の根絶を見るに至りし次等を知らせるのである。

□教授上の注意

一 耶蘇教の起原、並に主旨の大要を授け、布教上に於ける新舊兩派の差異と、我國に傳來せる宗派の如何なるものなるかを説き、和蘭人のみ我國と交通を繼續した理由を知らせる。二 當時の切支丹宗と現今行はるゝ基督教との關係を取調べさせる。三 幕府外交を嚴禁し、天下の人民をして悉く佛門に入らせた。之より佛教は我國教となれることを知らせる。四 鎖國令を説くに當りては、從來發達してゐた我國人の海外冒險の思想を抑制し、貿易の利を失し、新學術等輸入の道を杜絶するに至つたこと。造船術航海術の衰微を生ぜしこゝ等、外交に影響した諸問題を説明し、殊に世界

の大勢に疎くなりて、末年外國艦船渡來に際し、遽に周章狼狽せしは當然であつたことを覺らせる。五 當時海外所々に我國移民の村があつた。もし鎖國を行はなかつた場合を想像せしめるのも一興である。

□教材の區分 第一時、基督教の傳來。第二時、切支丹宗の禁制。第三時、島原の亂、鎖國。

第一時 基督教の傳來

□目的 基督教の由來及其の傳來した次第を説き、海外交通の結果として、我國人中に是に歸依せる者多くなるに至つたことを知らせるのである。

□教具 歐洲地圖、亞細亞地圖、日本全國。

□方法、豫備 一 次の諸項問答。

(1)我國民の海外渡航者の多くなつたのは何故か。何國の船に乗つて行つたか。(2)支倉常長は何處に行つたか。二 目的指示。

□教授 一 【基督教の傳來】

(1)基督教 基督教は今の亞細亞土耳其の一部、「シリヤ」の「バレスティン」に起つた宗教で、耶蘇基督の唱へたものである。基督は我垂仁天皇の御代「ユダヤ」國に生れた人で、後磔殺せられたが、其の教法は漸次に歐羅巴に傳つた。羅馬歴代の皇帝は常に其の教徒を迫害したが、「コンスタン

チン」帝に至りて始めて保護を加へた。此の後羅馬に於ける大長老は權勢甚だ強く、歐洲諸國の帝王を凌ぐに至つた。之が所謂羅馬法王である。然るに我後柏原天皇の御代(戰國時代)に當り、獨逸人「ルーテル」等は法王に反對し、新教を主張した。當時羅馬法王以下僧侶の專横を極めて人心を惑はし、爲めに弊害が甚しかつたからである。斯くて新舊兩派に分れて烈しく相争つたが、結局舊教徒の勢歐洲に衰へんとしたから、其の徒の中に新に有力なる團體を組織して、盛に其の教を弘布せんとするものが起つた。西班牙人「ロヨラ」等の發起した耶穌會之である。

(2)「サビエー」來る。是等の人々は非常なる熱心を以て、遠く東洋の諸國にも布教したが、葡萄牙人の始めて渡來してから、六年を経て紀元二千二百九年(天文十八年)に至り、葡萄牙の宣教師「フランソア、ザビエー」が薩摩に始めて來た。「ザビエー」は「ロヨラ」の同志で、耶穌會より印度地方に派遣せられた人である。此に於て我國始めて基督教あり、邦人は切支丹宗ミ呼んでゐた。「ザビエー」又肥前平戸に移り教を説き、國民の歸依するもの漸く多くなつた。次で博多・山口を経て二十年京都に赴いたが、戰亂の爲め目的を達せず、歸りて山口に行つたが、大内義隆深く之を喜ひ大に待遇したので、宣教に力め更に豊後に至り、大友義鎮(入道宗麟)を歸依せしめて印度に歸つた。之より宣教師の代り來るものが絶えなかつた。

(3)切支丹宗國內に弘る。三好長慶は宣教師「ウイレラ」の爲に、之を保護して會堂を建てさせた。



大友宗麟ははやくキリスト教を信じ洗禮を受けてフランシスコと命名したり印文はその頭字なり 黒田如水は長政の父孝高なり印文はシメオン・ジョスイと刻し中央に十字架を記す 細川忠興のは「マ」字を以てその名を綴りたるものなり忠興はキリスト教信者にあらずれば全く好事に出でたるものなるべしとにかく當時歐文の行はれし状況を察するに足る

章 印 字 マ ー ロ

京都の南蠻寺の始めである。織田信長京都を定むるに及びて、天正四年宣教師(フロエー及オルガンタン)の爲に會堂を再建させた。其晩年には安土にも會堂及學校を建築した。信長がかく之を保護したのは佛教徒の勢力を殺がなが爲めである。信長は後其の異圖あるを疑ひて之を禁ぜんとして中途に斃れたので果さなかつた。此の年九州の大友宗麟・有馬晴信・大村純忠相謀りて、「ワリニヤニ」を嚮導として使を羅馬に遣はし、「グレゴリオ」十三世に謁して敬意を表せしめた。かくて我國には次第に弘まつたのである。

挿畫の説明

當時洋風の建築物は、此の外に京都の南蠻寺等二三あつた。和式建築法と比較して三百年以前已に

斯くの如き洋風の傳つてゐたことを知らせる。寺の前に上下を着せるは邦人で、異装せるは葡萄牙の宣教師である。遙かに前方に見ゆる湖水は琵琶湖である。

「整理 一 教科書の讀解。二 設問。」

- (1) 基督教は何處に起つた宗教か。誰が唱へたか。(2) 當時基督教の最高權威者は誰か。(3) 基督教が我國に傳來する様になつたのは何故か。我國に來たのは新舊何れか。最初誰が來たか。(4) 「ザビエール」は誰を歸依させたか。(5) 切支丹宗を保護したのは誰々か。如何にして弘めさせたか。(6) 使節を羅馬に送つたのは誰か。三 質疑應答。

第二時 切支丹宗の禁制

□目的 基督教大に弘まるに至り、政治上の野心及弊害を認め、秀吉先づ之を禁制し、家康も其の方針を繼いで色々の方法に依つて之を禁制したが、猶之を根絶するに至らなかつた次第を授けるのである。

□教具 踏繪の圖。

方法、豫備 一 次の事項問答。

- (1) 基督教は如何にして我國に來る様になつたか。(2) 基督教を保護した者は誰々か。(3) 信長は永く保護しやうとしたか。二 目的指示。

□教授 切支丹宗の禁制

(1) 秀吉・家康と切支丹宗 信長は最初佛教徒を制せんが爲めに之を保護したが、其の盛に弘まるに従ひ、宣教師のなす所往々我國の習慣に背き、且つ布教の裏面には政治上の野心を懐くのであるかと疑ひ、遂に之を禁せんとして果さなかつた。秀吉は信長の志を繼いで、断然基督教の布教を止め、天正十三年増田長盛・長束正家等をして、南蠻寺を破毀せしめ、宣教師を逐つたが、禁令未だ徹底せず、大村氏領の長崎の如きは耶穌會の支配に歸するに至つた。天正十五年九州を征伐するや、長崎を收めて奉行を置き、禁制を布いた。しかし通商は之が爲に妨げなかつたのである。秀吉がかく禁じた理由は、基督教徒が殉教を名譽とし、教の爲に君父の命令教法でも敢て従ふことがなかつたことや、神道・儒佛の信仰者より反抗を受けたことや、政治上の野心、即ち葡・西二國が宗教を國家政策として利用した形跡があつたことである。慶長元年西班牙の船が土佐に漂着した時、秀吉は増田長盛をして臨檢せしめるに、船長はふみ世界地圖を出して見せた。長盛は其の領土の廣い理由を問ふと、船長は先づ宣教師を派して宗教を廣め、國民を歸依せしめ後兵を出して之を取るに答へた。之によつて秀吉は禁じたのである。家康も亦其の方針を繼いだが、若し断然之を撲滅すれば通商貿易上に多大の關係があるので、ためらつてゐたが、

- (4) 和蘭が商敵として西・葡二國を故らに悪く言つたこと、即慶長十六年和蘭の船長から密書を

幕府に上り、九州の教徒が葡萄牙人と共力して幕府を倒さんとするから、必要の兵士船舶を急造すべしといつたり、又英と蘭と共に上書したり等しく之を排斥し。

(ロ) 西班牙船が、慶長十六年浦賀に来て通商上良港を發見せんが爲に、沿岸を測量したが之が他日艦隊を率ゐて來寇する準備を思ひ、國人の疑を起し。

(ハ) 神・儒・佛の衝突の爲、社會の安寧秩序を害したので、遂に慶長十七年禁止令を發布したのである。此の結果信者有馬晴信を死刑に處し、前田氏の臣にして切支丹宗に關係ある者を海外に放逐し、或は宣教師を追ひ立てたのである。

(ニ) 家光切支丹宗の如く家康は禁を嚴にしたが、當時海外との交通甚だ繁く、隨ひて宣教師の潜に來りて布教に従事するものが絶えなかつたので、容易に切を奏するこゝが出来なかつた。されば家光は愈々外教の禁を固くし、其の目的を達せんとするに急なるの餘り、寛永十年朱印船以外の渡航を禁じ、更に十三年には絶對に海外渡航を禁じた。

又宗門寺を設置し、全國の男女をして貴賤の別なく佛門に歸依し、一寺を定めて其の檀徒たらしめた。宗門寺には帳簿を供へ、之に檀徒の氏名・年齢・身分・生死・婚姻・旅行等詳細に記録してゐた。之を宗門帳といひ切支丹奉行は之を檢査して、基督教の傳播を防いだ。之を宗門改めといふのである。又「踏繪」を稱して信徒の疑あるものは、基督の像を踏ませて、信徒に非ざることを證

せしむるの方法を探るに至つた。

踏繪は大抵縦六寸乃至七八寸、横四五寸厚さ一寸許りの長方形又は楕圓形で、表面には耶穌の十字架に磔せられた像、又は聖殿・マリア母像などを鑄出してゐる。初めは木板に彫刻したものであつたが、廢滅し易いので銅板で鑄造するこゝになつた。寛永五年長崎奉行水野守信が始めて此の踏繪の法をやつたのである。又所々に制札を立て、懸賞によりて信徒を告發せしめたことである。斯の如く之が嚴禁を實行したが、信徒の中には其の教を信すること深く、嚴酷なる刑罰に行はれても尙改宗を肯んぜざるもの少くないので、之を根絶するこゝは甚だ困難であつたのである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 切支丹宗に對して秀吉は如何なる處置をしたか。(2) 秀吉が之を禁じたのは何故か。(3) 家康が禁止令を出すに至つた原因は何か。(4) 家光は如何にして切支丹宗を禁じたか。三 質疑應答。

第三時 島原の亂、鎖國

□目的 切支丹宗嚴禁の結果、島原の亂起り、幕府之を平ぐるに及んで、益々切支丹宗の禁令を嚴にし、遂に鎖國の方針を確立したことを授け、且つ之により國民進取の意氣は全く挫折し、貿易の利を失ひ新學術輸入の道を杜絶し、造船航海の術は衰微し、我國民は殆ど海外の事情に通ぜざるに至つたこゝを覺らせるのである。

□教具 長崎出島の圖。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1) 秀吉・家康が切支丹宗を禁じたのは何故か。(2) 家光は如何にして禁令を實行したか。(3) 當時我國人が盛に海外に發展してゐたのは何故か。二 目的指示。

□教授 一 【島原の亂】

(1) 原因 切支丹宗が各地に弘まつた中にも、九州地方は殊に甚しく島原半島及天草島は其の淵藪であつた。天草島は基督教徒であつた小西行長の舊領である。關ヶ原の戦に小西氏亡びて後、松倉重政島原の領主となつてから、武威を張り教徒を[〓]伏し、有馬氏の原城を毀ち、島原に城を築きて之に居た。重政は基督教の根據を絶たんとして呂宋を伐たんとしたが、果さずして死んだ。子勝家は怯懦にして威望が無い。教徒は機に乗じて其の抑壓を免かれんとし、私に天草の教徒を往來して謀を通じてゐた。時に小西行長の遺臣等、豊臣氏を思ひ徳川氏を喜ばざる者亦之を通じ、天草の益田四郎時貞といふ十六歳の少年を擁して、貧苦を救ふ天使と稱し民心を煽動して領主の命を奉じなかつた。時貞は種々の奇術を弄して人を惑はしてゐたのである。遂に暴民等は代官を毆殺し、原の舊城を修めて之に據つた。其徒男女合せて三萬七千人に及んだ。

(2) 戦況 寛永十四年十一月、幕府は報によつて板倉重昌を遣はし、又隣近の諸侯に出兵を命じ令

を重昌に聽かせた。十二月重昌は松倉・鍋島・立花・有馬等の兵を督して城を攻めたが、信徒等は精銳の武器を以て死守し、其の勢猖獗で却て徒らに兵を損ずるのみであつた。幕府は案外大事なるに驚き、老中松平信綱をやつて討たせんとした。重昌之を聞き憤慨し、翌十五年正月元日總攻撃を行ひ、卒先して進み遂に燈れた。四日信綱來り包圍して糧道を絶つた。細川・鍋島・黒田・立花等の兵來るもの十二萬四千、二月二十八日城陥つた亂は平定した。時に大阪の役を距ること二十三年、是から後幕末に至るまで幕府は兵を用ゆるこゝはなかつた。

二 【鎖國】

(1) 教禁の成功 幕府は此の亂に鑑みて益切支丹宗の禁令を嚴にし、其の信徒の多かつた地方では特に踏繪の法を厲行し、又全國に令して寺院をして人々の佛教徒たるを證せしむる制を立てた。故に佛教は我國教となつたのである。幕府は愈鎖國の方針を確立して西洋人の渡來を禁じ、以て切支丹宗の禍を根絶せんとし、秀吉以來の教禁は此に成功したのである。

(2) 和蘭人と支那人 是より西洋諸國との交通は殆ど全く絶え、唯通商を事として切支丹宗に關係のなかつた和蘭人のみは、支那人と同じく特に長崎の出島で貿易することを許された。和蘭人は島原の亂の時、海上より砲撃して加勢したのである。長崎の出島は扇の地紙形の地で廣さ三千九百六十九歩で、一年丁銀五十五貫目の租借料を納めた。幕府より特別の監視人がつき門前に番所

あり、晝夜警戒して日本人の奴僕も出入を禁じてゐた。

(3)鎖國の結果、鎖國令發布の結果、從來冲天の勢を以て發達して來た海外思想も、之が爲制止せられ、其の海外に雄飛せんとする國民の進取の意氣は全く挫折し、今まで海外にあつて日本村を組織してゐた渡航者も、只男子のみなれば子孫繁昌も出來ず、又歸國も出來ず(鎖國令の爲)、且つ後續の人のない爲空しく怨みをのんで異域に歿し、爾來二百數十年南亞・南洋遂に我國人の隻影を認めぬ様になつたのは残念である。又洋書の輸入を防いだ爲、新學術にうごくなり大船を造ることを禁じたので造船・航海術は衰微した。殊に我國人は海内の安逸をむさほり、世界の氣勢にうとくなつた結果、幕末に外艦か出沒する様になつて、上下周章狼狽したのは當然である。

「整理」 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)島原の亂は何うして起つたか。(2)幕府は島原の亂に鑑み如何にして切支丹宗を禁じたか。(3)鎖國の結果何國人が貿易を許されたか。何故か。(4)鎖國の結果我國は何うなつたか。(5)鎖國の是非に就いて論ぜよ。(6)もし鎖國でなかつたら何うであつたらう。現今我國の領土の少いのは何故か。三 質疑應答。

第一四 學問の復興と元祿時代 (三時間)

□要旨 家康・綱吉等の學問獎勵により、鎌倉以來久しく衰微してゐた文運復興し、碩學大家の輩出すると同時に、一方に於ては尙武の風廢れて風俗奢侈に流れ、華美柔弱なる元祿時代を現出するに至つた次第を知らせるのである。

□教授上の注意

- 一 家康は學問復興の恩人なりしこと、殊に其の書籍出版事業が、學問に偉大の援助を與へた事を知らせる。
- 二 徳川光圀は文學史上に偉功を残せるのみならず、尊王論の先驅者であつたことを知らせる。
- 三 漢學の興起と共に、淨瑠璃・俳諧・小説等の平民的文學の大家の輩出が、元祿文學をして燦然たるに至らしめたことを知らせ、芭蕉の句等をも讀み聞かせる。
- 四 美術・工藝の進歩發達を説くに當りては、趣味を涵養せんことに勉める。

□教材の區分 第一時、學問の復興、學者の輩出の一部。(六三頁の一行まで)、第二時、學者の輩出の殘部。第三時、元祿時代。

第一時 學問の復興、學者の輩出

□目的 家康學問の必要を認め學問を獎勵したので、有名な學者が頻に輩出するに至りし次第を授けるのである。

□教員 藤原惺窩、林道春、中江藤樹の画像。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1)源頼朝が鎌倉に幕府を開くや何を奨励したか。(2)何故頼朝は武士道を奨励したか。學問を輕んじたのは何故か。(3)足利氏の室町時代及戰國時代の學問は何うなつてゐたであらうか。二目的指示。

□教授 一 【學問の復興】

(1)頼朝以後の學問 源頼朝は平氏が藤原氏に倣つて、文弱に流れた爲めに亡びたのに鑑み、盛に武士道を奨励して、學問を輕んじたので學問は大に衰微し、承久の亂に際して北條氏の兵の中で、院宣を読み得るもの數千人中僅かに一人といふ有様であつた。足利氏の世足利學校等に依つて多少學問を維持したが、戰國時代になつてからは殊に武事を重んじた結果、他を顧みるの暇なく學問の衰廢甚しく、僅かに禪門の諸大寺即五山の僧侶の之を講習して、辛じて命脈を保つてゐる位であつた。一般人民の子弟は寺院に就いて、読み書きの道を修むるの外無き有様であつた。

(2)家康の奨學 家康は弓矢を以て天下を取つたが、弓矢を以て天下を治むること能はず。學問の力によらざる可らざるを思ひ、文教を興すを以て治國の要として曰く、「人倫の道明かならざれば世亂れ國治らずして騒亂止む時なし、此の理を悟らしむること書籍より善きはなし、書籍を刊行



藤原惺窩 (本模掛纂編料史)



林信勝 (藏氏郎三又林谷熊國藏武)

して世に傳ふるは仁政の第一なり。」とて、學校及文庫を設立し學者を尊重し、又古書の蒐集をなし書籍を刊行した。

(4)藤原惺窩及林道春 惺窩は藤原定家の後で、博く群書に通じ一代の博識と言はれてゐたから、家康は名古屋の陣營にある間も、屢之を引見し後又江戸に召して經史を講ぜしめた。惺窩は元和五年五十九で卒したが、實に近世文教の祖といはれてゐる。後光明天皇は其の文集に御製の序を賜つた。林信勝(道春・羅山)は其の門人で惺窩の推薦により、慶長十年始めて家康に召された。之より秀忠・家光・家綱の四代に歴任し、常に講席に侍し政治の諮詢に應じ、畫策する所が多かつたが、明曆三年(三二七)年七十五で歿した。



伊藤 徳川 (三百年史所載)

中江 藤樹 (近江國藤樹院藏)

荻生 東江 (東江傳氏藏)

(四) 學校及文庫の設立 慶長六年伏見に圓光寺を設け學校を開いた翌年には江戸城内に文庫を創設し富士見文庫といひ、金澤文庫の書物を移した。

(八) 古書の蒐集 多年戦亂の爲に散逸したのを搜索して湮滅を防がんが爲は能書の人を集めて書寫させた。

(二) 書籍の刊行 十萬餘の木製の活字を新製し、又銅製の活字を道春等に與へて、書籍を出版して學問を奨励したから、是より我國の文運大いに興つたのである。

二 【學者の輩出】

かく家康が學問を奨励した結果、文教は代を重ねるに従つて隆盛に赴き、五代の綱吉の頃に至つては燦然たる光輝を放つた。其の間民間の學者の輩出は前古未曾有である。

(一) 中江藤樹 藤樹は道春と同じ時に出た人である。近江の小川村の人で祖父が伊豫大洲の加藤氏に仕へてゐたので此に長じ後其の後を繼いで加藤氏に仕へてゐたが、母老いて

近江にあるので遂に辭して歸つた。之より母に仕へて奉養厚く筵を開いて書を講じた。其の學は王陽明に基づき、實踐躬行を尊び、郷黨其の徳に化し稱して近江聖人云はれた。或は馬丁を感化し或は轎夫を感泣せしめ、強盜の行を改め、愚民も恥ぢて善につくといふ有様であつた。慶安元年(二三〇八)八月歿す。年四十一、郷民其家を祠とし藤樹を祀り、稱して徳本堂と名づけた。藤樹書院である。其門人熊澤蕃山最も顯はれてゐる。

(二) 熊澤蕃山 蕃山は博學にして政治の才に富み、家光の頃備前侯池田光政に仕へて之を助け、施設する所が多かつた。即經濟に長じて實利を起し、水利・學校を設備し、淫祠を毀つなごである。後辭して京師に居り、更に播州の城主松平信之に従ひ、元祿四年年七十三で歿した。

(三) 山崎闇齋 闇齋は道春と時を同じして現はれた人で、京都に生れ長じて僧となつたが、更に土佐に赴き野中兼山等と共に學び、程朱の學を究めた。後京都に私塾を開いて盛に生徒に教授してゐたが、會津侯保科正之に聘せられて其の師となつた。信任頗る厚かつたが正之の薨するに及んで京都に歸り、大に尊王の大義を鼓吹した。從ひ學ぶもの數千人、晩年神道の一派を創め、名づけて垂加流といつてゐた。天和二年(二三四二)京都で歿した。年六十五、闇齋會て弟子に問ふて曰く、「今唐國孔子を以て大將とし、孟子を以て副將とし、騎數萬を率ゐて來り我國を攻むれば如何。」と、弟子顔を見合せて答が出来ぬ。闇齋曰く、「不幸にして此の厄に逢はば、則我黨身に堅鐵を被

り、手に鋭刃を執りて之を一戦し、孔・孟を擒にして以て國恩に報ぜん。之孔・孟の道なり。」と、其の識見概ね此の類で、常に國家主義の上に見地を置いて、忠孝の道を説いた。其の神道の流を汲むものには、後世勤王の説を唱へた竹内式部・山縣大貳等の如き者を出してゐる。

□整理 一 設問。

- (1) 頼朝以後の學問の有様は如何。(2) 家康は何故學問を奨励したか。何うして文教を興したか。
- (3) 家康は何んな學者を招いたか。(4) 中江藤樹及熊澤蕃山について語れ。(5) 山崎闇齋について語れ。二 質疑應答。

第二時 學者の輩出 (續き)

□教員 貝原益軒、伊藤仁齋、荻生徂徠の畫像、聖堂講釋の圖、大日本史の一部。

□方法、豫備 一 次の諸項問答。

- (1) 家康の時より我國の文運大に興つたのは何故か。(2) 何んな學者を招聘したか。二 目的指示。

□教授 【學者の輩出】 (續き)

(1) 徳川光圀 四代家綱の頃には學問漸く普及して學者輩出し、大名の中にも好學の人が多くなつた。水戸藩主徳川光圀は最も著はれた人で、家康の孫頼房の第三子である。曾つて史記の伯夷傳



徳川光圀 (京 都 高 臺 寺 藏)

を読んで其の高義を慕ひ、始めて修史の志があつた。明曆三年(二三二七)史局を開いて業を創め、學者を集め史料を廣く搜りて検討編修せしめた。史の體は史記に従ひ、本紀・列傳・志表に分ち、大義を其の間に明かにした。元祿十年(二三五七)本紀稿を脱し、越一年皇妃・皇子・皇女の三傳亦成つた。十三年光圀は年七十三で薨じた。明治三年從一位を贈り之を祀れる常磐神社は別格官幣社に列した。三十三年更に正一位を贈らる。大日本史は其の子孫相續ぎ十代凡そ二百年、明治三十九年に至り始めて完成した。光圀の大日本史を編纂してより、我國史に關する知識次第に開け、

我國體の特異なる所以を明にし、尊王の志氣亦漸く鼓舞せらるゝの端を啓いた。

(2) 五代將軍綱吉 綱吉は幼にして學を好み、病臥でも書を放さなかつた。木下順庵や、林春常を

して學を講ぜしめてゐたが、後には自ら經書を講じて諸大名諸有司をして聽かしめる程であつたから、天下靡然として學に向ふ様になつた。綱吉は元祿三年(二三五〇)湯島(江戸)に聖堂を造り、孔子の生地の昌平卿に擬して其の地を昌平阪と名づけ、林道春の孫林信篤をして大學頭に任じ祭祀を掌らせた。林家は是より子孫代々大學頭に任じ學事を統べたのである。

(3) 木下順庵||京都の人、惺窩の門人松永昌三に學び、加賀藩主前田綱紀に聘せられ、又綱吉の爲に學を講じた。後其の學は程朱を宗とした。學徳共に高く門人多く、新井白石・室鳩巢等有名なる人がある。元祿十一年七十八で歿した。

(4) 荻生徂徠||江戸の人、柳澤吉保に仕へてゐた。徂徠性豪放、初め朱子の學を奉じ力めて伊藤仁齋の古學を駁したが、後新に復古學を唱へた。名聲高く門弟多く太宰春臺等はよく著はれてゐる。徂徠は屢、將軍の諮詢に與つてゐたが、享保十三年六十三で歿した。學識該博で兵法・音樂・法律等に精通し、其の著書が多い。

(5) 伊藤仁齋||東に徂徠あり西即京都に仁齋あり、亦私塾を開いて數多の門人に教へ徂徠と相對してゐた。仁齋は京都の堀川に生れ幼より學に志し、刻苦勉強、古學を唱へて生徒に授くるこゝ四十餘年、名望日に隆であつた。人となり寛厚、寒素に甘じて榮達を求めず、彼の盜人を化したこととは名高い話である。寶永二年(二三六五)年七十九で歿した。其の子東涯父の後を繼いで亦徂徠

と相對し、儒生の歸嚮する所となつた。(拙著伊藤仁齋と其教育參考)

(6) 貝原益軒||名は篤信、筑前福岡の士である。京都で闇齋及順庵等に從ひて朱子學を修めた。性恭謙博學を以て人に傲らずと雖も、名聲は甚だ隆かつた。當時の儒者概ね漢文を以て書を著はしてゐたが、益軒は平易なる國文を以て之を記したから、大に世を益した。正徳四年(二三七四)年八十五で歿した。

(7) 新井白石||名は君美江戸に生る。幼時の勉強は名高い話である。刻苦奮勵し業を木下順庵に受け、博學強記を以て知られた。最も詩を善くし國史に精しかつた。甲斐の家宣に仕へ、其の將軍となるに及んで亦文學を以て顧問となつた。隱退した後は著述に従事し著書に藩翰譜・讀史餘論・折りたく柴の記等百餘種ある。享保十年六十九で歿した。

(8) 室鳩巢||江戸の人で木下順庵に學び、新井白石の薦によりて幕府の學職となり、享保十九年、年七十七で歿した。著書には赤穂義人錄・鳩巢文集等がある。

(9) 山鹿素行||通稱甚五左衛門、奥州會津に生れた。江戸に出て儒學を林道春に、兵學を小幡景憲等に學んだ。將軍家光之を用ゐるとし果さずして薨じた。淺野長直の聘に應じ、其封地赤穂にあるこゝ八年、其の江戸に歸るや諸侯諸士の其の門に入る者が多かつた。後罪を得て赤穂に謫せられ十年にして赦された。貞享(二三四五)年六十四で歿した。著述の中朝事實は名高い。長直の孫

長矩の殿上及傷事件起り、大石義雄等が主の仇を報じた美事は、素行の感化が多いのである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

- (2)大名の中で好學の人は誰か。光圀の事蹟を語れ。(2)將軍綱吉は學を好んで何うしたか。(3)私塾を開いて數多の門人に教へた名高い學者は誰か。(4)其の外に如何なる學者があつたか。
- 三 質疑應答。

第三時 元祿時代

□目的 綱吉の頃は太平の後を承けて次第に文弱に流れ、美術・工藝及淨瑠璃等の平民文學起り、元祿風俗、元祿文學にて光華燦然たる時代に至りし次第を知らせるのである。

□教具 元祿時代の風俗の繪。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

- (1)家康が學問を奨励してから如何なる學者が出たか。(2)當時の學問は如何なる如何なる學問であつたか。(3)元和偃武とは何か。幕府は何時の戰から兵を用ゆることがなくなつたか。太平が久しく續けば何うなるか。二 目的指示。

□教授 一 【元祿時代】

(1)華美なる元祿風俗 元祿(三三四年より三三六三年まで)とは年號である。徳川時代の初めは

戦後の餘風を受けて、優柔浮華を嫌つて交友談話の間にも武藝に關することを重んじ、甚しきに至つては辻斬り等が流行した程であつた。市井の間でも幡隨院長兵衛等の俠客が輩出してゐたのであるが、久しく太平が續いたので武勇の氣風は何時しか廢れて終つた。然るに元祿時代になつては此等士人も奢侈に耽り、遊惰に陥り平素の談話でも淨瑠璃・歌舞伎・小説等を交える様になり、全く町人風になつて終つたのである。されば其の風は庶民に至るまで浸潤し、淨瑠璃・芝居等の娯樂が盛に行はれ、好尚趣味も一變して頗る華美となつた。女子は小袖に金糸を縫ひ、衣裳も幅廣く丈も長くなり、帶の幅も古に倍し其の他鬘の結方、模様好みも異彩を放ち、男子も金銀の細作りの太刀に浮身をやつし、根付の彫刻・印籠の蒔繪・手箱・書棚より、室内の裝飾に至る迄精巧優美を競ふた。町人には紀の國屋文左衛門や、淀屋辰五郎等の所謂成金が金錢を湯水の如く浪費して浮れ出したので、武士等は之を羨望するに至り、町人跋扈の世となつたのである。されば世を擧げて華美となり、隨ひて美術・工藝は長足の進足をなしたのである。世に之を元祿風俗等といつて、頗る特質を有してゐる。

(2)元祿文學 又一方に於ては學問の盛なると共に、通俗文學も亦興りて一般人民の間に行はれた。其の中で有名なのは近松門左衛門の淨瑠璃、松尾芭蕉の俳諧等である。門左衛門は長門萩の人で博覽多通にして才識超群してゐた。初め某寺に居たが去つて京師に至り、市店に寓居して傳記・小

説を作りて業とし、享保九年浪華で歿した。年七十二、其の作國性命等は名高い。芭蕉は自ら「俳諧に古人なし。」と、いつて俳諧の源を以て任じてゐた。其の名句は多いが、「古池や蛙飛び込む水の音」、「荒海や佐渡に横ふ天の川」等、人口に膾炙されてゐる者が頗る多い。之から俳諧は大に隆盛に赴いたのである。芭蕉の門人に支考・其角等蕉門十哲がある。

(3)美術 家光の頃本阿彌光悦が出て、書畫・蒔繪を善くし、其の名當世に高かつた。光悦は元來刀劍鑑定家であるが、かくの如く美術の技に熟してゐた。寛永十四年八十一で歿した。又繪界には狩野探幽出で、繪畫を以て海内一の譽を得た。次で尾形光琳も出で繪畫・蒔繪で世に著はれ、此の二人は其の才筆趣味元祿時代を代表するに止まらず、實に古今の天才である。探幽は狩野家中興の祖で延寶二年七十三で歿した。

二 【赤穂義士】

斯くの如く文弱に流れた元祿時代にあつて、此の義士快舉は實に溜飲を下す患ひである。元祿十四年淺野長矩事によりて殿中に吉良義央を傷け、即日死を賜り國も除かれた。城代家老大石良雄臥薪嘗膽、遂に元祿十五年十二月十四日、同士四十六人と共に義央を其の邸に襲ふて斬り仇を報じた。幕府は之を四諸侯に分拘し、翌年四月遂に死を賜はつたのである。

□整理

一 教科書の讀解。二 設問。

(1)元祿時代とは如何なる世であつたか。(2)何故斯の如き華美な時代になつたか。(3)元祿時代には何が行はれたか。(4)通俗文學で名高いのは何か。(5)美術家では誰が著はれたか。

三 質疑應答。

第一四 江戸幕府の中興、寛政の治と天保の改革 (四時間)

□要旨 徳川幕府は綱吉の晩年にいたり税政甚しく、海内愁苦の色ありしも吉宗聰明英智にして享保の治をなしたが、復幕府の政治紊れて寛政の治となり、次で幕府衰亡の兆漸く現はるゝに及んで、天保の改革も遂に成功せなかつた次第を明にし、併せて時勢の推移を知らせるのである。

□教授上の注意

- 一 吉宗の政策が創意に富み、且つ消極的に偏せるものに非ることを領解させる。
- 二 徳川時代は王朝時代と共に、殖産興業等發達進歩の一時期として注意せらるゝに至りしは、全く吉宗の偉功であることを知らせる。
- 三 寛政の治は享保の治と比較しつゝ之を教授し、定信は吉宗の治に範を取れることを知らせる。
- 四 家齊の時代は江戸の隆盛の頂點で、而も衰亡の端緒であつたことを知らせる。
- 五 水野忠邦の改革過激に失して上下の怨を受け、退隱の後間もなく外交問題起りて、幕府の滅亡

江戸幕府の中興、寛政の治と天保の改革

を早めたことを暗示する。

□教材の区分 第一時、幕府の不振。第二時、幕府の中興。第三時、寛政の治。第四時、幕府衰亡の兆現はる、天保の改革。

第一時 幕府の不振、新井白石

□目的 幕府は家光の時其の組織整ひ、基礎鞏固であつたが、綱吉が將軍となるに及んで、其の後半生に於て弊政を行ひ、爲に幕府の振はぬ様になつた次第を授け、且新井白石の功績を知らせるのである。

□教具 新井白石畫像。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1)幕府の基礎の固くなつたのは誰の時か。(2)元祿時代は如何なる世であつたか。何故かゝる華美な時代になつたか。(3)元祿時代には何か流行したか。(4)元祿時代に於ける幕府の威信は何うであつたであらう。二 目的指示。

□教授 一【幕府の不振】

(1)家光以後の施政 幕府は家光の時に於て其の組織整ひ、基礎愈鞏固になつた。紀元二千三百年代の初(慶安四年)に家光が薨じて家綱が職を襲いだが、尙幼なかつたから保科正之・酒井忠勝・松

平信綱・阿部忠秋等之を輔佐したので、國內頗る太平であつた。殊に松平信綱は伊豆守なるを以て、智慧伊豆と言はれた位で、家光の頃より出ては天草の亂を平け、入つては其の施政を輔佐したが、家光の死するや由井正雪・丸橋忠彌等幕府を倒さんとして、謀反を企てたのを定めて功があつた。然るに信綱・正之・忠秋相踵いで卒した後は、威權獨り大老酒井忠清に歸し、紀綱は稍弛んだ。家綱薨じた弟綱吉職を襲ぐに及んで、大老堀田正俊之を輔けて一時善政が多かつた。即或は湯島に聖堂を建て、大に儒學を奨勵し、或は富民の土地兼并を矯めるなごである。

(2)綱吉の弊政 然るに堀田正俊死し綱吉漸く政治に倦んで、稅政が續出するに至つた。護持院の僧が綱吉に子のないのを見て、「之將軍の前生殺生したる報なり。爾今生類殊に將軍の生年は戌なれば、大に犬を愛養すべし。」と、勸めたので、綱吉は之を信じ、貞享四年養犬の令、次で生類憐みの令を出した。生類憐みの令に「一、猪狼の類假令人を害し候も、鳴物にて追拂ひ申すべし、若其れにても猶防ぎ兼候由申に於ては、堅く打殺す間敷由誓紙致され候上にて、空砲にて追拂ひ候様申附くべし。萬一右にても害止不申由申に於ては、篤き實地見聞の上御勘定所へ申達し、差圖を受くべき事。一、免許の上打殺候獸類於有之は、嚴重に申附くべき事。」かくて綱吉は江戸城の西の中野に犬小屋を造らせ、都下の主なき野犬十餘萬頭を飼養し、總犬一日の飼料として米三百三十石を給し、犬小屋總奉行・犬小屋奉行・犬醫師なごの吏員を置いた。されば綱吉は大公

(3) 悪貨を改鑄す。白石は家繼の時、悪貨を改鑄して質を良くし形を小にして漸く古制に復した。
(4) 外國貿易の制を定む。家康以來、外國貿易に伴ふて金・銀・銅の海外に流出するもの甚だ多かつた。白石其の國家百年の長計に非ざるを見、金・銀・銅の産額を量りて後、貿易の歳額を定めんことを建議した。幕府は之に従ひ、正徳五年清國は船舶三十艘、貿易額六千貫目に限り、内銅三百萬斤を用ひ、和蘭は船舶二艘、貿易額銀三千貫目、内銅百五十萬斤を用ふることと定めた。かくの如くして金・銀の流出を防いだのである。

□整理 一 設問。

(1) 家光・家綱の時代は何うであつたか。(2) 幕府が振はぬ様になつたのは何故か。(3) 綱吉の弊政を革めたのは誰か。(4) 新井白石の功績について語れ。二 教科書の讀解。三 質疑應答。

第二時 幕府の中興

□目的 吉宗中興の英主として勤儉・尙武以て人心を新にし、殖産・興業以て民生を厚うし、以て享保の治をなしたことを説き、又其の洋書輸入の禁を緩めて、後世洋學の端緒を開いたことを知らせるのである。

□教具 吉宗の畫像。

□方法、豫備 次の事項問答。

(1) 幕府の不振は何によるか。(2) 新井白石の改革に就いて語れ。(3) 徳川三家とは何か。
二 目的指示。

□教授 【幕府の中興】

(1) 吉宗將軍となる。吉宗は家康の曾孫で、紀伊侯光貞(頼宣の子)の第三子である。十五歳の時越前三萬石の領主となつて九ヶ年居た。此の時より頗る艱苦に堪へ、尋常貴公子の風がなかつた。其の後兄が歿し子がなかつたので、其の後を繼ぎ和歌山の藩主であること十二年、此の間天災・凶荒相續いたので、吉宗は柔弱の風を驕め儉素を守り、産業を獎勵して治績大に見るべきものがあつた。將軍家繼の薨後入りて職を繼ぎ八代將軍となつた。吉宗資性英邁にして才略あるが上に少壯時より艱苦に遇ふてゐるので頗る下情に通じ、在職二十九ヶ年の間勵精事に當り、よく享保の治をなし得たので、世の人が吉宗を稱して徳川幕府中興の英主といふのである。
(2) 吉宗の施政。吉宗の主眼とする所は實用を尙び虚飾を避け、質素を主として奢侈を禁ずるにあつた。吉宗の就職當時は元祿の後を受けて華美・情弱の風が猶存してゐるが、吉宗は綱吉以來の財政の困難を救はんとて、自ら質素儉約の模範を示した。即殿閣の華麗な部分を毀ち、大奥の女五十餘人を放ち、食は一汁三菜に止め服も極めて質素で、羽二重・八丈島に止め、婦人の小袖に金繡するに制限を立て、兒女の玩具に金・銀を塗ることと禁じた。吉宗亦情弱の風を矯正せんとし、時

々狩獵(鷹野)に出で大に士氣を鼓舞した。之により鷹將軍の名がある。又犬追物・流鏑馬・笠懸等の遊戯を奨励して武藝を重んじ遊惰を戒めた。又大岡忠相等の人材を擧げた。忠相は吉宗に拔擢せられて町奉行となり、食邑一萬石の大名に列せられた。世に大岡捌の名で膾炙せられてゐる。其の他足高の制^{たじ}にて、新人物を採用せんし職毎に其の石高を定め、職に任せらるゝものゝ家祿其の高に及ばざる時は増給し、職を罷むればもとに復した。吉宗が曾て鷹野に出でんとする途中、壯夫一人地上に坐して七十有餘の老婦を介抱してゐた。其の故を問へば、母を負ひて宮参りの途中、かく病んでゐるので介抱してゐるとの事、吉宗は其の孝心の厚きを感じ、白銀五枚を與へた。斯の如くして徳行を賞した。御定書百箇條等の法律を定めて、諸役人をして施政の據る處を知らしめた。御定書百箇條は、三奉行の爲判決の標準を示したものである。吉宗に就いて特に注意すべきは洋書の禁を弛めて學問を奨励し、教育の普及を圖つたことである。蓋し風俗を矯正し知見を向上せしむるには、學問の力にたよる外なしを考へたからである。家光の時鎖國令を發し洋書の輸入を禁じてから、天文・地理等諸般の學術に關するもの渡來せず、國民は次第に新知識に遅れる有様であつたが、其の後進歩せる西洋の學術に着目するもの漸く著はれ、天文・曆法・算數等は傳はつて來た。新井白石の如きは拘留せる伊太利人、及蘭人に就いて西洋諸國の地理・風俗・言語を問ひ、西洋紀聞・采覽異言を著はした程である。吉宗は心を大に西洋の文明に傾け、天文を研究

したり、蘭人の砲術を試みたりしたが、愈々洋書輸入の禁を緩め、宗教に關せざる書籍の輸入を許したのである。かくて吉宗は蘭學の精密なるに感じ、青木文藏等を長崎に赴かしめ、蘭人等に就いて研究させた。吉宗は一方に於て林大學頭をして毎月數次經書を講ぜしめ、士民をして聽かしめ木下順庵・荻生徂徠・室鳩巢等の學者をして、交々書を講ぜさせ施政上の參考とした。又室鳩巢に命じて六諭衍義大意を和譯させて、寺小屋の教科書とし教育の普及を圖つたのである。

(3)吉宗の殖産興業 吉宗は積極的に殖産興業を奨励した。甘蔗の種子を薩摩に求め、之が栽培法を島津氏の臣に問ひ、長崎に來た清商に砂糖の製法を究めたから、其の技の熟するものが漸次出て來た。次に甘藷である。或饑饉の年吉宗は薩摩地方では甘藷(薩摩芋)を栽培した爲、之を穀物に代用して民の餓死を免かれしめたといふことを聞き、種子を求め其の苗の繁殖するに及び、青木昆陽(文藏)の著はした蕃藷考を添へ、其の種子と共に諸國の代官に傳へた。之より大に栽培され遂に日用の常食となつた。其の他吉宗は蠟燭を植えて蠟燭の製法を奨めたり、竹を培養せしめたりしたので、物産大に増殖し財政頗る整つて來たので、天下太平を樂しむことが出來た。故に之を享保の治といひ、吉宗を中興の英主としてゐるのである。是から諸國に物産が大に起つた。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)吉宗が將軍となつた次第を語れ。(2)吉宗の政治の主眼は何か。(3)其の施政の概要を語れ。

(4) 吉宗を稱して何といふたか。(5) 吉宗に就いて特に感じた點は何か。三 質疑應答。

第三時 寛政の治

□目的

松平定信出でて田沼時代の弊政を改革し、所謂寛政の治をなしたことを授けるのである。

□教具

松平定信の畫像、昌平校の圖。

□方法、豫備 一 次の問答。

(1) 徳川幕府中興の英主とは誰か。(2) 吉宗は如何にして享保の治をなしたか。二 目的指示。

□教授 【寛政の治】

(1) 田沼意次政を紊る。吉宗在職三十年にして子家重に譲つた。家重の一代は吉宗善政の後を承けて天下無事であつたが、家重の子家治繼ぎて將軍となるに及んで、老中田沼意次を用ゐたので政治は漸く亂れた。意次及其の子若年寄意知政を専らにする。三十年、「田沼様には及びもないか、せめてなりたや公方様。」との俚語のあるので分る。此の父子の權勢は實に甚しかつた。しかも田沼は賄賂の多少によつて忠誠の厚薄を計らうとしたもので、「金銀は何人も生命に換へても愛好する所、しかも之を我に贈りて惜まず、忠誠の心厚きにあらずんばいかでかくの如けん。」と、かくて賄賂は公然行はるゝ有様で、士風は頽廢して遊惰となつた。一般の風俗も淫靡となり、優柔なつて元祿時代よりも更に浮華なる有様で、政治は紊れ吉宗の中興の治も漸く廢れて來た

のである。加之稀有の天災が頻出したのである。安政七年より天明七年までは毎年火山破裂し、櫻島・淺間山・温泉嶽等)或は大風雨起り、(畿内・東國・東海地方)大河の大汎濫せるあり、(利根川等)或は大地震起り(武・相の大地震)或は五穀實らず、諸國の大饑饉となり、かくて天明年中には江戸・京都・大阪の三都を始め、諸處に窮民の暴動起り、米屋・富豪の家を破壊する等世を擧げて動搖したのである。

(2) 松平定信の改革。然るに家治薨じて後、吉宗の曾孫家齊(吉宗の子一橋宗尹の孫にして治濟の子)十一代將軍となるに及び、松平定信(白河樂翁)之が輔佐になつて、弊政を改革する事になつた。定信は吉宗の孫田安宗武の子である。奥州白河城主松平氏の養子となり、越中守に任ぜられた。時に天候不順で東北地方五穀實らず、定信乃ち儉素を以て下を率ゐる大に治績を擧げた。三十歳の時三家の推舉によりて幕閣に入つた。田沼氏の斥けられてから十ヶ月目である。定信は人格高潔で誠心誠意の人である。其の施政は祖父吉宗に倣ひ、享保の政治を標準とし、卒先して儉素を守り風俗を正し、武藝を奨め財政を整へたので、庶政大に改り再び幕府の政治は振興した。世に之を寛政の治といふのである。

即ち定信が士民に質素儉約をすゝめた中に、「衣・食・住・什具の類は成るべく從來の物を用ゐ、新規の調製を見合はすべし。家族の衣服は尙更質素にすべし。家督・婚禮には贈遺の品物従前の半

に止むべく、且飲食物をも質素にすべし。慶事の贈遣には従来鮮魚を用ひしを改めて、今後は乾鯛に止むべし。」等とある。かくて天下に令して農民・商人等の婦女子の華美を戒め、器具・玩具の類に金・銀を用ゆることを禁じた。又備荒貯蓄といつて諸大名等に令して、今後五箇年間收穫一萬石毎に粗五千石宛を貯蓄せしめ、凶年に供へさせ又風俗の亂れたのを改めんが爲、諸役人を戒めて私慾を去り、文武の道を勵まし、進んで孝子・節婦等の善行を賞し、芝居等の遊興に耽るを禁じた。又定信は勤王の心あり。天明八年京都の大火に皇居が炎上したので、幕府諸侯に課して皇居を再造せしめ、定信は親ら其の工事を督した。

(3)定信海防に注意す。定信は又外船が頻りに出沒して海邊をおびやかすので、寛政五年勘定奉行等を率ゐる自ら伊豆・相模等の沿岸を巡視し、且つ吏を遣はして安房・上總・下總等の沿岸を巡視させて、江戸附近の防禦の議を建てた。其の後安房・相模の海岸に台場陣屋などが築かれるやうになつた。

(1)學問の獎勵。定信は昌平校を開き、讀岐の人柴野栗山、肥前の古賀精里、伊豫の尾藤二州を抜擢して用ゐる大に學問を獎勵した。其の他醫學館を建てたり、和學講談所を設けたりした。

□挿畫の説明

一 松平定信、本圖は、谷文晁の筆を寫したもので、服装は風折烏帽子に縫模様のある羽織を着て

ゐる。

二 【昌平校】昌平校は江戸の湯島にして、現今女子高等師範學校のある處である。正門は圖中手前の中央にあるもので南面し、面門は正門の左方に在り、之を入りて左にあるは守門舎である。圖中最左下なる二棟は卒舎、其の北方にある小舎は懋舎である。面門を入りて正面なる玄關附のものは廳堂で、其の西方に連りて僅かに其の東端を顯はしてゐるのが講堂で、廳堂の北方圖の上左端にある小棟が書庫である。大成殿は聖堂ともいひ、圖の右上端にある大堂宇である、之は綱吉が經營させたもので元祿三年に竣成した。其後數回の火災に罹り現堂は天明六年の建築。大成殿の正面にある大門は杏壇門で、其の下段圖の右下端にある小門は入徳門である。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)吉宗の後は誰が繼いだか。(2)吉宗の中興の業が廢れたのは何故か。(3)寛政の治まは何か。定信の治績を語れ。(4)寛政の治と享保の治とを比較せよ。三 質疑應答。

第四時

幕府衰亡の兆現る、天保の改革。

□目的 寛政の治以後幕政再び弛廢し、其の掉尾の活動さも見らるべき天保の改革は終に失敗に終り、茲に幕府の衰兆漸く現はれたことを説くのである。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

江戸幕府の中興、寛政の治と天保の改革

(1) 家光以後の幕府の消長を語れ。(2) 幕府の善政は何時であつたか。享保及寛政の治について大要を語れ。二 目的指示。

□教授 一 幕府衰亡の兆現はる

(1) 江戸の極盛時。定信は在職七年にして退いたが、其の後も家齊職にあること四十年、此の間天下事なく江戸の繁昌其の極に達した。されど太平の久しきまゝに政治また弛み、風俗漸く華侈に赴き士風復壊れ、幕府衰亡の兆既に此の時に現はれた。

(2) 家齊の時代の文化。此の家齊時代は太平久しく續いたので、文化大に發達し諸般の藝術は殆ど他に見るこゝの出来ぬほゞ發達した。世に大御所時代とも云ふ。江戸時代中此の時代は元禄時代とは、共に其の高潮期である。元禄の文化は京・大阪の文化で、此の時代の文化は江戸の特色を帯びたものである。要するに文化史より見れば此の時代は、其の發達の極點に達した時代で、政治により見れば衰微はの兆の現れた時代である。

二 天保の改革

(1) 水野忠邦の施政。天保八年家齊退き、家慶職を襲いで十二代將軍となつた。先に定信が退いてから寛政の治再び廢れ、家齊も奢侈に流れた程であつたので、老中水野忠邦は家慶の信任と水戸侯の後援とにより、時勢に憤慨し大に政治を改革して、享保・寛政の盛時に復せんことを圖り、嚴

に奢侈を禁じ弊政を改め、武藝をすゝめ施設頗る多かつた。世に之を天保の改革といふのである。

(2) 改革の失敗。然るに其の爲す所如何にも急激で、功を一時に收めんとしたので上下の怨を受けつた。即百姓町人が金・銀製の装身具を用ふるを禁じ、之に背いて其の物品を沒收せられた者もあつた。又高値の鉢植物の賣買を停止したり、金三兩以上の品を賣買せしめなかつたり、百姓には粗服を着し、髪も薬を以て束ねさせたり、町人には其の衣服は絹紬・木綿・麻布の外一切着用させなかつたりして、其の令は甚だ苛酷であつたので民望を失ひ、殊に印幡沼開鑿に當りて物議の起つたのと、江戸・大阪十里四方を幕府の直轄地と爲さんとして、反抗を生じたることによりて、天保十四年職を免ぜられた。かくて改革の目的を達する能はず、遂に失敗に終つたのである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 江戸の極盛時は何時か。何故か。(2) 家齊の時代は何故幕府の衰亡の兆が現はれたか。

(3) 天保の改革は何か。(4) 天保の改革は何故に失敗したか。成功を期するに如何にすればよかつたか。(5) 之より幕府は何うなるか。三 質疑應答。

四 江戸幕府の消長の主要について次の問答する。

(1) 幕府の創業時代は何時か。(2) 幕府の基礎を鞏固にしたのは誰か。(3) 幕府の弊政により其の紀綱の弛んだのは何時か。(4) 幕府の振興した時代は如何。

第五 尊王論と國學の勃興 (二時間)

□要旨 學問の復興するに及び、國史文學の破究盛に興り、従つて我國體も明になり大義名分の忽にすべからざるを覺り、尊王の思想勃興するに至つたことを知らせるのである。

□教授上の注意

一 尊王論は三家の一、殊に天下の副將軍を以て任じてゐる水戸侯光圀に始り、遂に天下を動すに至れるは、時勢の推移自然の氣運であるこゝを覺らせる。二 國學勃興と尊王論の興起との關係を明にする。三 鎌倉幕府創設以後に於ける朝幕の關係、乃至公武衝突の事歴に就いては概觀をさせる。

□教材の區分 第一時、尊王論漸く起る、尊王論者の輩出。第二時、國學の勃興。

第一時 尊王論漸く起る、尊王論者の輩出

□目的 學問の普及の結果我國體明かとなり、尊王論起るに及び其の論者輩出したる次第を説き、維新の大業の由來する所を覺らせるのである。

□教具 高山彦九郎、頼山陽の畫像、日本外史・日本政記の一部。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1) 朝廷の政治は何時から武家の手に移つたか。(2) 當時我國民は我國體を知つてゐたであらうか。何故か。(3) 我國體は何によつて明にされる様になつたか。(4) 大日本史を編纂した人は誰か。
二 目的指示。

□教授 一 【尊王論漸く起る】

(1) 幕政時代に於ける國民の思想。源頼朝幕府を開き武家政治の基礎を立て、時に治亂興亡の變遷はあつても、建武中興の外は政權常に武家の手にあつた。されば人民何時しか之になれて、我が國體を忘れ將軍あるを知りて朝廷あるを知らざる者さへある様になつた。

(2) 我國體明になる。然るに江戸幕府の時代となつては學問大に開け、殊に徳川光圀が大日本史を編纂して以來、國史の研究頗る興つて、世人漸く我國體の特異なる次第を明かにし、武家政治の非を覺る様になつた。幕府が武家諸法度十三箇條、禁中竝公家中諸法度十七箇條を頒ちて、天皇の學問を定め親王を三公の下に置き、武家の官を公家當官の外とする等條項を定めたり。又秀忠の女和子を後水尾天皇の後宮に入れ、御附武士を置き中宮御所條目を定めて、權勢を朝廷に張つたりして、幕府は内外より皇室・公卿の行動を監視し、毎に法度を厲行して、時に皇室の威嚴を毀損し奉る事さへあつた。寛永の初天皇が僧澤庵等に紫衣を賜つたが、幕府は其の公家諸法度に違へるを名として之を奪つた。天皇は逆鱗あらせられ、俄に位を皇女(明正天皇)に譲られたのである。

かくの如く幕府が常に朝廷を抑壓し奉れる所爲あるを憤りて、尊王の大義を説くものが現はれた。乃ち其の魁は竹内式部である。

二【尊王論者の輩出】

(1) 竹内式部 式部は越後の人で、享保年中京都に出でて徳大寺家の家士となり、山崎闇齋の高弟(玉木葦齋)に従ひて、垂加流の神道を修め、又兵學・武術に長じてゐた。常に皇室の衰微を慨き、昔日の隆盛に復せんことを期してゐたが、紀元二千四百年代の初頃(寶曆年中將軍家重の時)朝臣の爲に書を講ずるや、特に我國體を明かにし尊王の大義を論じ、以て政權の恢復すべき所以を唱へた。然るに前關白等幕府を憚りて、神書の叢覽を諫め奉り、京都の所司代は式部に從學せる諸公卿が、武器を新調する由を聞き式部を捕へ、此等の朝臣には永蟄居を命じた。されど式部の罪狀を得ぬにより、擅に公卿の雷に應じ神道を講じ、教導宜しからず。」との名の下に京都及江戸を追放した。山縣大貳の獄起るに及び、連坐する所ありて囚はれ、糺問の後關係なきことが明白となつたに拘はらず、追放の後京都に入つたといふ名の下に、八丈島に流され途中病死した。年五十六、正四位を贈られた。

(2) 山縣大貳・藤井右門 式部が京都を追放されて後、武家政治の非を論ずるもの漸く起り、家治の時に至りかねて式部と往來して、其の志を同じうした山縣大貳・藤井右門の如きは、朝廷の御衰微

を慨くの餘り、其の言過激に涉つた爲、大貳は斬られ、右門は梟せられた。時に大貳四十二、右門四十八、共に從四位を贈られた。大貳は甲斐の人で山崎闇齋の高弟三宅尙齋の門人、後京に出て學び諸子百家の學に通じてゐた。江戸に來るや長澤町に住し、生徒を教授したるに從學するもの數百人、其の兵學を説くや強いて江戸城の攻撃に擬し、地圖を展開して其の方法を論じ、又例を諸國の要害城池に取つてゐた。大貳夙に皇室の御衰微を慨き、武家の專權を憤つて人と語る毎に、名分を説き直言して憚る所がなかつた。正親町三條家の家臣、藤井右門・大貳の説に推服し、之を祖述して甲府及江戸城の攻撃法を説いた。かくて門生多く、尊王論は將軍の膝下より興起せんとする勢であつたが、遂に幕府の爲に刑せられたのである。

(3) 高山彦九郎及蒲生君平 大貳等が刑せられた後は、天下口を閉ぢて復幕府の不義を論ずる者はなかつたが、尊王の大義を解

皇統綿綿寔祚長久の事
と云ふくくつ、もの餘りの事
事と知るべ

高山正山
京日記の
一部

なかつたが、尊王の大義を解するもの益多く、家齊の時は高山彦九郎・蒲生君平時を同じうして現はれた。彦九郎は上野の人、十三歳で太平記を読み、大に發憤する所あり。

年十八、出でて京都に行き居ること二年餘、之より諸方を遊歴して遍く學者を訪ね、志士に接しては王道の衰頹を慨き、時に流涕することがあつた。天明三年三度京に遊び、諸公卿の門に入出し禁裡を拜觀するこゝ九回に及び、感極まりて手の舞ひ足の踏む所を知らなかつた。彼の三條橋上より、遙に皇居を伏拜したのは此の頃である。後奥羽地方に赴いたが松平定信の皇居を擴張した後、再び京都に歸り新宮を拜し大に喜んだ。彦九郎の名は遂に光格天皇の叡聞に入り、夜中私に天顔を拜し奉るや、大に喜んで「われをわれしろしめすかやすめらぎの玉の御聲のかゝるうれしさ」と歌つた。之より西國遊歴の途に上り、盛に尊王の大義を唱へたが、志を得ずして筑後久留米で自殺した。年四十七、蒲生君平は下野宇都宮の人、四方に遊歴し殆ど足跡の至らぬ所はなかつた。京に入るや近郊に出でて遍く諸陵を釋ね、又材料を古書遺聞の中に求めた。君平は之より大和に入り、歴朝の帝陵を探り海を超えて四國に渡り、轉じて佐渡に航して歸つた。かくて四方歴遊によつて得た資料を以て山陵志をつくり、其の修復を怠るべからざるこゝを論じ、幕府に上つたが、幕府は浪人處士の容喙すべきことではないとて、其の不遜を詰つたが君平は之に抗辯した。幕府は之を刑せんとしたが林大學頭舊交あり、之を救護したので赦された。享年四十六、彦九郎・君平及林子平の三人を寛政の三奇人といつてゐる。

(4) 頼山陽 名は襄、父は安藝竹原の人であるが、山陽は大阪で生れた。江戸に行き尾藤二洲に學び、後京都に住して生徒に教授した。人と爲り氣節あり深く時勢を憤り、日本外史を著して王家失權、武家興亡の由來を述べ、以て忠邪の迹を明にした。晩年日本政記を著したが、天保三年(二四九二)五十三で歿した。二書世に出づるに及んで天下齊しく之を愛讀し、國史の知識爲に普及し、尊王の大義を辨するもの甚だ多くなり、人心之が爲に益、鼓舞せられた。其の子三樹三郎は後に國事に斃れた。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 頼朝以後幕政時代に於ける國民の思想は如何。(2) 尊王論の起る様になつたのは何故か。其の魁は誰か。(3) 尊王論者の人々は誰達か。(4) 竹内式部・山縣大貳及藤井右門は如何にして尊王の大義を論じたか。(5) 高山彦九郎・蒲生君平は如何。(6) 國史の智識の普及されたのは何によるか。三 質疑應答。

第二時 國學の勃興

□目的 尊王論の漸く盛なるに當りて國學勃興し、古史・古文の研究盛になりて尊王論を刺戟し、世人をして益我國體の尊嚴なるを覺らしめたことを知らせるのである。

□教具 本居宣長、塙保己一の畫像。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1) 尊王論は如何にして起つたか。(2) 尊王論者の主なる人々は誰々か。二 目的指示。

□教授 【國學の勃興】

(1) 國學と尊王論 尊王論の漸く盛なるに當り、國學勃興し更に之を刺戟して益々其の勢を助けたのである。即國學者に依つて古史・古文の研究盛になり、儒・佛以外に我國には我古道の存在せるを喝破して、我國體を明にしたのである。當時の漢學者は動もすれば、支那を中華と名して之を尊び、荻生徂徠の如きは自ら蔑みて、東夷と稱した位で、我國固有の道棄て徒らに外國の道に心酔するといふ有様であつたが、國學者は大に之を慨いて儒教を排斥した。かくて我國體を尊び尊王論に益々油を注いだのである。

(2) 僧契沖 契沖は攝津尼が崎の藩士で光圀の頃の人である。幼にして剃髮佛門に歸したが、夙に經書・國史を涉獵し最も歌學に長じ、萬葉集に精しく、我國の古文を講究して發明する所が多かつた。光圀は萬葉集の註釋を得んとて、遙に之を契沖に求めたが、契沖は之を辭し後萬葉代匠記を著して光圀に上つた。光圀は其の學徳を慕ふて之を招いたが應ぜなかつたので、之より契沖の世を終ふるまで存問は絶えなかつたといふことである。契沖母に仕へて至孝、其母没するに及びて大阪高津の圓珠庵に居り、著述に従事し元祿十四年歿した。年六十二。

(3) 荷田春滿 世々山城の伏見稻荷の祠官である。大に國學を唱へ復古を以て己が任とし國史・律令に精しかつたから就いて學ぶ者が多かつた。享保年中江戸に至り吉宗の内命を受けて幕吏に教授したが、後病を得て歸つた。時に元文元年(二三九六)年六十九。

(4) 加茂眞淵 眞淵は春滿の門人で、遠江の賀茂社の祠官の子である。江戸に出て子弟に教へてゐたが、後田安宗武に仕へた。其の著述には冠辭考等頗る多い。明和六年(二四二九)年七十三で歿した。

(5) 本居宣長 宣長は眞淵の門人である。伊勢の松阪の人、其の號を鈴屋といふは、常に其書齋に小鈴を掛け、氣倦めば之を鳴して心を慰めてゐたからである。醫を業としてゐたが眞淵に學ぶに及び學大に進み、來り學ぶ者前後四百八十、和學文章より國史記録の類に至る迄通曉せざるはなく、多くの著書の中で最も有名なるは古事記傳で、明和元年より寛政十年まで三十五年を費してゐる。畢生の心血を注げる著作であるだけ、考證の精密、論斷の明確、千載の疑問を氷解せしむるに足るものである。國學此に大成した。當時漢學者の中には、儒教に心酔する餘り支那を中華とし、又聖人君子の本土を皇國の尊きを忘れて之を卑しめ、内外本末を誤るものもあるを慨き、努めて儒學を排斥し、敬神尊王の論を主張したのである。性櫻花を愛し、自ら己の畫像に題して、「敷島の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」を詠じた歌は人口に膾炙して居る。享和元年(二四六一)年七十二で歿した。從三位を贈らる。

- (6) 平田篤胤 秋田藩士の子である。本居宣長の學を奉じ國學を究め、力を皇道の闡明に盡し、儒佛を攻撃し教授著述を事とした。其の著百餘、就中古史成文等が有名である。天保十三年(二五〇二)六十八で歿した。世に春滿・真淵・宣長・篤胤を併せて、國學の四大人といふのである。
- (7) 塙保己一 宣長と同じ頃出た人で武州の保木野村で生る。七歳で盲になつたが博聞強記で古典に通じ、江戸の麴町に和學講談所を設け、群書類従を編纂して世に傳へた。或夜子弟に教授せんとするや、風の爲燈火が消えたので生徒は大に狼狽し、保己一は却て其の不便を笑つたといふことである。當時「番町で目あき目くらに物をきき」といふ句がある。温容を以て諸生を待ち、衣食等甚だ質素であつた。文政四年九月二十日年七十六で歿した。かく古史・古文の研究意、盛になつたから、世人は我國體を知り、大義名分の忽にすべからざることを明にする様になつた。

□挿畫の説明

- 一 【本居宣長】 本圖は宣長が六十一歳の時、自己の肖像を畫かせ其の上に「敷島の……」の歌を題して、知人に配つたものである。服装は明かでないが、髪は茶萱なるべく、上布は被布にして黒色、袴は白茶色の様である。
- 二 【塙保己一】 頭は被れるは白色の頭巾で、着物は白綸子である。上衣は薄赤地に朱模様あるものである。本圖は群書類従總目錄の口繪にあるものである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

- (1) 國學は何故尊王論の勢を助けたか。(2) 最初國學を研究した人は誰か。契沖に就いて語れ。
- (3) 國學を大成したのは誰か。宣長に就いて語れ。(4) 國學の四大人とは誰か。此の外に誰があるか。保己一の事蹟を語れ。(5) 之等の國學者の儒學に對する態度は何うであつたか。

□備考

- △ふみわけよ 倭にはあらぬ唐鳥の 跡を見るのみ人の道かは (春滿)
- △もろこしの 人に見せばやみよしのの 吉野の山の山櫻花 (真淵)
- △飛驒たくみ ほめて造れる真木柱 立てし心は動かざらまし (同人)
- △人はよし からにつくとも我杖は やまと島根にたてんとぞ思ふ (篤胤)

第一六 外艦の渡來と開港の顛末 (五時間)

□要旨

尊王論勃興の時にあたりて、外國との關係を生じ幕府其の處置に窮し、恣に開港するに至り次第を明にし、世論大に沸騰し、遂に江戸幕府の衰亡に至りし有様を知せるのである。

□教授上の注意

- 一 露國の東漸及英國の印度經略の概要を授け、世界の趨勢は已に葡・西・蘭の發展時代過ぎ、英國

の世界政策、露國の大野心、米國の發展等に就いて知らせる。二 米艦の來るや幕府狼狽して上勅裁を仰ぎ下諸侯に諮詢し家康以來の政策茲に破る。乃上朝廷の制肘を招き、下諸侯の幕政を論ずるの端を開く、以て幕府の滅亡の迫れることを察せしめる。三 江戸幕末は開國・攘夷・尊王の思想、渦巻きをなし、益々複雑となり、前古未曾有の大波瀾を生じた當時の有様を想像させる。四 和親條約と通商條約との別、并に其の要領を知らせる。五 通商條約締結當時に於ける、直弼の處置に就いて冷靜に批判させる。

□教材の區分 第一時、東洋の形勢一變せんす、北門の警備。第二時、外國船擊攘の令、洋學。第三時、ベルリの渡來と和親條約の締結。第四時、通商條約の締結と繼嗣の選定。第五時、安政の大獄と櫻田門外の變。

第一時 東洋の形勢一變せんす、北門の警備

□目的 家光の鎖國の方針を確立してから百五十年、其の間世界の大勢は刻々推移して葡・西・蘭の諸國衰へ、露・英の二國次第に東方經略の歩を進め、此に東洋の形勢一變したる次第を説き、且つ幕府が江戸近海、及北邊の警備を計つたことを知らせるのである。

□教具 世界地圖、アジア地圖、伊能忠敬の畫像。

□方法、豫備 一次の事項問答。

(1) 最初我國に來て貿易した西洋人は何國人か。何處を根據地してゐたか。(2) 家康の時には更に何國人が渡來して貿易したか。(3) 家康の海外政策は何うであつたか。(4) 家光が鎖國するに至つたのは何故か。鎖國の結果は如何。二 目的指示。

□教授 一 【東洋の形勢一變せんす】

(1) 世界の大勢漸く推移す。家光が鎖國の方針を確立して以來百五十年、國民の海外に航する者全く跡を絶ち、外人の渡來するものも僅かに和蘭人・支那人のみであつたから、國民は國內の太平に狃れ、外國の事に關しては殆ど思を致すことがなかつたのである。かゝる間に世界の大勢は漸く推移し、葡・西兩國に次いで和蘭は大に發展してゐたが、英國は印度に於て佛國の競争に勝ち、クライブ等が其の經營の任に當りて大に成功し、更に進んで我國に接近して來た。又露國は西南に對して發展の餘地少き爲、大に東方に志しコサック人の西伯利亞遠征を始めてから、恰も無人の境を行くが如く東進し、將軍綱吉の頃には既にカムチャッカ半島を經略し、進んでオホーツク海を航して我北邊を窺つたのである。將軍家齊の頃西洋では已に汽船の發明があり、航海の業大に進歩したので之等の國は容易に來航する様になつたのである。西半球の米國も亦新興の勢に乗じて東洋に着目する様になつた。

(2) 林子平の海防論。林子平は夙に此の形勢を察して海防を説いたのである。子平は仙臺藩の人、



(藏氏彦文槻大)平子林



(史學醫本日)澤玄槻大

軍學・經濟・和歌・地理等に通じてゐた。或は蝦夷に遊びて北邊の消息を探り、以て目を北邊に注ぎ、或は屢、長崎に遊びて海外の形勢を探り、よく大勢に通じ、斯くて書を上りて時政を論じ、救済の策を献ずるこゝ前後三回に及んだ。又蘭人の説により北邊防備の策を建て、天明五年三國通覽を著し、翌六年海國兵談を著した。之により日本の三隣國及朝鮮・琉球・蝦夷の地理を明にし、又彼の三隣國及其の他の諸外國より海寇の來るあらんことを説き、海防の忽にすべからざるこゝを詳説した。幕府は之を以て子平が奇怪異説を述べて人心を動搖せしむるものとし、刊行物版木を沒收し、子平は仙臺藩の兄の所に禁錮を命ぜられた。「親もなく妻なく子なく版木なし金もなければ死にたくもなし」と、歌ひ、自ら六無齋と號してゐたが遂に幽囚中に歿した。年五十六。

二 【北門の警備】

(1) 露國人の來航 然るに子平の先見は過たず、寛政四年(二四五二)即子平の罪せられた年の秋、露國の船(使者ラックスマン)我漂民を送りて北海道根室に來り、貿易を開かんこゝを求めた。幕吏は國法により信牌を與へて長崎に至らせた。是に於て幕府も大に海防の必要を覺り、沿海の諸侯に命じて海防を嚴にせしめ、松平定信をして伊豆・相模等の海岸を巡視せしめたのである。

(2) 近藤重藏・間宮林藏 幕府は北邊の警備の重すべきを認め、重藏及林藏等をして邊境を探險せしめた。重藏は江戸の人、名は守重、寛政十年蝦夷探險を試みた。後ち勘定役となり更に蝦夷探險を命ぜられ、寛政十二年高田屋嘉兵衛等と船に乗り、擇捉タンネモイに上陸し土人を撫育し、且つ露人の建てた十字架を撤して、「大日本擇捉府」と云ふ標柱を樹てた。其の後三回此の地に出張して探險した。重藏は小普請役或は書物奉行となつたが、文政十二年、年五十九で歿した。

□挿書の説明 重藏が擇捉島に標柱を立てゝゐる所、立てるは即ち重藏で、跪ける武士は同行者木村謙次、他の二人は土人で長髪跣足腰に小刀を帯びてゐる。間宮林藏は常陸の人、文化三年幕府は北邊防備の爲松前に奉行を置いた。林藏は其の奉行の命により、樺太島を探險した。樺太の島なるこゝを發見したのは林藏で、其の大陸の海峡を間宮海峡といふのは之が爲である。林藏は單身獨行深く北地に入り、海峡を越えて西伯利亞に至り、風土・人情・地勢等を視察して松前に歸つた。

東韃紀行といふ書を著して之を述べた。吾國人の西伯利亞に入つたのは之が始めである。

(3) 伊能忠敬 幕府は忠敬をして北海道の海岸を測量せしめた。忠敬は曆學者である。寛政六年高橋東岡に西洋曆法を學び、又推歩測量の術を研究した。幕府の命に依り北海道の海岸は勿論、更に全國に涉りて前後十七年を費して精密な調査を終へた。文化四年四月年七十七で死んだ。其の製作した地圖は近年に至るまで尙本邦地圖の基本であつた。東京芝公園に記念碑がある。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 我國鎖國以來世界の形勢は如何なつたか。(2) 林子平の事蹟を語れ。(3) 幕府は何故北門の警備に着目する様になつたか。(4) 近藤重藏や間宮林藏の邊境探險の様相を語れ。(5) 伊能忠敬は何うしたか。北海道の海岸測量を命ぜられたは何故か。忠敬に就いて感じたことは何か。

三 質疑應答。

第二時 外國船擊攘の令、洋學

□目的 英・露二國船の我國を騷がしたるにより、幕府遂に外國船擊攘の令を下したが、獨り蘭學者のみは世界の大勢に通じ、開港の意見を有し、遂に幕府の處置に反對するものありし次第を授けるのである。

□教具 日本地圖、前野良澤・杉田玄白・渡邊登・高野長英等の畫像。

□方法、豫備 一次の問答。

(1) 我國民が國內で太平の眠をむさほつてゐた間に、東洋の形勢は如何變化したか。(2) 幕府は如何にして北門の警備に意を用ゐたか。(3) 徳川吉宗は何故洋書の禁を弛めたか。二 目的指示。

□教授 一 【外國船擊攘の令】

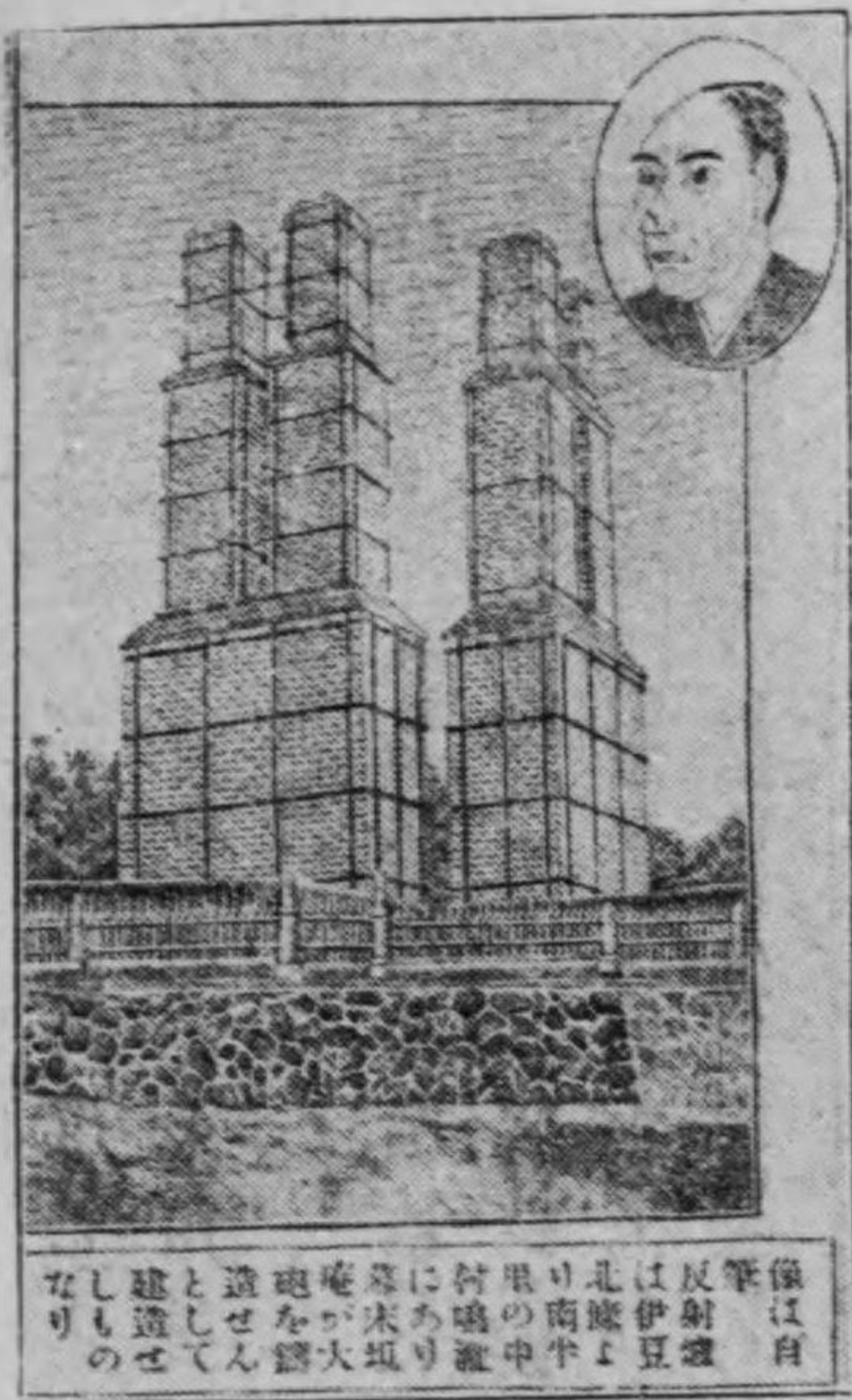
(1) 外船の亂暴 先に露船が我漂民を送りて根室に來たが、幕府は之に信牌を與へて長崎にやつた。文化元年九月露國の使節(レザノフ)又我漂民を護送して長崎に來り、信牌を示し和親通商を求めたが、幕府は遂に國禁の故を以て之を拒絶した。是に於て露人は大に怒り、或は樺太に寇し、或は擇捉を掠めて横暴の舉動に及んだ。文化五年(二四六八)英船一隻、和蘭の旗を掲げて長崎に來た。奉行松平康英例に依つて蘭人及吏員を遣りて之を檢したのに、俄に英旗を掲げ蘭人を抑留して飲料水・食料品を要求し、夜間端舟を放ちて港内を往來した。康英大に憤慨して之を撃たんとしたが、當時佐賀藩等の戌兵密に歸國してゐたので撃つ能はず、康英は之を幕府に報するに共に遂に自刃した。此は英人が出島にある蘭人を攻撃するのが目的で日本に敵對したのではない。

(2) 攘夷令 是より先幕府は外國船來らば之を臨檢し、もし之を拒まば撃攘ふべしと諸侯に令した(寛政三年)。更に令を下して露人の薪水・食物等に苦しめるものあらば之を與へて去らしめ、上陸せんとせば撃攘ふべしと傳へた(文化三年)が、英・露船の亂暴するに及び、攘夷論漸く起り文政八

年(二四八五)外國船海岸に近づかば直に撃攘ふべしと諸藩に傳へた。

二【洋學】

(1)攘夷と我國當時の真相 幕府は斯の如く攘夷の方針を執つたが、今や世界の大勢は其の鎖國政
策を定めた當時とは、頗る趣を異にしてゐるものがある。近代に於ける交通機關の發達は、恰も
地球の面積を縮めた様な結果になり、遠隔の諸國も相往來するこゝが容易になつた。殊に外國船
の東洋に來るものは益々其の數を加へた。されど多年の太平に狃れた國民は、未だ海外の事情に



江川太郎左衛門及反射爐

暗かつた爲、攘夷の論を唱へたのであ
つたが、獨り蘭學者の中には世界の
勢に通じ、開港の利を説くものが多
かつた。

(2)蘭學者 初め幕府が鎖國の方針を執
るや、洋書を讀むこゝをも嚴禁したが、
吉宗は西洋文物の發達せるを知り、洋
書の禁を弛めて切支丹に關係なきもの
は之を輸入するこゝを許し、又青木文

藏(昆陽)を長崎に遣はして和蘭語を學ばせたので、之より蘭學を修むる者漸く現はれた。中にも
家治の時前野良澤・杉田玄白等刻苦勉勵遂に能く和蘭語に通じ、協力して解體新書といふ、人身解
剖に關する蘭書を翻譯したもの著述した。是實に蘭書翻譯の嚆矢である。良澤は豊前中津藩醫、
蘭學を文藏に受け更に長崎に赴き、通詞に就いて講習した。享和三年八十一で歿した。玄白は若
狭小濱藩醫で、文化十年八十五で歿した。世に新井白石・青木昆陽及良澤・玄白の四人を蘭學淵源
の四先生といふのである。家齊の時仙臺藩醫大槻玄澤(文政十年歿す年七十一)は玄白に蘭學を學
び、蘭學階梯といふ和蘭語法の書物を著した。是より蘭學の講習益進み、西洋學術・技藝の傳
來次第に多く、又海防の論盛なるに伴ひて其の兵學砲術(江川太郎左衛門の如き)を研究するも
のさへ出た。されば是等の蘭學者中には、我鎖國政策の到底持續し難く、攘夷の遂に實行すべ
からざるを知り、開港の意見を有するものも少なくなつた。渡邊登(華山)高野長英の如きは之であ
る。登は三河田原藩士で、夙に蘭學を講じ種々の書物を著はしてゐたが、遂に慎機論を著し、英船
撃攘の非を論じた。長英は陸中水澤の人で、江戸に出て醫學を修め後長崎に遊學し、夢物語の書
を作りて亦英船撃攘の非を述べた。幕府は何れも造言世を惑はすものとし、天保十年二人を捕へ
て獄に投じた。登は後田原に禁錮せられたが、其の主累を及ぼさんこゝを恐れて、十二年遂に
自殺した。年四十九、長英も江戸の獄火に際し一旦脱走したが、嘉永三年十月捕はれんとするに

及びて亦自殺した。年四十七。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1)何故外國船擊攘の令を下すに至つたか。(2)家光以後世界の趨勢は何うなつたか。(3)幕府が尙鎖國政策を維持するのは是非如何。其の不利を知つてゐたのは誰か。(4)蘭學は誰から始められたか。蘭學は誰の爲に其の芽を出したのか。(5)蘭學者の主なる人々は誰か。(6)蘭書を始めて翻譯したのは誰か。蘭學階梯といふ書を著はして學習を便にしたのは誰か。(7)蘭學の講習進むに従ひて何が傳來したか。(8)鎖國政策の不利を論じたのは誰か。長英・登について語れ。三 質疑應答。

第三時 ベルリの渡來と和親條約の締結

□目的 幕府は鎖國の方針を續けてゐたが、遂にベルリの渡來により其の態度を一變せねばならぬ様になり、爲に和親條約を締結するに至つた次第を知、せるのである。

□教具 アジア地圖及關東地方地圖、ベルリの畫像、幕府ベルリ接待の圖。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1)外國船擊攘の令を傳へるに至つた次第を語れ。(2)蘭學者の主なる人々及其の主張を語れ。二 目的指示。

□教授 【ベルリの渡來と和親條約の締結】

(1)幕府の舊慣墨守 幕府は鎖國の非を論ずる者を罪し、ひたすら開港論の鎖壓を試みたけれども、大勢の趣く所到底抵抗すべきに非ず、幕府も之が爲に天保十三年(二五〇二)外國船擊攘の令を弛め、「外國船が難風に遭ひ漂着したものは、上陸を許さずして薪水・食糧を與へて、之を歸航せしむる事。」とした。所謂天保令である。次で和蘭人も屢書を幕府に上つて、鎖國方針の永續せられぬことを忠告した。されど幕府は事毎に舊慣に依り、殊に今尙外國の事情に通ぜざるが爲に祖法變じ難しきて、之に従はなかつたのである。

(2)ベルリの渡來と幕府の態度 一變 嘉永六年(二五二二)六月三日北米合衆國水師提督ベルリは、突然相模の浦賀に來た。ベルリは先年ミシシッピー號に乗りて米國を發し、大西洋を横りて亞弗利加の南端を經、支那の香港上海に至り艦隊を整へ、船艦四隻を率ゐる浦賀に來り、大統領フィルムアの親書を呈して修好通商を請ひ、もし容れられなければ兵力にも訴ふべき勢を示した。即幕府は最初長崎廻航の事を傳へたが、斷乎として拒絶したので大に狼狽し、老中阿部正弘は將軍の命を受けて、浦賀奉行をして米國の國書を久里濱(浦賀)で受取らするこゝにしたが、其の間米艦は或は空砲を放ち、或は近海を測量して威嚇したのである。茲に於て幕府は即今迄の態度を一變せねばならぬ様になつたのである。幕府は久里濱に米使引接所を設け、戸田浦賀奉行等に命じベルリと會見させたが、ベルリは六月九日將士三百餘人で上陸し、大統領の教書及方物を獻じて互市を

求めた。其の大意は「我國太平洋を隔て、貴國と相對し、汽船は十七八晝夜で達し得られる。拙土は國をなすこと新なれど、人口増加して貿易年と共に盛である。幸に貴國我請を容れ、海港を開き貿易を許さば、國家を利すること勿論である。又我國民の貴國の近海で颶風に苦められ、又食糧等に缺乏し憐を貴國に請ふ者あらば、幸に救護せられんことを望む。」と、幕吏は「貴國の意は諒するも、今將軍病中であるから即答し難ければ、明年長崎に來りて命を待たれたし。」と答へて、一旦ペルリを米國へ歸らせた。ペルリは琉球地方へ行きて明年を待つて居た。



天皇に
奉事せ
し故子
爵親羽
美御前
が直家
小山正
太郎を
して語
高せし
めたる
油繪な
り

公平衆議に依つて國論を定めんとし
從來は内治・外交一切の事幕府の獨
斷で處置したのを、今や事態の重大
なるを以て一方には朝廷に奏上し、
天 一方には諸侯に諮詢して策を徴した
皇 のである。孝明天皇は痛く大御心を
惱ませられ、御身を以て困難に代ら
せられんことを祈られ、畏多くも斷



昭齊川德
(藏家爵侯川德)

食迄せられた。幕府の優柔不斷を慨きたまひて、
「あぢきなやまたあぢきなや葦原の頼む甲斐なき武藏野の原」と、

幕府は之より國家の大事に關して特に勅裁を仰ぎ、諸侯も亦幕政に對して容喙するの端を開いた。是に於て物議騒然として起り、慷慨の士浮浪の徒之に乗じ、開國攘夷兩黨の軋轢益々盛になつた。徳川齊昭などは戦を主張し國內の鐘を集めて大砲を鑄造し、七十五門を献じた。井伊直弼・戸田伊豆守(浦賀奉行)・勝安房守・江川太郎左衛門・高島秋帆等は世界の氣勢に鑑みて開國を主張した。

(4)ペルリの再來 將軍家慶薨じ子家定十三代將軍となり、幕府多事にして對外の方針未だ決定に至らざる中に、翌安政元年(二五二四)正月ペルリは前約に依り軍艦七隻を率ゐ、浦賀本牧岬に來り國書の返答を求めた。是より先ペルリは我國を去りて琉球に至り、更に小笠原島を占領して再來したのである。後二隻來り大船艦合計九隻になつた。幕府止むを得ず林大學頭等を遣はし、二

月十日より横濱村で談判を開いた。

(5) 和親條約 彼此の吏員は三月三日商議了り記名調印した。之所謂神奈川條約十二ヶ條である。其の主なる者は漂流民を懇待すること、薪水食料を給すること、下田函館の二港を開くこと、米國の官吏を下田に駐在せしむること等である。されど通商のことは未だ許さなかつた。此の時信濃の人佐久間象山夙に開國の意見を有して居たが、其門人吉田松陰は私にベルリの船に乗じて海外に赴き、外國の事情を知らんとしたが、ベルリに許されず空しく歸つたが、事あらはれて罪せられ、象山も亦連坐の罪に問はれた。

幕府は次で英吉利・露西亞・和蘭の三國に對しても亦殆ど之と同様の條約を結んだ。

□整理 一設問。

(1) 幕府が對外態度を一變する様になつたのは何故か。(2) ベルリが浦賀に来て何を要求したか。幕府は何と答へたか。(3) ベルリが歸つた後幕府は如何にしたか。(4) 幕府が朝廷に事の由を奏上し、又諸侯の意見を徴したに就いて何か感じたことはなにか。(5) 翌安政元年ベルリが再び來た時幕府は何うしたか。(6) 和親條約の主なるものは何か。次で何國と結んだか。二 教科書の讀解。

第四時 通商條約の締結と繼嗣の選定

□目的 幕府はハルリスの來るに及び、遂に通商條約の草案を議し、勅裁を仰がしめたが、偶、繼嗣

問題起り内外多事を極め、且つハルリスが條約調印を逼つたので、幕府已むを得ず之に調印した次第を授け、且つ大老井伊直弼の處置について批評考究させる。

□教具 日本地圖、徳川齊昭・井伊直弼畫像。

□方法、豫備 一次の問答。

(1) 米國と和親條約を締結するに至つたのは何故か。(2) 此の條約で何が定められてゐるか。(3) 此外に何國と條約を結んだか。二 目的指示。

□教授 【通商條約の締結と繼嗣の選定】

(1) ハルリスの來朝 安政元年の和親條約の條款により、米國はハルリスを下田駐割の米國總領事として我國に差遣した。ハルリスはニューヨークの商人で數年東洋貿易に従事し、曾て支那にありて代理領事をしてゐた人である。安政三年七月ハルリスは下田に來りて在留の旨を告げ、且つ大統領(ヒアース)の書を持ち將軍に謁見せんことを請ふた。即前の和親條約には通商互市のこまがないので、ハルリスは大統領より全權を委任され、開港貿易の目的を遂げんが爲である。下田奉行は百方之を拒絶したがハルリスは之に應ぜず。時に堀田正睦は阿部正弘に代つて老中となり、専ら外交のこまを司つてゐたが、夙に開港説に傾きつゝあつた人である。翌安政四年十月ハルリスの請を入れ江戸入府を許可した。ハルリスは十月七日下田を發し、廿一日將軍に謁して國書・方

物を献じた。之より堀田正睦を訪問して世界の形勢を説きて我領國政策の不可なるを論じ、更に通商を開かんことを要求した。是に於て幕府は已むを得ず之を通商條約の草案を議し、下田・函館の外に、神奈川(横濱)・兵庫(神戸)・長崎・新潟の四港を開き、神奈川開港の後は下田を閉づべきことを定めた。

(2) 勅裁を仰ぐ。幕府は物議を憚り、現下の形勢上勅許を得なければ調印することが出来ぬとして、調印を延期することを求め、堀田正睦をして上京勅裁を仰がせた。是より先攘夷論が盛で前水戸藩主徳川齊昭の如きは熱心に之を主張し、書を關白(九條尚忠)に致して攘夷の至當であることを論じたが、公卿等之に賛するもの多かったので、孝明天皇(第二百二十代)深く國家の前途を憂慮し給ひ、容易に幕府の請を許されず、更に三家以下諸大名の議を徴して上奏せんことを命ぜられた。

(3) 將軍繼嗣問題。幕府は此の國家多事の際、更に困難を極めたのは將軍繼嗣問題である。將軍家定は多病で政務に堪えず且つ嗣子がなかつたので、越前藩主(松平慶永)・土佐藩主(山内豊信)・薩摩藩主(島津齊彬)等をはじめ、一般の人々は國家多事の際、繼嗣其の人を得なければならぬとして、望を徳川齊昭の子慶喜に囑してゐた。慶喜は齊昭の七男で幼より賢明、先に將軍家慶の旨により一橋家をつぎ令聞があつた。當時朝廷でも年長で賢明なるものを立つべく諡された。然るに又一方では齊昭を嫉視し、慶喜將軍ならば齊昭が諸政に干渉するを恐れ、私かに慶喜を排して紀伊侯

徳川慶福よしむを迎立せんとする一派があり、兩派互に術数を盡して争つた。慶福は家齊の孫で家定の従弟である。



原本は外務省の蔵所にあり、和英兩國の通商條約(文和)の書約

ある。世に之を安政の假條約といふのである。尋いで蘭・露・英・佛の四國と締結した。直弼は勅許

外艦の渡來と開港願末

を待たずして之をやつたので、直弼を非難するの聲が大に起つた。

(5) 條約の内容 我國と合衆國との間に締結されたのは十四條である。其の主なるものは新に神奈



會計長森岡太郎 組頭成瀬善四郎
副使村垣淡路守 正使新見豐前守 監察小栗豐後守 (野上介の後)

遣米使節一行(桑港新開所載)

川・新潟・兵庫・長崎・函館の五港を開くこと、互に公使を派して國都に駐め、領事を開港場に遣すこと、日本もし他國と隙を生ずる時は、合衆國大統領之を調停すること、出入貨物に課税すること、日本

在留の外人法を犯す時は駐在領事之を處分すること等である。此の事で領事裁判權の規則は、後年治外法權として外交上の大問題となり、又税則の如きも我に薄くして彼に厚き不公平であつたから、朝野舉つて條約の改正を切望したのである。

(6) 家茂將軍職を襲ぐ 直弼は已に條約調印に就て大に世人の反感を得たが、又一般の輿論を無視して、遂に慶喜を排して紀伊家より幼少なる慶福を迎へて繼嗣と定めたが、間もなく家定薨じたので將軍となつた。之が十四代將軍家茂のこゝである。直弼は之によりても益、世人の非難を得たのである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) ハルリスは我國に來て何を要求したか。(2) 幕府はハルリスの要求に對して何んな草案を議したか。(3) 幕府が勅裁を仰いだ時、孝明天皇は如何にせられたか。(4) 此の際に當つて如何なる問題が起つたか。此の内外多事の際局に當つた者は誰か。(5) 幕府は如何にして遂に條約に調印する様になつたか。(6) 井伊直弼が當時世から非難されたのは何故か。(7) もし直弼が勅許を待つて、何時までも調印せなかつたら何うであつたらう。三 質疑應答。

第五時 安政の大獄 櫻田門外の變

□目的 直弼は條約の調印、繼嗣の選定に反對せる者を罰したが、却つて之が爲怨を受け、遂に櫻

外艦の渡來と開港顛末

田門外に斃れたことを知らせるのである。

□教具 櫻田門外の變の圖、齊昭及吉田松陰・橋本左内の畫像。

□方法、豫備 一 次の問答。

(1)通商條約の締結の次第及内容に就いて語れ。(2)井伊直弼が非難されたのは何故か。

二 目的指示。

□教授 【安政の大獄と櫻田門外の變】

(1)安政の大獄は條約の調印といひ、繼嗣の選定といひ、幕府の處置勅に違ひ、輿論に背くことが多かつたので、遂に勤王志士の激昂となり、水戸・尾張・越前等の親藩を始め、忠士梅田源次郎(雲濱)・頼三樹三郎・吉田寅次郎(松陰)等は大に其處置を非難し、廷臣の間に遊説するものもあつた。安政五年天皇は勅書を水戸侯(慶篤)に賜ひ、幕府をして大老・老中・三家・三卿及列藩に議して内政を整へ、外侮を防ぐべきことを以てせられた。直弼之を知り老中(間部詮勝)を京都に遣はし、調印の事を陳疏せしめ、且幕府の政策に反對するものを逮捕せしめた。更に親王(尊融親王)・前關白(左右大臣)・内大臣等の處分を強要し奉つたので、朝廷はやむなく親王に謹慎を命じ、次で前關白等の落飾を聽して謹慎せしめ、又其の朝臣の處分をせられたものが少くなかつた。幕府は亦齊昭・尾張・越前の諸藩主を蟄居せしめ、慶喜を隱居謹慎せしめた。又大に志士の大搜索を行ひ、死罪・梟

首・遠島・追放・押込等に處した。公卿諸士より學者・僧侶・婦女に至るまで、其の數五十餘人、世に之を安政の大獄と言ふのである。安島帶刀・吉田寅次郎(松陰)・橋本左内・頼三樹三郎・近衛家の老女村岡等皆此の時に罰せられたのである。吉田寅次郎は長州藩士、曾つて佐久間象山に學び、ペルリの來朝するや、夜其の船に至り彼地に渡らんとし、ペルリに許されず遂に歸つたが、幕府の爲罰せられた。後松下松塾を開いて子弟に教授した。後の長門出身の英傑は、大抵此の門より出てゐる。安政六年遂に死罪に處せられた。年三十、靖國神社に合祀せらる。橋本左内は越前藩士、大に勤王の大義を説いてゐたが、安政六年遂に死罪に處せられた。年二十六、頼三樹三郎は安藝の人山陽の子である。安政六年死罪、年三十四、皆靖國神社に合祀せられ、正四位を贈られた。志士をば常に自宅に會合させて、侃々の議を唱道した梁川星巖は事前に病歿し、主謀者目せられた。梅田源次郎は獄中に病死した。

(2)櫻田門外の變は志士の憤怒甚しく、海内怨嗟の聲は直弼に注がれた。殊に水戸藩士佐野竹之助等十七名は、薩摩藩士有村治左衛門と共に之を噎さん計り、萬延元年(二五二〇)三月三日、櫻田門外に集つて其の登城を待つた。直弼の輿降雪を冒して櫻田門にかゝらんとするや、數士突如として出來り訴狀を捧げた。直弼の從士狼藉者として、駕側を離れて之にかけつけたる隙に乗じて、有村等はこれを刺し、直弼の首を擧げた。十八名中五人は死し、他は自首し又は捕へ

られて殺され、中には自殺する者もあつた。此の變は實に幕府の衰亡を速めたるものである。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

- (1) 安政の大獄とは何か。(2) 櫻田門外の變は如何にして起つたか。
- 二 全課の復習。

(1) 幕府が北門の警備に注目した事情を述べよ。(2) 外國船撃攘の令は何故下されたか。(3) 蘭學の起り及蘭學者の主張に就いて語れ。(4) 合衆國等と和親條約締結の由來を語れ。(5) 合衆國等と通商條約締結の由來を述べよ。(6) 直弼が輿論の反抗を得た原因に就いて語れ。(7) 直弼に就いて其施政の是非を批判せよ。四 質疑應答。

第一七 江戸幕府の衰亡と大政奉還 (三時間)

□要旨 幕府の外交は反つて尊王攘夷の議を沸騰せしめ、爲に内外の紛擾を來たしたが、然るに幕府は制御する道を失ひ、威信地に墜ち遂に大政を奉還するに至りし次第を知らすのである。

□教授上の注意

- 一 公武合體は幕府の威信を保ち難く、漸く其の獨立を失ふに至る前兆であるこゝを領解させる。
- 二 下、關及鹿兒島で外國人より蒙つた大打撃は、薩長二藩をして他日諸藩を凌駕し、一層の優勢を

保つに至らしめた良劑であつたこゝを知らせる。三 長州征伐に於ける薩長二藩の連合は王政復古の原動力であるから詳説する。四 將軍家茂の上洛の失體は、幕府の無定見を表はし、又長州征伐の失敗は全く幕府の實力なきを天下に暴露し、諸侯をして幕府を輕視するに至らしめるこゝを知らせる。五 將軍慶喜がよく時勢を洞察し、大義によりて大政を奉還したる其の英斷に就ては、之を味はせねばならぬ。

□教材の區分 第一時、和宮降嫁、攘夷の實行。第二時、蛤御門の變及長州征伐。第三時、大政奉還。

第一時 和宮の降嫁、攘夷の實行

□目的 櫻田門外の變後幕府の威信失墜したので、朝廷の尊嚴を假り奉らんとし、此に和宮の降嫁となり、次で幕府攘夷實行の勅を拜し、又長州が外艦を砲撃するに至つた次第を知らせるのである。

□教具 長藩の外船砲撃圖。

□方法、豫備 一 次の問答。

- (1) 攘夷論は如何にして起つたか。(2) 幕府が通商條約を結ぶに至つたのは何故か。(3) 櫻田變の起り及其の後の幕府の威信に就て語れ。二 目的指示。

□教授 一 【和宮の降嫁】

(1) 公武合體 井伊直弼の害に遭ふや、老中安藤信正等其の後を承けて局に當つた。然るに當時幕

府は威信已に衰へ、諸侯を制して天下に號令するこゝ能はず、乃ち公武合體上下一致を表し、朝廷の尊嚴を假り奉りて國事を處理せんとし、將軍家茂の爲に孝明天皇の御妹、親子内親王(和宮)降嫁を奏請した。當時和宮は御年十六歳で、既に有栖川(熾仁親王)と婚約があられてゐたが、幕府は十年以内を期して攘夷を斷行し、叡慮を安じ奉ることを誓つて、和宮を懇願したのである。是に於て朝廷已むを得ず其の請を容れられ、文久元年(二五二)十二月内親王降嫁せられた。

(2) 志士の憤慨 然るに幕府は毫も攘夷を實行する意なく、却て外人に親しむ風があるので、志士等は「名を美にして皇妹を強奪せるもの」となし、文久二年正月信正を坂下門外に傷けた。

二 『攘夷の實行』

(1) 勅使の東下 此の年四月、薩摩藩主島津久光は公武合體の論を唱へて入京し、志士を鎮めて救濟の策を建てた。次で長州藩主の子毛利元徳も入朝して、共に皇威の振興幕府の改革に就いて盡力した。幕府は正信の老中を止め、且つ直弼によりて罰せられた越前・尾張及慶喜の罪を釋し、親王の永蟄居を解いた。かくて朝幕の關係頗る其の面目を改め、翌月朝廷大原重徳を勅使し、久光を護衛して東下せしめ、將軍の上洛、政治の改革等を命ぜられた。家茂勅を奉じ慶喜を後見とし、前越前侯松本慶永(春嶽)を政事總裁職とし、大に諸政を改革し大名の參觀交代の制を緩め、其の妻子の歸國を許した。此の年八月土佐藩主山内豊範も入京したので、朝廷は京都警衛を命じ、

(藏家爵侯上井) 擊砲關ノ下



でまる至に日八月同りよ日五月八年元治元は關ノ下
は圖。たけ受を擊砲の隊艦合聯國箇四蘭・佛・米・英
るたし影撮くし親の員組乗隊艦同を景光の領占臺砲
。る係にのもるせ寫描に繪油りよ版原

國家の爲盡力すべき内命を賜つた。

(2) 將軍の入京 京都では久光が歸國し、長藩獨り勢力を振つてゐたが、朝廷更に三條實美を勅使とし、豊範をして之を護衛させて東下させられた。幕府をして速に攘夷を實行せしめんが爲である。文久三年三月將軍家茂は入京した。天皇賀茂社に幸し攘夷を祈願あらせられた。家茂も供奉に列した。已にして四月には天皇男山に行幸、八幡の祠前で將軍に攘夷の節刀を賜はんとした。將軍は病と稱して供奉を辭し、後見職の慶喜も亦病と稱して退いた。志士は憤慨して倒幕を公言するに至つた。將軍は其後入朝し攘夷の勅を奉じ、此の年五月十日を以て之が實行の期とした。

(3) 長藩の攘夷實行。此の期日に至り長州藩は、米・佛・蘭等の諸國の船艦を下、關海峡に砲撃して攘夷の先鞭をつけ、六月一日更に米國軍艦と交戦したが共に利あらず、佛國兵上陸して砲臺を破壊し民家を焼燬した。佛・蘭・米三國の公使は相謀りて、商業上重要な内海航路を開放せしめんとし、之を幕府に求めた。幕府は長藩の輕舉を責めしに要領を得なかつたので、四國は十七隻の聯合艦隊を組織し下關に向つた。長藩應戦すること三日、諸砲臺概ね破られ、四國の陸戰隊上陸するに及んで和議始めてなつた。時に元治元年八月、

(4) 薩藩の英艦砲撃。先に島津久光勅使を護りて江戸に下るや、歸途武藏の生麥村を過ぎたのに、偶、横濱在留の英國商人二人、婦人一人騎馬で其の行列を横切つたので、久光の従士無禮なりとて一人を斬り、二人を傷けた。此に於て英人は幕府に逼つて償金十萬磅を得、更に兵艦七隻を率ゐて鹿兒島に至り、被害者の弔恤金を要求したが、薩藩應ぜず。遂に砲火を交へて撃退したのである。時は實に攘夷の期日と定めた文久三年五月より後るゝ事二月の事であつた。是等の戦に於て攘夷論者中にも、我兵器の遠く彼に及ばざるを知り、爲に覺醒せしものも少くなかつた。

□整理 一 教科書の讀解。二 設問。

(1) 和宮は何故降嫁せられたか。(2) 朝廷は何故勅使を東下せしめられたか。(3) 幕府は勅を奉じて何うしたか。何時を以て攘夷の期としたか。(4) 攘夷の實行者は何處か。三 質疑應答。

第二時 蛤御門の變と長州征伐。

□目的 朝廷に於ては攘夷論盛であつたが、忽ち朝議一變して長州は守衛の任を解かれ、此に蛤御門の變を生じ、次で長州征伐となつた次第を明にし、其の結果幕府の威信全く地に墜ちたことを領解させるのである。

□教具 三條實美の寫眞、七卿落の圖。

□方法、豫備 一 次の事項問答。

(1) 和宮降嫁の次第を語れ。(2) 攘夷實行の概要を述べよ。二 目的指示。

□教授 【蛤御門の變と長州征伐】

(1) 朝議一變。文久三年外艦砲撃の報一度傳はるや、攘夷論者の意氣頓に揚り、中には言を攘夷に託し一舉して幕府を討滅せんと企つるものあり。長州の毛利敬視等が朝廷に建議し、三條實美等が之に賛したので、文久三年八月十二日朝廷大和行幸、神武天皇御陵を拜して攘夷親征せられんことを諭旨が下つた。然るに京都守護職松平容保は、公武合體の説を執れる薩藩と謀り、親征の不可を奏上したので、十八日朝議俄に一變して容保等をして禁門を守らしめ、實美等の參内を停め、大和行幸を延引し、長藩は皇居守護の任を解かれた。

(2) 七卿落。かくて攘夷論を唱へて、京都に其の勢力を張れる長藩も在京を禁じられ、又常に之と

謀を通じてる中納言三條實美、三條西季知以下の朝臣七人は長州に脱走した。彼吉村寅太郎等が大和に、平野國臣等が但馬に、藤田小四郎・武田耕雲齋等が筑波に兵を擧げて、討幕攘夷を行はんとしたのも此の頃である。

(3) 蛤御門の變は是に於て長州藩士等は深く之を遺憾とし、朝議を復し藩主の冤を訴へんとて、元治元年六月家老福原元圃(越後)以下多人數相率ゐて入京し、歎願書を上りて入京を乞ひた。朝廷慶喜をして元圃に諭し、其の兵を遣し伏見に在りて命を待つべきことを傳へたが、元圃の部下命を奉ぜず、朝廷は慶喜に勅て之を討たせられた。會津・桑名・薩摩等の諸藩の兵は、元圃の軍と蛤御門等に戦ひて之を破つた。此の時長州藩士の彈丸飛び禁中に及ぶものがあつた。

(4) 第一回長州征伐は幕府は先の大和行幸、攘夷親征の擧の後援者は長藩であるから、以來長藩を惡むこと甚しかつたが、此に蛤御門の變で長藩が禁中に向つて發砲したので、朝敵の名を蒙らしむるに好機會を得たのである。幕府乃ち奏請して長州征伐を諸侯に令し、前尾張藩主徳川慶勝を總督とし、元治元年七月四國・山陰・山陽・九州の二十一藩に出兵を命じ、海陸兩路から長州に向はせた。時に長州では藩論二に分れ、一を恭順黨といひ、毛利氏の社稷を存するを第一義とし、藩主敬親父子罪を得、封土を削らるゝも忍ぶべしとした。他を主戰黨といひ、刀折矢竭るまで戦ふべしと主張した。然るに恭順黨勢を得敬親父子は謹慎の意を表し、福原元圃等三家老をして自殺



江戸幕府の衰亡と大政奉還

せしめ、五卿を他藩に移して謝罪することに決した。此に於て慶勝等は元圃等の首を擧げて凱旋した。時に慶應元年正月である。

三 (5) 第二回長州征伐は然るに長州に於ては主戰黨の首領、高杉晋作・山縣有朋等ミ力を協せて恭順黨を倒し、藩主父子を山口に迎へ藩論を定めた。晋作は又木戸孝允・伊藤博文等をして、薩州に連合のこゝとを諫らせたが、此の時薩藩、西郷隆盛・大久保利通等は長藩と連合して幕府倒す謀を定めてゐたから、大に長藩の爲に便宜を計つた。幕府に於ては慶勝の處置を以て寛に失せりとて再征の令を下し、將軍家茂自ら大阪に至り、軍を督し元治二年六月諸軍は長州の境に迫つた。之より先幕府は長藩父子謹慎の實舉らざるこゝ、漫りに武器を調へ武備を整ふること等を擧げて、長藩の使臣

になじつたが、使臣力争して之に屈せないので、幕府は奏請して敬親父子に蟄居を命じ、且封十萬石を削ることとし、五月命を長藩に傳へたが、長藩は之を拒んだので諸軍を進ませたのである。諸藩の中には幕府の再征の謂れなきことをいふもの多く、諸侯出兵の命を奉ぜざるものさへありて、幕軍の士氣振はざるに反し、長州は上下一致して事に當り、加ふるに洋式の兵法を用ゐ、又其の武器頗る精銳であつたから、幕軍到る所に利を失つた。偶、將軍家茂病みて大阪で薨じたので、朝廷乃ち勅して戦を停めしめられたが、其の後幾ばくもなくして孝明天皇崩じ給ひ、翌三年正月明治天皇(百二十一代)踐祚せらるゝに及び、大喪の故を以て遂に征討の兵を解かしめられた。此に於て幕府の再征は全く失敗に終つたのである。

□整理 一 設問。

- (1) 外艦砲撃のこゝがあつて後、朝議が一變したのは何故か。(2) 蛤御門の變は何うして起つたか。
- (3) 幕府は何故長州征伐をしたか。當時長藩の内情は如何。(4) 長州を再征するに至つたのは何故か。(5) 幕府の長州再征の失敗の原因は何か。二 質疑應答。三 教科書の讀解。

□挿書の説明

三條實美等京都の妙法院を出て夜長州に走る。圖中身に蓑を纏へるは三條實美・三條西季知・四條隆謨・東久世通禧・壬生基修・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿で、其の他は長州藩士で七卿を護衛し、暗夜に乗じ暴風雨を侵して、長州に脱走せる様を想像してかいたものである。

第三時 大政奉還

□目的

慶喜賢明時勢を洞察して、遂に大政を奉還した次第を知らせるのである。

□方法、豫備 一 次の問答。

- (1) 幕府の勢が頓に衰へかけたのは何時からか。(2) 長州征伐の原因及結果は如何。二 目的指示。

□教授 【大政奉還】

(1) 慶喜將軍となる。家茂薨じて嗣がなかつたので、慶喜入りて宗家を継ぎ、十五代將軍となつた。然れども此の時既に「府」の威信全く地に墜ち、復救はれない有様であつた。

(2) 討幕の説。長藩は彼の蛤御門の變により、薩藩を悪んでゐたが、幕府を倒して王政を復古するには、有力なる薩藩と提携する必要を認めてゐた。遂に此の兩者を結合させたのは、土佐の坂本龍馬と中岡慎太郎の盡力が多い。坂本・中岡は長藩に行き、長州の高杉・木戸・伊藤、薩州の大久保・西郷等を説いて京都に會合せしめ、二藩連合の契約を成立させた。時に慶應二年正月のことである。此の時西郷は長藩もし幕軍と戦ひて敗れたら、薩藩は之を援くべきことを約し、長藩の爲に長崎の英商から兵器購入の斡旋をしたのであつた。朝廷にあつては岩倉具視王政復古を策し、遙に太宰府の三條實美を意氣相投じ、西郷・大久保等と謀る所があつた。時に薩・長連合の議は熟